

亜希子の頬を涙が流れて落ちた。祐子は直ぐにやってきた。二人はジミーの運転するジープに乗って中国人の経営する中華料理店に向かった。祐子はジミーに同席するように言った。ジミーは祐子の食事に同席することに馴れてきているようだったが、それでも、礼節は保っていた。祐子と亜希子はジミーに気を遣わずに日本語で会話をしながら食事をした。

「亜紀ちゃん、どうして戻って来てしまったの？」

「もう、大丈夫のようですから……それに……」

「それに？」

「わたくしが近くにはまずいと思ったのです」

「どうして？」

「どうしても。わたくしが近くに行ったら、あの方は苦しいでしょうし、周りの人たちも、辛い思いをされると思うので……」

祐子はそれ以上訊こうとしなかった。

「そう、それで、あの人の症状はどんななの？」

「頭と、胸と、お腹と、手と、足に包帯を巻いていました」

「それって、全身じゃないの。ほんとうに大丈夫だったの？手術は成功したの？」

「あの方は、死の淵を彷徨ってから蘇生されたようです。瀕死の状態から生還したようです」

「よほど酷い怪我だったのね。きっとあの人にはまだ達成しなくてはならないことがあるから、海の老人や病院の先生達が助けてくれたのね。よかった。本当によかった」

「お姉様、あの方が達成しなくてはならないことって、何ですか？」

「あなたも知っているはずよ、あの人が行き詰まっていたこと。人々の物質偏重の意識を変えることよ。とっても難しいことなのよ」

ふたりは賢い回復を祈りつつ、食事を摂った。ジミーはできるだけふたりの邪魔にならないように配慮し、静かに、しかしダイナミックに食事をしていた。この日、祐子は亜紀の部屋に泊まった。ふたりは口にできなかったが、亜希子が居場所を見つけられずに戻って来てしまったことで、

賢をこれまで以上に遠くに感じ、互いにひとりでは耐えられないほどの寂しさを覚えていた。

賢は看護婦から1通の封書を渡された。それを受け取ってベッド脇に置くと、梓が言った。

「あなた、わたくしがお読み致しましょうか？」

「いや、後にするよ」

そう言って、賢は軽く目を閉じ、封書の中の文章を透視した。

「愛するあなたへ

ほんとうは、わたくしはあなたのお側にいて、あなたのお世話をさせて頂きたいのですが、今はわたくしがお側に居たら、皆さんのご迷惑になると思っていますので、このままキガリに戻ります。でもまた時々参ります。そのとき、どなたもいらっしゃらなかったら、必ずお側に添わせて頂きます。

雪坂康子さんのことは、守護霊様に伺いました。その内容は次の通りです。

雪坂さんには強い自我がおありのようです。過去世でも、そのために何度か人を傷つけてしまわれたようですし、その結果として、ご自分も酷くお傷つきになられたようです。ご自分の考えと合わない人を許せなくなったり、その人に対して攻撃的になったりするときがあるようです。でも一面では本当に愛する人と結ばれると、ご自身の愛が拡大して、周りの人たちにまでその愛が広がるようです。ですから、自我の部分をとすことが彼女の今世の課題のようです。今世では愛を広げる機会が得られ易いように、孤独な環境下に生まれ出でられるようです。心の安定性が達成され、自我を空しくおできになれば今世の目的は達成されるとのことです。雪坂さんは過去世で何度か、純粹に愛されたとき、あらゆる心の澱を解消させて、完全に癒されたことがあったようです。一途で純粹な性格をお持ちのようですから、カルマが解消されたら、すばらしい人生を生きられる方だと守護霊様はおっしゃっていました。

以上が守護霊様のお話です。大体窺ったとおりに書いたと思います。
わたくしは、これからキガリに戻ります。あなた、早く良くなってください。そして、わたくし達姉妹をお守りください。
あなた、愛しています。

亜紀より
愛する賢様

梓には封筒の中身が気になるようだったが、賢はそれを梓には見せなかった。その晩は賢にとって初めて経験する手術後の一夜だった。寝返りを打つこともできない。軽減されたとは謂え全身の痛みは賢が眠りに落ちるのを許さない。時々顔の表面に何かが触れた。梓だった。顔の汗を拭ってくれているようだった。賢は梓がいつ寝ているのか心配だった。しかし、梓は眠そうな様子を一切感じさせなかった。賢は眠くなると瞑想に入るように努めた。瞑想が深まると、痛みは完全に消えた。それが瞑想のメリットの一つでもあった。賢の意識はベッドの上の肉体にあるとき以外は常時、無限の空間の中に浮かんでいた。そこはほとんど真っ暗な場所で、自分が浮かんでいるということが分かるのが不思議だった。瞑想から覚め、尿意を催して呼び出しボタンを押そうとすると、必ず梓が側に居て下の世話をしてくれた。梓は看護婦から賢の一切の看護について指導を受け、検温や包帯の交換などの治療に関すること以外のことは全て自分がやると言い切っていた。

手術の翌日無菌室の窓際に二人の警察官が訪れた。賢は事故に遭遇したときの状況について、詳細の説明を求められ、痛みを耐えながら車の上方から強い衝撃を受けたことと、それ以外のことについては全く認識できなかったことを説明した。

「現在事故現場の調査を行っていますが、怨恨の可能性についてお聞きしたいので、後ほど改めて伺います」

警察官はそう言い残して去った。

その後、亜希子がテレポーテーションで何度も訪れたが、亜希子が訪れるときは決まって梓が賢の側で介抱していたため、亜希子は暫くの間窓

の外から賢の様子を窺っていて、そのままキガリに戻るのだった。賢は瞑目した状態で亜希子が来ていることを感知し、意識で会話をするのができたが、梓が亜希子の姿を目にすることはなかった。無菌室を出てからの梓の看病は、献身の限りを尽くしているようで、傍目にも涙ぐましく映った。会社に1ヶ月間の休暇申請を出し、必要なものの調達に出掛けるとき以外は常に賢の側に付き添っていた。食事、入浴、着替えから下の世話まで、あらゆる場面で梓は賢を助けた。梓はまるで賢の身体の一部のように動いていた。愛子も時間のある限り賢の傍らに居た。時々愛子の投げ掛ける冗談が、病室の雰囲気をも明るくしていた。

「賢パパ、あかちゃんになったみたいね。でも梓ママがいるから大丈夫」
「そうよ、愛子さん。今日は学校で何か変わったこと無かったの？」
「特になかったわ。だけど、今朝授業が始まる前に、賢パパの事故のことが話題になったの。みんな賢パパが事故に遭ったことを知っているのよ。賢パパはテレポーテーションできるでしょう。みんな、なぜ事故の衝撃を受けたときにテレポーテーションしなかったのかって疑問に思っていたの。それでね、私が説明してやった。テレポーテーションはどこか移動しようとする所に意識の焦点を絞らなければならないんだけど、賢パパはきっと運転しながら、何か別のことを考えていたから、急に対応できなかったんじゃないかって。そしたら、みんな納得しちゃった。ねえ、賢パパ、本当はそうなんじゃないの？」

賢は愛子の屈託のない話し方に、心地よさを覚えて言った。

「うん、そうとも言えるな」
「あなた、どなたかのことを考えていらっしやっただけじゃないですか？もしかして、私のことかしら？」

「賢パパ、私のことでしょうか？愛子は今頃どうしているかなって・・・」
「雪坂のことだよ。彼女躁鬱気味だろう。どうしたら、彼女の心を癒すことができるか考えていた」

「そうなんですか？どうりで雪坂さんが険しい顔をしていると思いました」

賢は亜希子からの手紙で、康子を癒す方法に見通しがついたと感じてい

た。しかし、梓に不満をぶつけてからというもの、康子は全く姿を見せなくなった。

医師達の細心の治療・看護と梓や愛子の献身的な看病の甲斐があって、賢の病状は日一日とめざましく回復していった。賢は口には出さなかったが、入院している間、自己の内面に深く入る瞑想を行っていた。できる限り瞑想の合間に、祐子と亜希子にコンタクトし、ふたりを安心させるように努めた。ふたりは賢の近くで看病できないもどかしさを覚えていたが、賢が度々バイロケーションで訪問してくれたので、それが楽しみになっていた。手術後一週間もすると、賢の肉体は重篤な状態を脱した。脳側頭葉が無傷だったことも確認された。

梓が賢の食事の後片付けをしているとき、回復の時期を待っていたかのようにまた二人の警察官がやって来た。賢はどこまで話そうかと迷った。「こんにちは、大分回復されたようでよかったですね。まだ、お辛いことも多いでしょうが、今日は先日お願いした件についてお話を伺いに来ました」

年長の方の警察官が言った。

「はい、私の分かることはお話します」

「よろしくお願いします。内観さん、鑑識の結果、どうやらあなたはバスター砲の攻撃を受けたようです。あのとき対向車線にトラックのような大型車は走っていませんでしたか？いいえ、多分認識されていないと思いますが、その弾道から考えて、反対側の車線を走行している大型車の後部から、走り去るあなたの車めがけて砲弾が撃ち込まれたようです。あれじゃ、ひとたまりもありません。車が大破しなかったのが不思議です。あなたはこの1年ほどずっと狙われ続けていたように、我々には思えるんですが……実際はどうだったんですか？」

「正直な話、時々狙撃を受けましたし、いろいろ危険な目にも会いました」

「それは、どんな？」

「例えば、知らない人に言い寄られて、断ると車で後を追跡されたりと

か、電車に乗ろうとして混雑したプラットホームにいたときに、誰かに押されてホームに落ちそうになったりとか、高速道路で後続車に急に追い越しを掛けられ、いきなり前に出られたりとか、いろいろありました」

「どうして、我々に通報してくれなかったのですか？」

「どれも、確定的な証拠がありませんでしたから」

「そうですか。それで、これまで狙撃を受けられたことは？」

「はい、4、5回あります。でも、実際はもっと多いと思います。と言うのは、僕は人が待ち構えているような状況を事前に察知できるからで、大抵の場合、そこを避けるようにしているからです。実際に狙撃を受けるまでに至らなかったことが多かったと思います。今回は、狙撃かどうか分かりませんでした。上から攻撃されたものとばかり思っていました」

「つまり、あなたは常に誰かに狙われているということですね」

「どうも、そのようです」

「いったい誰だと思えますか、あなたを狙うのは？」

「我々の最近発売した製品によって、被害を被った方とか、私の関係していた意識改革プロジェクトに関係する組織で、計画中止で損害を被った企業だとか、あるいはもっと危険な連中を想定すると、以前起きた東領製作所の社長令嬢誘拐事件に関連するものだとか、あるいはその延長上の誘拐組織なんかが考えられます」

「初めの二つは我々も想定して調査していますが、後でおっしゃった2つは想定外でした。もう少し詳しくお話しして頂けますか？」

賢は博多での誘拐犯とその後の祐子の足跡に関係した犯罪組織のことで、インドの売春組織のことを話した。しかし、自分たちがインドのハーレムの爆破に関係していることだけは話さなかった。それを話すことは、自分ばかりでなく、多くの仲間を危険に晒すことになるからだった。警察官達は、賢の説明に基づいて調査を進めると言った。その翌日も警察官が事故後の周辺状況の確認と、いくつかの質問のために賢の元を訪れた。警察官は、「必死に調査を続けているが、まだ犯人像が浮かび上がらない」と言った。

テレビのニュースで賢の事故のことを知った大河原早苗と竹下辰夫が見舞いに訪れたのは術後10日を経過した頃だった。その頃には賢も大分回復していて、普通に会話ができるようになっていたが、ふたりは賢の包帯だらけの身体を見て目を覆い、涙を流した。賢の病状を見舞った後、ふたりは自分たちが最近漸く精神的に安定してきたことを説明した。賢が貸し出したOVSを使って、義母の心の修復ができ、子供達も自分たちが死後の世界に居ることを納得できて、3人とも無事帰霊できたと言った。うれしそうに話すふたりを見て、賢もうれしく思った。

それから少しして、野岸康夫夫妻が、ゆきを連れてやって来た。ゆきは大きな花束を抱えていたが、賢の姿を見ると、花束を手にしたまま、大きく見開いた両目から涙をぽとぽと落とした。

「賢さん、痛かったです。よかったです。助かって、本当によかった……私、直ぐに来たかったですけど、両親が少し待つように言ったので、我慢していました」

「ゆきさん、ありがとう。ご両親のおっしゃるとおりだよ。ここ数日、やっと普通に話ができるようになったんだ。ところで太郎君と信次君は元気かな？」

「元気すぎるぐらい元気です。ふたりともいつも「賢お兄さんに会いたい、会いたい」と言っていますから、ふたりには賢さんが酷い怪我をされたことは話さないで来たのです。だって、それでなくても賢さんに会いたくしょうがないのに、怪我をしているなんて言ったら、私もこちらに来られなくなってしまうでしょう。用事があるからと言って誤魔化して来たのですよ。私からそれとなく賢さんが元気だったと伝えておきます」

「ほんとうはゆきが一番、内観さんに会いたがっていたのですよ」

「お母さんたら……」

ゆきは顔を真っ赤にして下を向いてしまった。目を潤ませて孝子が言った。

「でもよかったです。助かってくださって」

「野岸さん、私が大怪我をした夢をごらんになったので、気を付けるよ

うにとお電話を頂いていたのに、とんだ失態です」

「私たち親子はあなたが悪いものたちに狙われて怪我をされる夢を何度か見ましたので、お電話を差し上げたのです。ずっと心配していました。でも、最近はその夢は見なくなりましたのに、こんなことになってしまって……」

辰夫は無罪で釈放になってから、賢に会うのは初めてだった。

「その節はいろいろありがとうございました。内観さんは私たち家族の救い神です。あなたがこんな事故に遭われたことを耳にしたとき、一瞬目の前が真っ暗になりました。3人で絶望の淵に沈んでいました。一刻も早くお見舞いに伺いたかったのですが、手術や治療の邪魔をしてはいけないと思って、少し時間を置いてから来ました。こうして回復されたお姿を拝見できて、本当に嬉しく思います」

「遠いところを僕のためにはるばるいらしてくださって、ありがとうございます。僕は、皆さんが幸せになられてとても嬉しいです。もうすぐ退院できると思います。大勢のみなさんのお世話になりました。そしてこのような優しいお心遣いを頂き、本当に嬉しいです」

梓が急いで外に出て、太郎と信次のみやげにと、バタークッキーを買って来た。3人は恐縮してそれを受け取った。

その日、ゆき達が帰った後、浮石康夫とその両親も見舞いに訪れた。3人は「是非一度お礼に伺いたいと思っていたのに、こんな形でお会いすることになってしまったことを、大変申し訳なく思っています」と謝ってから、賢の様子を見舞い、それから康夫の失踪について、いろいろ話し合った。賢もできるだけわかりやすく意識の作用と失踪の関係について説明したが、両親は理解できないようだった。

その後、毎日のように賢の会社関係の人たちが見舞いにやって来た。東領製作所からも若手の社員が何人か見舞ってくれた。賢は来る人来る人に最大の感謝の念を抱き、謝辞を述べた。

ある日、東領製作所のMIプロジェクトの5人のメンバーと一緒に見舞いに来た一人の男に、賢は激しい戦慄を覚えた。賢より少し年上に見え、ストレート・ヘアーをポニーテール風に束ねている。背は高く、髪の毛の影

響なのか顔立ちもよく見えるのだが、その男からは、攻撃的な波動を伴った、陰湿なものを感じた。賢は5人のメンバーと話しているときも、常にその男への警戒は怠らなかった。6人はそのまま帰って行った。賢は何事も起こらなかったことに、胸を撫で下ろした。

術後1ヶ月ほどすると、バイパスした脳の浅側頭静脈と上腕の尺側皮静脈は見事に接合し、周辺組織がチューブを受け入れて傷を修復してしまった。肋骨の骨折は肝臓に突き刺さった1本を除いて、全て繋がった。切除された肝臓はまだ元の大きさには戻っていなかったが、傷口は完全に治癒した。医師達の一番の驚きは上腕と下肢の骨折の治癒だった。左足の複雑骨折は全て元通り、いや、骨折部は骨折前より一層強固に接合し、復元されたように見えた。上腕の、千切れそうだった部分の組織も全て元に戻った。院長は2日置きの通院という条件の下に賢に退院の許可を与えた。

「賢パパ、よかったね。今度は家でリハビリだね」

「あなた、もう、二度とこんな目に遭わないようにしてくださいね」

愛子も梓も朗らかだった。原が言った。

「退院早々で申し訳ありませんが、忙しくなりますよ」

「原さん、僕の入院中はほんとうにありがとうございました」

「賢さん、今度は真剣に、自分を狙っている輩を特定する必要がありますよ。さもないと、また同じような危険に遭遇することになるかも知れませんからね」

「ええ、僕もそうしようと思っています。なんとしても長野の村を完成させなくては……」

警察による犯人の特定ができていない状態での退院となった。その日はよく晴れた日だったが、南西の風が強く吹いていた。賢は梓と愛子に支えられて、玄関に出た。院長と辻林医師、婦長を初めとする看護師達が見送ってくれた。賢は病院の関係者に深く頭を下げ、礼を述べた。賢にとっては自分の身体で味わう久しぶりの外気だった。梓が駐車場に車を取りに行こうとした時、賢の意識に戦慄が走った。賢は一瞬瞑想状態になり、即座に自分達の周囲に透明のバリアを張った。その直後、賢は何

かがバリアに当たり跳ね返ったのを感じた。

「梓、ちょっと待て、少し様子を見よう。戦慄を感じるんだ」

「賢さん、意識で追うことができませんか？」

原が言った。賢は意識を研ぎ澄ませて全方位に向けて開いた。攻撃は通りを隔てて反対側にある7階建てビルの3階の端の部屋から行われているらしいと認識した。その時、路上に駐車してあった車から3人の男性が降り、そのビルに向かってゆっくり歩いて行った。私服警官のようだ。ビルに近付くと警官は一気に建物の中に突入した。暫くして、ポニーテール風に髪を束ねた一人の男性が警官二人に両手を押さえられてビルから出て来た。手には手錠が掛けられている。

「あの人、この間MIの人たちと一緒に来た人よ」

梓が叫んだ。警察の一人がポニーテールの後からライフルを手にして現れた。賢はそのポニーテールの男に心当たりはなかった。危険が遠のいたので賢は直ぐに意識を解放してバリアを解いた。

「みんな、怪我は無かった？」

全員が頷いた。院長と辻林が賢の元に駆け寄って来た。

「内観さん、無事でしたか？」

「はい、大丈夫でした、院長。ご心配頂いてありがとうございます」

「それじゃ気を付けてお帰りください」

4人は院長達に再び深々と頭を下げた。

ライフルを手にした警官が近付いて来て、「後でご自宅に伺います」と言った。

入院はたった1ヶ月だったが、賢には外の空気がとても新鮮に感じられた。梓は道央高速を使わなかった。通り過ぎる車に、最大の神経を使って運転をした。原と愛子も、周囲に対して注意を怠らなかった。

「さっきは何かしたの、賢パパ？ライフル全然中らなかつたじゃない」
愛子が訊いた。

「バリアを張ったんだ。そうか、愛子は見たことなかったな」

「バリアって、防御壁だよね？透明のバリアかな？」

「そうだよ。だから、傍目には分からないんだ」

「それ、どうやって張ったの？」

「先ず次元をひとつ上げて、その中にあるシリコンのバリヤを浮上させて、それを現実界に移動して、みんなの上に被せたんだ」

「そんなの簡単にはできないじゃない。だって、さっきは瞬間的にやらずにゆっくりならなかったし」

「前に、作ってあるんだよ。その次元に意識を移せば、そこにあるバリアを直ぐに持ち出して使えるんだよ。意識の不思議さ」

「ふうん、すごいんだね。賢パパ、事故に遭ったときも、直ぐにバリアを張ればよかったね」

「そうだな。だけど、突発的な事故だったら、あの瞬間は余裕が無かった」

原がにこにこして、賢の応答に軽く相槌を打っていた。病院を出てから家までの道では何事も起こらなかった。

4人が家に戻ったのは11時を回った頃だった。皆緊張から解放されて、どっと疲れを感じた。4人はしばし休憩することにした。賢達がソファに腰を下ろすと、梓は直ぐにキッチンに向かった。

「あなた、お疲れでしょう。少しおやすみになったらいかがかしら」

「いや、昼過ぎに休むよ」

梓がコーヒーを入れて持って来た。4人が談笑していると、先の警察官がやって来た。ポニーテールは黙秘を決め込んでいると言った。

「あの長髪男、どうも顔は東洋人だけど、向こうの血が混ざっているようなんです。奥様から、会社関係の方々と一緒に見舞いに来た人に似ていると伺いましたので、その時見舞いに訪れたご友人の方々にも当たってみましたが、皆さん、面識が無いとおっしゃっていました。どうして一緒に見舞ったのかと聞いたところ、あの人はたまたま同じ時に見舞いに来た人だと思っていたとのことでした。病院内で何事もなくよかったです。ところで、内観さんはブリクロン・アブリジというインド人をご存じですか？」

「はい、知っています」

「どういうご関係で？」

「僕の友人ですが、それがどうかしたのですか？」

「その人が、最近北海道、特に札幌近辺ですが、女性の失踪者についていろいろ聞き廻っているという情報が入ったんです。内観さんは失踪事件を解決していることで有名ですから、我々はもしかしたら彼が、今度の事件に絡んでいるかもしれないと思ってまして……」

「彼は、危険な人間じゃありませんよ。どちらかと言うと、正義の為に生きているような人間です。でもなぜ彼が北海道に居るんだろう」

「そうですか。事件解決の参考にできることがありましたら、是非ご連絡ください。あの長髪の男が現れたことで、この事件もすこし糸口がつかめてきた感があります。御休息中のところを失礼致しました」

警察官が帰ると、梓と愛子が台所に立って昼食の支度を始めた。原は入り口の方向を向いて坐っていたので、亜希子がドアの近くに現れたのに直ぐに気付いた。しかし、原は黙っていた。亜希子は静かにソファーに近付いて来た。賢の背後に近付いて、左手で賢の左肩にそっと触れながら言った。

「退院おめでとうございます。お怪我の方はもう大丈夫なのですか？」
賢は驚いて振り返った。

「亜紀、退院したことがよく分かったね」

「あなたのことはずっと拝見していましたから」

「えっ？」

「わたくし、毎日あなたの近くに伺っていたのですよ。お気づきになりませんでしたか？」

「えっ？本当なのか？時々来ていることは分かっていたけど、毎日とは知らなかった。心配掛けたな」

「姿は現しませんでしたけれど、霊界でムクウさんに教えて頂いた霊界から地上界をのぞき見る方法で、いつもあなたのお側に居ました」

その時、梓が亜希子の存在に気付いて、ソファーの所にやって来た。

「あら、亜希子さんいつお見えになったのですか？丁度よかった。これからお昼にするところなんですよ。ご一緒に如何ですか？」

「ありがとうございます。でも、わたくしはもう少ししたらキガリに戻

ります。由宇お姉様がお待ちですから。賢さんのご様子を拝見して、それをお姉様にお伝えする約束なのです」

「亜紀、ありがとう。俺の身体は大体、元通りに復元できてきたよ。ただ関節や筋が硬くなっているから、すこしリハビリがいるかも知れないけどね。由宇にもありがとうと伝えてくれよ」

「分かりました。賢さん、それでは、わたくしは失礼致します」

そう言うと、亜希子はその場に立ったまま姿を消した。原が言った。

「漸く本来の世界に戻って来たような気がしますね。もう、アフリカと日本の間にさえ空間的な隔たりが無くなってしまったようですね。亜希子さんは我々の目に見えないところで、ずっと賢さんの側に居たとおっしゃっていました。そして今も直ぐに祐子さんの元に戻って行きました。ここでは、これが現実の世界になってきたのですね」

「原さん、あなたの発明した二つのマシンのおかげで、自分の意志でDNAの情報スイッチをONにできない多くの人たちも、あの2つのマシンを使って、自分が今、次元を超越した世界に住んでいることを認識できるようになりました。直ぐに人々の認識も変わってゆくと思いませんか？」

「いいえ、そう簡単には変わらないと思います。この世界の仕組みは非常に堅くて、人々の意識を雁字搦めに縛っていますから、そこから抜出すには、受動的な体験だけでは無理だと思います。先ずもつれた糸を意識してほぐして、その呪縛から解放されないことにはどうにもなりません。実は僕は諏訪に期待しているんです」

キガリ

祐子は涙を流して喜んだ。

「亜紀、あの人は本当にもう大丈夫なのね。切れた血管もすっかり繋がったのかしら？複雑骨折の方は？それに肋骨はくっついたのかしら？一番心配なのは、頭よ。大丈夫だったのかしら？それに、なにより、あのひと、頭を打って私たちのことを忘れてしまったなんてことはないでしょうね？」

「お姉様、大丈夫ですわよ。わたくしのことを、しっかり覚えていらっしやいましたもの」

「あなたのことは覚えていても、私のことは忘れてしまったなんてことはないかしら？」

亜希子は祐子が不安げに賢を案ずるのを聞いて、「これが同じあのママユウコなのかしら」と思った。

「亜紀、あの人が本当に大丈夫なのね？」

「はい、あの方には梓さんと、愛子さんそれに原さんや数馬さんが附いていらっしやいます。何より札幌市立病院の先生達がついていらっしやいますし。あの方達がいらっしやれば、もう大丈夫だと思います」

「そう、それを聞いて安心したわ」

祐子の気持ちは複雑だった。もう、元の二人には戻れないことは分かっているけれども、賢が他の女性の世話を受けているという亜希子の言葉を、冷静に受けとめることはできなかった。

「お姉様、わたくしたちは何時になったらあの人と一緒に生きることができるのでしょうか？わたくしは、何時もあの方のお側に居たいと思う一方で、どうしてか分からないのですが、あの方から離れてでも魂の苦しんでいる人々を救わなくてはならないという焦燥感に似た気持ちが突き上げてくるのです。本当はあの方と一緒に、苦しんでいる人々をお救いしてさしあげたいのですが・・・あの方は何時もわたくしとは異なった方向に進んでいらっしやるようで・・・」

「亜紀、私たちにはまだ、やらなくてはならないことがあるのね。だから、何時も心の奥の方から突き動かされているのよ。今世でやるべきことを終えないと、あの人と共に生きることは許されていないような気がするのよ。寂しいけれどね」

「ええ、お姉様。あの方の周りには、沢山の方々がいらっしやいます。その人達と一緒に、新しい世界を創る為の取り組みをされているのもね。わたくしたちは、きっとその仲間に入ることが許されていないのですわね」

「そうね、どうやら私たちの役割はこの地球上で生きている人々を、

一人でも多く助けることのようなね。私はね、今、地球上で一番悲惨な生を強いられている人々が生きている社会を、先進国の平均的なレベルにまで引き上げる為に働くことが自分の使命のように感じているの。貴女の役割は、亜紀の言うとおりに苦しんでいる人たちの魂を救うことにあるように感じるのよ。生きている人はもちろん、既に亡くなってしまった人たちの魂を、安定した状態に導いてあげることなんじゃないかしら。私たち以外にもこういう役割を与えて頂いた人たちは、沢山居るように思うわ。でも、ほとんどの人たちはそのことに気付くことすらなく人生を終えてゆくんでしょね」

「お姉様、もし、今お姉様が天からお預かりになった使命にかかわらず、ご自分の自由意思でご決断できる状態になっているとしたら、今なさっている、フルマのような、人々の生活の基盤を作って、貧困社会の底上げをされるようなお仕事をするのと、あの人を愛して、あの人のお仕事を助けて、あの人のお側と一緒に生きることと、どちらをお選びになりますか？」

「以前は、何とかあの人のお側に居て、あの人と生きたいと考えていたわ。でも今では、きっとフルマを選ぶわね。私はね、亜紀、自分で好むと好まざるとに関わらず、フルマの仕事を選ばなければならないように導かれてゆくよ。初めは、そういう見えない力に抵抗したわ。でも、今では、その力に抗うことはなくなったわ。自分の意思で選んでいるわけではないのよ。うまく表現できないけど、どうも潜在意識のようなものに導かれているようなの。そしてね、それを受け入れると、物事が自然に進んでゆくよ。窮地に陥っても結果としてそこから抜け出せるの」

「お姉様、わたくしは自分の意識で、人をお救いしたいと考えています。そうしないと、安易な方に流れてしまいそうで……でもそうすると、あの方のお側に居ることが難しくなってしまいます。わたくしは、何度も、しくじりました。それは、わたくしが、自分が考えて行った選択に基づいて生きているからなのではないでしょうか？」

「私には分からないわ。でも、亜紀、あなたの選択は間違っていないと思うわ。あなたの行っていることは、他の人にはできないことなのよ。

だから当然、多くの危険が伴うわ。私は、あなたの強い決断をいつも偉いと思っているのよ。私にはできないわ」

「いいえ、わたくしは由宇お姉様の確信に満ちた不動の行為の方がずっとずっと立派だと思います」

「私たち、お互いをほめ合っていて、他の人が見たら、なんと思うかしら。可笑しいわね……ふふふ……私は、あなたが私の近くに来てくれたことで、あの人と一緒に居る時と同じような、とっても幸福に満ちた心の状態でいられるのよ。亜紀、あの人への怪我也大分回復したようだから、そろそろ私たちも次の行動に出ようか？」

「次の行動って、もしかして……」

「そうよ、亜紀も望んでいる貧困者の救済よ」

「由宇お姉様、一緒にコンゴ民主共和国に行って頂けるのですか？わたくしはずっとリンガラ語の勉強を続けています。お姉様、その国に行ったらその国の言葉で話さなくては、相手の本音は分からないでしょう？」

「それはそうね。でもね、亜紀、コンゴばかりじゃないのよ。最近一番苦しんでいるのは、ソマリアやケニア、それにエチオピアの人たちかも知れないわ。いいえ、アフリカ中どこの国もみんな国民が苦しんでいるわ。それにアフリカだけじゃなくてシリアやイラクの人たちも戦闘やテロで苦しんでいるし……」

「お姉様、もちろん飢饉で苦しんでいる人たちを救い出すことにも、是非取り組ませて頂きたいのですが、わたくしは先ず、これまで自然と共存して生きてきて、本当は自由なはずなのに、自分のことだけしか考えない人達に苦しめられて、身も心も傷付き、その上貧困を強いられ、人生を破壊されて亡くなってゆく人たちをお救いしたいのです。そういう人たちのことを考えると、とても辛くて、その方達を助けなくてはならないって思ってしまうのです。ですから、そうできない自分を許せなくなるのです。ソマリアやエチオピアの飢饉は国連も目を向けています。でも、コンゴはどんな正義の集団も敬遠して、なかなか寄り付かないでしょう。それどころか、あの自然の豊かな国に、蛭のように食らいついて、資源を吸い尽くそうとしている人たちが沢山居るでしょう。そのよ

うな世界に生きることを余儀なくされた人たちのことを放って置けないのです。ねえ、お姉様、是非、コンゴ民主共和国に行きましょう」

「分かったわ。亜紀の情熱にはかなわないわね」

二人は具体的なコンゴ進入計画を立て始めた。それはまるで時化の大海に小さなボートを漕ぎ出す時のような、身震いしたくなる戦慄を覚える行為だった。

「亜紀、「自分が考えることは、必ずやり遂げるこののできることだ」という格言を知っている？」

「初めて聞きました。でも、それを伺って、勇気百倍ですわ」

「私もリンガラ語を勉強するわ」

ブカヴ

二人は何度も、何度も検討を重ねたあげく、紛争の頻発する北西のゴマ地区を通らず、キヴ湖の南端のブカヴからコンゴ国内に進入することに決めた。ソマリアの窮状が抜き差しならなくなり、国連が中心になって各国が緊急支援に乗り出したのだが、どの先進国も自国の経済が破綻状態になっていて、他国どころの騒ぎではなくなっていた。表立って宣言することはなかったが紛争中のアフリカ諸国に対する支援をほとんど打ち切り、先進国としての体裁を保つため、やむなく国連の勧告に従って、ソマリア周辺への支援にだけ集中することに決めていた。そんな訳で大国によるコンゴやスーダンへの支援予算が削られたため、コンゴ民主共和国では、国軍に押さえつけられていた国内の武力集団が一気に勢力を盛り返し、従来にも増して一般の住民を武力で強制的に服従させる動きに出てきた。祐子のコンゴ行きの決断は、既に派遣しておいた兵士の報告から、コンゴの住民が生きる道を絶たれるような状態に置かれていると知ったためだった。ブカヴに向かうもう一つの理由は、キンシャヤやキサンガニなどの主要都市は航空機を使って空から入るにしても、あまりにも危険で、ルワンダという国に拠点を持つグループが侵入することがきわめて困難な為であった。ルワンダでジェノサイドが起きた時は、ルワンダからコンゴに大量の難民が流入し、ブカヴにクツ族の難民

キャンプが建てられた。しかしルワンダで虐殺を行ったクツ族系ゲリラがルワンダに対して逆襲を繰り返したため、ルワンダ政府は反政府ゲリラのコンゴ・ザイール解放民主勢力連合（αFDL）を支援し、事実上ブカヴはαFDLの支配下に置かれた。その後、ザイール政府が倒れ、政権を取ったαFDLは一転して反ルワンダの姿勢をとったため、ルワンダはコンゴに住むブチ族の反政府組織コンゴ民主連合（ρCD）を支援して、αFDLとの戦闘状態に入った。その結果、ブカヴはρCDの手に落ちた。その後いったん和平が成立して、ブカヴはコンゴ政府の手に戻ったものの、ρCDのリーダーが再び政府から離反したため、翌年ブカヴは再度ρCDの手に落ちたという複雑な経緯がある町だ。先進国からの多くの支援が打ち切られた後でも、コンゴ民主共和国の国軍は国連の援助を受け、虐殺後にこの国に逃げ込んできたクツ族の戦闘集団ルワンダ解放民主軍（φDLR）の討倒を執拗に続けている。だから、ルワンダ、それもブチの入国がすんなり受け入れられそうなのはここしかないのだ。祐子は今回は特に慎重だった。4人の精鋭の兵士と食料係一人、コミュニケーション担当としてマリー・ジュベステルの計6人を伴っての遠征とすることに決めていた。祐子の念頭にはコンゴ民主共和国に在住の難民の救済のみでなく、この国が安定した政治体制を確立し、資源目当てでない先進国の積極的な援助を確保できるようにさせることと、自力で資源開発ができるようになり、貧困に苦しむ自国民を救済できるような力を持つように導くことを目論んでいた。それには政府役人の人道的な意識を高め、犯罪発生を激減させ、漁夫の利を狙った支援を申し出ている各国からの難民救済軍を自らの意思で撤退させることが必要だった。それ以上に厄介なことは、既得権益を確保しようとあの手この手で、庶民を食物にしてきた民間の開発支援組織や、NGOを装った難民支援組織を後方で支援しているコンゴ政府の触手を引き離し、その方向を人民からの搾取から軍に向けさせ、さらにはその軍に向けた触手をも引っ込めさせることだった。軍人や役人の目から逃れるために、コンゴ民主共和国への入国は目立たないようにする必要があった。そのため、遠征隊を二つのグループに分け、ルワンダ国内ではそれぞれ

別々の経路を通り、一旦国境の町チャンググで落ち合ってから、一緒に国境を越えることにした。国境は、夜間は閉鎖されるので、夕方までに通り抜けなくてはならない。祐子と亜希子はスーダンへの支援時と同様、ジミーとメドリスナの二人を連れて最初にキヴのキャンプに寄り、そこで1夜を過ごしてから、翌朝早くチャンググに向けて出立することにした。もう一つのグループはマリー・ジュベステルと残り2名の兵士と食料係の4名で、祐子達が出立した翌日の早朝に出発し、正午にチャンググで祐子達のグループと落ち合い、その日のうちに国境を越える予定であった。

祐子がマリーに相談したとき、マリーはコンゴ民主共和国行きは絶対止めた方が良いと強く反対した。祐子に服従を誓って以来、祐子のやろうとすることに反対を唱えたことなど1度もなかったマリーも、今回ばかりは反対の意思を曲げなかった。マリーはルワンダ、ウガンダ、ブルンジからコンゴ民主共和国に避難したり、侵攻したりしているクツヤブチの市民軍の指揮官との間に、あまり表沙汰に出来ない繋がりがあった。彼らの卑劣な行為をいやというほど目の当たりにしてきていた。そして、彼らのやり口から見て、祐子や亜希子が直ぐに窮地に陥る危険性があることを予見していたのであった。

「ママ、それ危険すぎです。αFDL（コンゴ／ザイール解放民主勢力連合）、φDLR（ルワンダ解放民主軍）、ρPF（ルワンダ愛国戦線）、νRA（ウガンダ国民抵抗軍）、φNL（ブルンジ反政府勢力）、γNDP（コンゴ人民防衛国民会議）どの組織も、みんな危険、ママ止めてください。特に、女性は攻撃的のです。それと、アフリカで3番目大きな国、どうやって救うのでしょうか？ママの慈悲の心、すごい力持っているの知ってます。だけど、ザイール1／3ジャングルで、村人、兵士の攻撃逃れるため、ジャングルに逃げ込んでる。ジャングル危険一杯。ああ、どうしたらいいのかわかりません」

「マリー、私は覚悟を決めたの。これが私の使命なのよ。たとえそれが絶対不可能なように見えても、必ず道はあると思うのよ。私一人の力じゃない。みんなの力であの国を愛の国にするのよ。天国にするのよ。マ

リー、私を助けてほしいの。もちろん命がけになるわ」
どんなに反対しても断固自分の意思を貫こうとする祐子の気迫に屈し、
ついにマリーも折れた。

「…………ママ、命掛ける…………わかりました。私ママに命預けてあります。ママ守ります。だけど、暫く待っていて、10日、いいえ、1 WEEK 1週間、私、ザイール人沢山知ってる。あの国行くこと覚悟いる。強い護衛要る。連絡とる。ザイール — オーノー、デモクラティック・リパブリック・オブ・コンゴ政府の人間と繋がっている者連れて来る。その人達使わないと、危ない。その人達と重役達、役人達にみやげもって行く。ママ、ウイスキーとたばこ、それから、デジカメとミュージックプレーヤー、ママ、そういうの、沢山用意すること、みんな喜ぶ。これは駆け引き使う。それと、薬沢山もって行くの良い。貧しい人だけでは、少なすぎる。村人も助ける。危ない病気多い。私、明日から亜希子と一緒に用意する。ママ、いいですね」

祐子はマリーの助言をありがたいと思った。

その翌日の午後、フルマのオフィスで祐子と亜希子がコンゴ行きの荷物の準備をしていると、マリーが2人の軍服のようなサファリーウェアを身に付けた男性を連れて来た。

「ママ、これはザイールの自然科学研究所の所長クリグ・マハナムとコンゴ人民銀行の部長ボモ・バサンスガです。ビザをとるの手伝ってくれる。国に入るとき、助けてくれる。彼らは金で動く。あまり料金払うのまずい。払えばどんどん要求する。国に入ったら、別のガード雇う。ジャングル入るときピグミー雇う。ピグミーは村の人に使われてる。彼ら文字持たない。だけど、自分たちの言葉持っている。ピグミーには国無い。森が彼らの国。森のこと、何でも知ってる。コンゴの人心、優しい。だけど、生きるの難しい。食べ物足りない、みんな栄養失調。助けるのもっと難しい…………」

マリーは先ず日本語で女性達に説明してから、リングアラ語で二人の男達に祐子と亜希子を紹介した。クリグ・マハナムは目の大きな体格のがっしりした黒人で、肌の色つやも良く、身だしなみはきちんとしている。

髪は縮れていた。ボモ・バサンスガはアフリカ人としては小柄な黒人で、理知的な印象を与える。二人の男性は、依頼主が女性であることに驚きを隠せないようだった。

「ンボテ (mbote). ナザリ ユウコ (Nazali Yuko).」(こんにちは、わたしは祐子です)

祐子は試しに覚えたばかりのリンガラ語を使ってみた。

「ンボテ (mbote).」(こんにちは)

ふたりの男性はそれだけ言うと、にやりと笑った。祐子が二人の男性に握手をしようと右手を差し出すと、クリグ・マハヌムが好奇的な眼差しで二人の女性の顔をしげしげとみつめ、祐子の手をそっと取った。その手を持ち上げてキスするような仕草をしたので、祐子はさっと手を引いた。一方ボモ・バサンスガはビジネスライクに自然な動作で祐子と握手を交わした。マリーがリンガラ語で二人の男性にビザと入国のことを依頼した。ボモは金が掛かると言った。マリーが彼の要求を受け入れ、必要になる金額を訊き、それに手数料を加えた額をボモに示した。ボモは頷いた。祐子は用意しておいた葉巻を二箱マリーに渡し、マリーがそれを男達に渡した。二人は葉巻を受け取るとそれを良く見もせず素早く内ポケットに入れた。その動作があまりに素早かったので、3人の女性は顔を見合わせた。マリーが袋の中からトランシーバーを3台取り出し、1台を祐子に、もう1台をクリグに渡した。車の中から連絡が可能な範囲は3キロメートル程度だと言った。そして、何も無い平地なら20キロ位まで届くと補足した。クリグはトランシーバーの操作の仕方をマリーから聞くと、その場を引き上げて行った。

二人の男性とはブカヴの国境で再会することになった。

それからの8日間、祐子と亜希子はマリーの援助を頼りながら、物資を集めることに必死だった。亜希子の助言で、祐子は物質転送機を用いて日本から安価で高性能なデジカメとソーラー充電器を30台ずつ送ってもらうことにした。祐子が賢にテレパシーで頼んだ。賢は梓に頼んで直ぐにそれらを調達し、祐子の元に転送してもらった。勿論物質転送機の受物端末はリアバッグの一番奥に仕舞った。この受物端末は重要性を

増している。原の改良の結果、もうどこに居ても物質転送機から品物を送りつけることができるように改造されていた。物質転送機の本体は祐子のオフィスに据え付けてある。誰もそれが物質転送機だとは知らない。祐子はアイリーンに操作方法を教え、他の誰にも教えてはならないと言った。祐子にとってアイリーンはスバハの乳母であると同時に、最も忠実な部下でもあった。アイリーンは自分の全てを祐子に委ねていた。祐子は自分の留守の間のオフィスの管理を全てサスカブとアイリーンに委ねた。地図やリンガラ語の資料、そしてもう1歳になって、ひとときも離れていたくないほど可愛いスバハの写真などを、パスポートを入れるポーチにしまった。スバハはアイリーンに懐いていたので安心だったが、祐子が出発までの間、時間のある限りスバハの近くで過ごした。そして出発の2日前に、祐子と亜希子はマリーのサジェスションに従い、染髪料を使って全身の色を浅黒く染めた。

「由宇お姉様、お似合いですわ……ほっほっほっ……」

「亜紀、色黒なあなたなんて想像したこともなかったけど……やっぱり、あまり似合わないわね……はっはっはっはっは……」

染料の効果は1ヶ月は保つ。自分が言い出したのにもかかわらず、マリーは肌を染めずに地のままで行くことになった。それでも十分に現地在住の外国人で通せる雰囲気を持っていた。スバハは祐子の姿を見て、初めベそをかいたが、直ぐに祐子と分かった。しかし、亜希子に対しては顔を背けて、近づかなくなってしまった。

「スバハ、わたくしよ。まあ、スバハったら、わたくしを分からなくなっちゃったのかしら？」

亜希子はがっかりしたが、それほど亜希子の印象は変わってしまった。

キガリを出る日の朝、祐子はスバハに会うのを止めた。アイリーンにだけ会ってスバハのことを頼んだ。アイリーンの目に涙が光った。サスカブと何人かの長老も会いに来てくれた。祐子は再びここに戻ることができるだろうと思った。しかし、悲しみが湧いてくることはなかった。亜希子は今回のコンゴ行きが自分の本当に望んでいることなのだろう

かという考えが浮かび上がってきたが、不安定な心の動きを押さえて、「絶対成功させてみせるわ」と心に誓った。

祐子達は大勢のブチ族の人たちの見送りを受けて昼過ぎにキガリの家を出た。2台のジープはボディが錆びて、板金の一部がはげ落ちた車に替わっていた。全員の服装もきわめて地味なものになっていた。マリーの進言で1ヶ月分の食料と水の他にプリムスを5ケースとガソリン20リットルタンク5個100リットルを持参することにした。準備には細心の注意を働かせたが、それでも誰一人十分という確信を持つことはできなかった。出発を前に全員が緊張していた。

一旦キヴエに出て、近くのブチのキャンプ・キヴに寄り、病人を見舞って、そこで1夜を過ごすことにした。翌朝夜明け前にキャンプを出発してキヴ湖に沿って南下し、国境近くの町チャンググで昼食を摂ることに決めた。キャンプには看護婦の仲間が居る。祐子の指導でルワンダ国内の二つの部族間の抗争は無くなったが、バラックと多くの友を失った、あのクツから受けた傷跡が未だ完全には癒えていない。祐子は族長になって以来、あまりキヴのキャンプには顔を出さなくなっていた。しかし、決して忘れたわけでも、忘れようとしているわけでもない。あの襲撃の直ぐあと何回かキヴのキャンプには足を運んだ。キヴに行くと、身体の底から悲しみの波動が沸き上がり、帰途につくときには、顔が涙でぐしゃぐしゃになり、気力が萎え切ってしまうのだった。そんなことが何度もあり、自分がブチの族長になり、責任者としてフルマを立ち上げてゆく段階で、キヴまで足を伸ばす時間的な余裕がなくなってきたこともあって、キヴへの足が遠のいてしまったのだった。祐子にとっても、亜希子にとってもキャンプ・キヴは心臓の鼓動が聞こえるほど魂を揺さぶられる場所だった。祐子はここで命を落としたバラックに一つの誓いを立てようと考えていた。

キヴのキャンプに着くと、看護婦達が祐子と亜希子を出迎えてくれた。祐子は地にひれ伏している看護婦達の前に行くと、一人一人手を取って立ち上がらせた。皆、祐子と亜希子の肌の色が小麦色に変わっていることに気付かないようだった。

「*****」(みんな元気だった? 元気そうね。良かったわ。私のことをそんな風に特別に扱わないで。私はみんなの仲間なんだから)
しかし、看護婦達は立ち上がろうとしなかった。彼女たちにとって祐子はもう、普通の存在ではなくなっていた。そんな看護婦達の行動を観て、亜希子は今更ながら祐子の存在の大きさを再認識させられた。

一通り看護婦達とのスキンシップを終えると、祐子は隅の方で蹲って泣いている女性が居ることに気付いた。マリゼだ。祐子はマリゼに駆け寄った。キヅに移ったことは聞いていたが、一度も会いに来られなかった。

「*****」(マリゼ・・・・・・・・)

「*****」(ママ、ユウコ・・・・・・・・)

マリゼも地に膝を突いて祐子を迎えた。祐子はマリゼを抱き起こして、抱き締めた。二人は暫くの間抱擁し合って泣いた。

「*****」(マリゼ、元気だった?)

「*****」(はい、ママ。赤ちゃんが生まれたのね。お腹が凹んだわ。みんなフルマのおかげで幸せになってきたわ。わたし、ダンス習っているのよ。家ではアガセケの内職も始めたの。少しずつお金が貯まってきたわ。みんな、ママの力なのね)

「*****」(あなたの力よ、そしてみんなの力も。マリゼ、今晚あなたの作品見せて頂けるかしら?)

「*****」(ええ、ママ、うれしいわ。私一度家に戻って、今晚ピピと一緒に部屋に伺います)

「*****」(そう云えばピピの姿が無いわね。ピピもここに移った筈だわね)

「*****」(ピピはスージのお墓参りに行ったの。ママが来るって報告するために)

「*****」(マリゼ、お願いだから、以前のようにユウコって呼んでね。私は何も変わっていないんだから、ね)

「*****」(はい、ママ・・・・・・・・いいえ、ユウコ)

祐子は看護婦達に導かれて、病室に向かった。病室に入るとあの生々しい情景がまぶたの裏に蘇った。祐子の瞳は涙で一杯になり、病室全体が

震んで見えた。バラックが前方でマイクを片手に微笑んでいる。祐子はバラックに向かって話し掛けた。

「あなたは、道半ばにしてこの世を去ってしまった。私がああなたの意志を継いで必ず二つの種族の間のわだかまりを解き、その勢いで中央アフリカを平和な土地に変えて見せます。私は、それが達成できるまで戻りません。あなたは天国から私を見守っていてください。そして、わたしの心がひるんだら、どうかわたしを叱ってください。あなたの息子は部族の世襲のルールから降ろしました。きっとあなたの意志を継ぐ立派な大人に成長し、自由意志で平和なアフリカを取り戻す為に命を燃やすことと信じています。わたしはこれからコンゴ民主共和国に行きます。そこにはブチもクツも住んでいます。まだ争いの中で苦しんでいます。そして、その抗争に乗じ、我欲に駆られた者達があその国にしゃぶり付いて骨の髄まで吸い尽くそうとしています。彼らは自分の行為が自分自身を破壊していることに気付いていません。あなたの意志はこのアフリカを過去の平和な自然のある世界に戻すことだったと思います。私はやってみせます。必ずやり遂げます。時間と空間を超えて取り組みます。ご覧になってください。それでは明日の朝早くに、ここキヴを出発致します。道中わたしたちをお守りください。よろしく願い致します。あなたを愛しています。これからもずっと」

バラックは大きく頷くと、そのまま消えてしまった。祐子は頭を振った。そしてしばし目を瞑り、心を落ち着けた。看護婦達は祐子が立ち止まったので、そのまま動かずに待っていた。呼吸が整うと、祐子は病室に足を踏み入れ、患者達を順に見舞った。病室の様子は何も変わっていなかったが、患者は重傷の2人を除いて全員入れ替わっていた。患者達は事前に知らされていたようで、祐子の来るのを首を長くして待っていた。病室に入ると直ぐ、栄養失調から白内障になり、失明してしまった老人が祐子の手を取って、自分の目を治してほしいと言った。祐子は頷くと、瞑目し、老人が目を開けて喜んでいる姿を眉間に見詰めた。暫くして目を開けると、老人の目から大きな涙がこぼれていた。老人は無言だった。側に付き添っていた老婆が地に両膝を着き、祐子に向かって平伏した。

祐子は、ほほえみながら老婆の手を取って立ち上がらせた。

「****」(ママ、主人の目が治りました・・・うううっ・・・)
女性用ベッドに横たわっている30歳前後の女性が咳き込んでいる。看護婦が「彼女は胸を患っています」と言った。祐子は病人服の間から手を入れ、女性の両方の乳房の間、檀中に右手を宛て、瞑目した。祐子が瞑目を解くと、女性の咳は止まり、息づかいも静かになっていた。女性は何度も何度も頭を下げた。もう咳は出ない。祐子は病室にいる全ての病人を見舞った。2人の重傷の兵士以外は祐子の看病でその症状が消え、ほとんど回復してしまった。重傷の兵士達は、以前、祐子の看護を受けたことがあった。2人の男性は湧き上がる喜びに身体をうち振るわせていた。1人は銃撃で弾丸が腹部を貫通し、肝臓、脾臓、腎臓と小腸に傷を受けていて、担ぎ込まれたときは瀕死の状態だったが、祐子の必死の看病で、一命を取り留めたのだった。内臓もかなり快方に向かってきていた。祐子は男性にエネルギーの注入を行い、腎臓が完全に回復することを想起した。その男性の最大の苦痛が排尿だった。キガリの病院に行きカテーテルを挿入してもらっていた。祐子はそれを察知した。祐子の腎臓へのエネルギー注入で、塞がっていた尿道が通ったのが分かった。祐子はカテーテルなしで用足しが出来るようになったことを、そっと患者に耳打ちした。患者は祐子の右手を取って、口元に持って行き、手の甲にそっと口づけした。もう1人の重症患者は複雑骨折を負っていた。肋骨と大腿骨の損傷だった。従軍の装甲車の荷台から落ち、岩に身体を打ち付けて重傷を負ったのだった。このときも祐子は寝ずに看病した。大腿骨の複雑骨折は、運び込まれたとき両足の切断という処置しか考えられなかったが、切断を実施できる医師が居なかった。祐子は看護婦達と協力して両足を引っ張ることにした。引っ張っておいて、足首にロープを掛け、おもりを付けて足を引き延ばした状態にしてから、添え木を当てておいて、それぞれの足を添え木に縛り付けた。それ以外にできることはなかった。肋骨は4本折れているようだったが、幸い正常位置に戻っていた。祐子は看護婦達と共に、胸全体を包帯でぐるぐる巻きにした。

今見ると、既に胸の包帯は外されていた。足は未だ添え木が当てられている。もう半年以上経っている。祐子は瞑目して男性の身体を透視した。大腿部の骨折部は見事に繋がっていたが、骨の破片が大腿四頭筋群の中に散在している。祐子は小片は無視し、大きな破片を取り除くことにした。直ぐに看護婦に大腿部を縛っている包帯を外させた。太腿の表面が白んでいる。祐子は瞑目して、指先を大腿部の骨片の残っている部分に立てた。祐子の右手の親指と人差し指が兵士の太腿の中に潜り込み、両足から次々に5つの骨片をつまみ上げた。祐子の手は血だらけになった。瞑目を解くと、患者の傷口は無くなっていた。祐子の血だらけの掌に骨片が握られている。看護婦が仰天して、その場に座り込んでしまった。亜希子も驚いた。心霊手術と同じことを祐子が行ったのだ。

「****」(あとは、リハビリだけです。歩けるようになるまで、頑張ってくださいね)

兵士の患者は目を潤ませて、祐子を見上げた。祐子は亜希子の差し出したガーゼで両手を拭った。

その晩、祐子は亜希子と共に、初めてここを訪れた時にバラックが祐子のために用意してくれた特別室に泊まった。部屋はきれいに清掃されていたが、全く使用されていないようで、祐子が使っていた時のままになっていた。チェストの上には花瓶に一輪の花が生けられていた。アフリカで時々見掛ける5枚のハート型の花びらを持った朱色のアフリカ鳳仙花(ほうせんか)だった。祐子の大好きな色だ。祐子はキャンプのみんなに強い感謝の念を抱いた。ジミーとメドリスナは祐子に言われ、キャンプの外の兵士宿舎で一夜を過ごすことになっていた。しかし、2人は銃を抱えたままキャンプの入口に腰を下ろし、徹夜で祐子達を護衛していた。

祐子と亜希子が部屋に入り、シャワーを浴びてから少しすると、ドアをノックする音がした。マリゼだった。マリゼの肩越しにピピが顔を覗かせている。2人はそれぞれ、大きな袋を手をしている。

「****」(マリゼ、ピピ、いらっしやい。さあ、中に入って)マリゼは微笑みながら部屋に入った。少しもじもじしていたピピは部屋

に入ると、黙って大きな袋を祐子に差し出した。

「****」(ピピ、久しぶりね。元気だった?)

ピピは唇を噛みしめている。

「****」(これ、スージとマリゼと私から、ママユウコに)

それだけ言うと、ピピの目から大きな涙がこぼれ落ちた。マリゼは下を向いている。

「****」(えっ?だって、スージ……………)

左手の腕で涙を拭いながら、ピピが言った。

「****」(ママユウコのお誕生日にあげようって3人で相談していたの。いろいろ教えてもらって……………とても楽しかったから……………)

祐子はピピを引き寄せて抱きしめた。

「****」(ピピ、会いたかった。元気そうで安心した。マリゼ、ありがとう、そして天国のスージありがとう)

ピピが言った。

「****」(ママユウコどうしてずっと来てくれなかったの?)

「****」(ごめんなさい。あなたたちがキヴに移ったのは知っていたわ。でもここには来られなかった。身体が悲しみに打ち震えて動かなくなってしまうから)

マリゼとピピは目に涙を浮かべて祐子の言葉を聞いた。

「****」(マリゼ、ピピ、開けても良いかしら?)

祐子が二人の顔くのを確認してから、包みを解くと、中から水色の地に薄黄色と薄紫のブロック模様が施された布地に黒とオレンジ色と赤の螺旋模様の刺繍を交互に縫い込んだ裾の長いドレスと、同じ生地で作った大きなひさしのベースに原色のストライプをあしらったキャップが現れた。

「****」(まあ、なんて素敵なキテングなんでしょう。マリゼ、ピピありがとう)

「****」(お姉様、本当に素敵ですわ。きっとお似合いになりますわ)

「****」(刺繍は3人で縫ったのよ)

マリゼが言った。ピピも頷いている。ピピの目に輝きが戻ってきた。

亜希子も目をきょろきょろさせながらドレスを眺めている。

「*****」(ママユウコ、それを着たところを見てみたい)

ピピが言った。祐子は「もちろんよ」と頷くと、その場でワンピースを脱ぎ、キテングを身に付け、キャップを被った。ドレスの鮮やかな色彩と、角のような赤と青の原色のデコレーションが施されたキャップは、小麦色の祐子の肌色にぴったりと合って、美しく輝いた。3人は目を見張った。ピピとマリゼの目に再び涙が浮かんだ。感動の涙だった。

「*****」(ママユウコ、とっても美しい)

亜希子も、パッと花が咲いたような祐子の姿を見て、感動に胸を打ち振るわせた。

「*****」(マリゼ、ピピ、そして天国のスージありがとう、私とってもうれしいわ)

二人からのプレゼントを身に着け、鏡の前で自分の姿を覗き込んでいる祐子の背後にマリゼが近付き、持って来た袋を差し出しながら言った。

「*****」(ユウコ、私のアガセケを観てくれるかしら?)

振り返った祐子に、袋からアガセケを取り出しながら、自分が一番気に入っている作品だとマリゼが説明した。白地に濃いブルーの模様と赤い細かなジグザグのラインをあしらった、大きな瓢箪のような形をしたアガセケだった。丁寧に縁取りされていて、一見して質の高さを感じさせる。

「*****」(あら、マリゼ、いつからこんな素敵なアガセケを作れるようになったの?)

「*****」(本当は、母に手伝ってもらったの)

「*****」(素敵じゃない。これならみんな喜んで買うわよ)

マリゼは満足げだった。

「*****」(ママユウコ、スージがママユウコのキテングを着た姿を見たらどれほど喜ぶか知れないわ。スージが一番頑張ったから)

祐子は唇を噛みしめ、ピピの方を振り向いて言った。

「*****」(ピピ、スージとお話ししようか?)

「*****」(ママユウコ、私、いつも心の中でお話ししているわ)

「*****」(わたしもそう)

マリゼが相槌を打った。

「*****」(出来るかどうか分からないけど、少しだけ、スージを呼んでみましょう)

ふたりは祐子が心の中でのことを言っているのだと思った。祐子が亜希子の方を見ると亜希子が頷いた。祐子は自分が瞑想に入ることを3人に告げた。賢に呼びかけた。日本はまだ真夜中の筈だったが賢は直ぐに応答した。

「祐子、分かった。物質転送機でバッテリー駆動タイプのOVSを直ぐに送る。受物装置の電源を入れてその周りから1メートル以上離れている。OVSの操作の仕方は亜希子が知っている」

祐子はバックパックの奥から受物装置を取り出し、電源を入れてそれをベッドの脇に置き、全員そこから離れるように言った。ピピとマリゼは何が起きるのか恐れを抱きながらドアの近くまで遠のいた。直ぐに受物装置の脇にOVSが現れた。亜希子が拍手をした。ピピとマリゼは驚いて抱き合ったが、顔だけはOVSの方を向いている。祐子はみんなにモニター画面が見えるようにOVSの位置をずらした。

「亜紀、いいわね、スージを呼んで」

亜希子はヘッドギアを付けてから電源を入れ、意識をスージに向けた。ピーッという音がしてから、画面にスージの顔が現れた。マリゼとピピは驚愕した。懐かしさより、恐れの方が数倍大きいようだった。先ず亜希子がスージに話し掛けた。スージが亡くなってすぐ、亜希子は幽界を訪れてスージの霊を捕らえ、スージが銃撃に巻き込まれ亡くなったことと死後の世界についての説明をしたのだった。スージは最初の内は亜希子の話を受け入れなかったが、何度か説得に訪れてやっと精神が安定したのだった。

「*****」(スージ、わたくし亜紀よ。分かるかしら?)

「*****」(アキ、この間はありがとう。アキのおかげで自分が死んだことが分かったわ。今は心も落ち着いているわ)

「*****」(スージ、ここにみんな居るのよ。今、祐子お姉様に代わるわね)

祐子がヘッドギアを付け、画面に映っているスージの姿に向かって優しく話しかけた。

「*****」(スージ、久しぶりね。マリゼとピピから綺麗なキテングもらったわ。本当にありがとう。あなたの刺繍とても素敵よ。スージ、あのときは大変だったわね。今どうしているの?)

「*****」(あっ、ユウコの声だ。ユウコ、元気?私、死んじゃったみたいなの。でも生きているわ。マリゼとピピはどうしているかな?)
二人はがたがた震えていて、言葉が出ない。

「*****」(今ね、ピピに変わるわね)

亜希子は怖がっているピピの頭にヘッドギアを被せた。ピピにスージへの語りかけ方を一通り説明し、意識をスージに向けてスージを呼ぶように伝えたと、祐子がピピの肩に手を掛けた。ピピは震えが止まらない。

「*****」(さあ、ピピ、スージに何か話し掛けてご覧なさい)
ピピは唇が青ざめ、言葉が出てこなかった。見かねたマリゼが大きく息を吸って話し始めた。亜希子が急いでピピの頭からヘッドギアを外し、マリゼの頭に載せた。

「*****」(ス、スージ、あなたなの?本当にスージなの?)
マリゼの声が涙声になった。

「*****」(あっ、マリゼだ、マリゼ、マリゼ、マリゼの声が聞こえる。マリゼ、元気にしている?)

スージの喜ぶ声を耳にすると、ピピも勇気を振り絞って、画面に向かって話しかけた。しかし、スージは応答しない。ピピは焦っておろおろした。亜希子がもう一度、一人ずつしか話せないことを説明するとやっと納得した。マリゼが泣き出してしまったので、ピピが交代した。

「*****」(スージ、スージ、生きているの?どこに居るの?ねえ、スージ、もう一度会いたいわ)

「*****」(ピピ、ピピなのね。私は死んだのよ。だから違う世界に居るみたいなの。みんな元気?)

スージがピピに応答したので、ピピは興奮した。

「*****」(スージ、もう痛くないの？スージ、大丈夫？)

「*****」(死んでからは、何にも痛くなくなったわ。ピピ、ユウコに誕生日のプレゼントあげたのね？よかったわ)

「*****」(さっきあげたの。ママユウコ、いいえ、ユウコとってもよく似合うわ。ユウコとっても喜んでる)

ピピは泣かなかった。祐子とマリゼとピピは交代でスージと会話をした。話は尽きなかったが、スージの応答が非常に冷静なため、3人は心を落ち着けて会話をすることができた。しばらく話してから4人は心を乱すことなく別れを告げることができた。

祐子が賢にOVSを引き上げるように伝えようと、直ぐにOVSは消えた。マリゼとピピは狐につままれたような顔をしている。OVSが消えてからはふたりの祐子を見る目つきが変わった。今までの尊敬だけでなく、畏敬の念がはっきりと顔に表れていた。もうふたりにとって祐子は友達でも首長でもなくなった。本当の女神の化身に変わっていた。緊張しながらもふたりは祐子に対して近況などを語った。祐子はふたりをこの上なく愛おしく感じた。マリゼとピピは9時過ぎに家に帰って行った。祐子は亜希子とふたりで外まで見送りに出た。夜道が心配だった。ドアの側にジミーとメドリスナが居た。

「*****」(どうしたの？宿舎に戻らなかったの？)

「*****」(これは我々のつとめです、ママ)

祐子はジミーにふたりを送り届けてほしいと頼んだ。ジミーが車を取りに行くと、マリゼとピピは目に一杯涙を溜め、別れを惜しんで、いつまでも祐子の手を放さなかった。車が来ると、祐子はマリゼとピピを1人ずつ抱き締めた。

キヴェからチャンググまではおよそ80キロメートルほどだが、ジミーは時間的な余裕をみて、ジープをゆっくり進めた。道は良くなかったが、ジミーの気を配った運転と、周囲のスイスを思わせるような景観に祐子と亜希子はこれから訪れるであろう困難への不安を忘れ、湖とその周囲

の景色の移り変わりにうっとり見とれていた。チャンググに着いた時は、正午を30分近く過ぎていた。ジミーは路地を入り、周囲に木立のある長い土壁に囲われた建物の脇に車を停めた。

「****」(ママ、ここでマリーたちを待ちます)

マリー達のグループは早朝キガリを発っていて、既に到着しているはずだった。祐子はトランシーバーで呼び出してみたが応答が無い。周囲は閑散としていて、人影も無く、自動車も通らない。5分ほどして、突然マリーの乗った装甲車が姿を現した。祐子たちはほっとした。しかし、マリーを乗せた車は祐子たちの車の横を素通りして、50メートルほど先の角を右折してしまった。トランシーバーの呼び出しがあった。マリーからだ。周囲を警戒しているので角を曲がったところに停車して待機していると言った。マリーが兵士を一人伴って車から降りて来た。現地の女性が身に着ける長いオレンジ色のスカートと黄色のシャツを着ている。どう見てもフランス人には見えない。兵士も銃をどこに隠したのか、一見現地の青年のような印象を受ける。武装しているようには見えない。

「ママ、今日は武力衝突無いようです。だけど、1週間前、ルワンダの住民17人この国境警備隊に逮捕された。理由分からない。軍や警備隊に逆らうの絶対だめ。私、お金使う。ママと亜希子、私の部下。大学院の助手になってください。私が助教授のこと忘れないで。ジミーたちみんなトラックーいいね」

マリーはキガリで事前に打ち合わせた内容を、念を押すように言った。まずマリー達が国境を越え、10分ほどしてから祐子たちが通過することになった。マリーは祐子と亜希子の様子を窺いたかったようだ。マリーのトラックを運転している兵士はアルフォン・スダヤという名の小柄なブチの青年で顔が細長く鼻のとがった典型的なブチの顔をした男だった。祐子の方に軽く頭を下げた。丁度10分経過して、ジミーは車を発進した。祐子が出発前にルワンダ政府に対してコンゴ民主共和国への人道支援の為の活動について伺いを立てていたので、出国は簡単な荷物の検査があっただけだった。既にマリー達は通過したはず

だ。キヴ湖に注いでいる国境のルシジ川を渡ると、検問所があった。検問所には木で出来たゲートが設けてあり、通り過ぎる者のIDを確認している。どうやらルワンダから入国する人は、徒歩や手押し車での通行ならIDを提示するだけで問題ないようだ。祐子たちの車は7、8人の銃を持った軍人に止められた。服装は普段着で、肩から銃を掛けているがこの者たちが役人であることは通行人に対する横柄な態度と、その割には緩慢な動きで直ぐに分かった。役人たちの指示に従ってジミーは車を道路の脇に停めた。1人の役人がジミーに何か言いながら、車から降りるようにジェスチャーで指示した。ジミーがパスポートと書類を手にして車から降りると、役人は首を横に振り、手を振り下ろして、全員降りろというジェスチャーをした。全員が書類一式を手にし、指示に従って車から降りると、今まで黙っていたメドリスナが言った。

「Hazzlie!」(ハズリー!)

役人とおぼしき男達の中の一人が、応答した。

「Medrisna!」(メドリスナ!)

二人は駆け寄り、ハグし合った。しかし、メドリスナもハズリーと呼ばれた役人も、その後一言も言葉を交わさなかった。周囲にいる役人たちは、何事も無かったかのように知らんぷりしている。極めて不自然な雰囲気だった。役人たちに誘導されて、4人は検問所のそばにある建物の中に入って行った。コンクリートの床を進み、奥の薄汚れた壁の端にある木の扉を開けて部屋に入った。そこには既にマリー達一行がテーブルの席に着いていた。祐子達はマリー達の横の席に着いた。役人の内の一人が、全員のパスポートと書類を集めた。祐子は一瞬不安を覚えた。マリーの方を覗くと、目で軽くうなずいたのがわかった。祐子がパスポートと書類を分けて、両手で大切そうに渡すと、全員が祐子を真似て男に書類を渡した。全員の書類を手にした男は部屋を出て行った。リーダーと思しき男がテーブルの前に立ち、訪問者全員に向かって話し始めた。

「Bino bozali banani ? Okei wapi ?」((おまえ達は何者だ? 何処に行く?))

男の話すことを、マリーがスワヒリ語に翻訳して全員に伝えた。

「*****」(我々がだれで、何処に行くのかと聞いています)
祐子達に向かってスワヒリ語でそう言った後で、マリーは兵士に向かってリンガラ語で答えた。

「*****」(我々はキガリの住民で、森の調査に来ました)

「*****」(リンガラ語を知っているのか?)

役人がマリーに向かって言った。マリーは頷いた。
祐子と亜希子にもマリーの話すリンガラ語は理解できた。しかし役人の言葉は半分ほどしか分からなかった。祐子は口を挟まず全てをマリーに委ねた。

「*****」(たとえ学術調査でも全員の長期滞在は許可できない。大学の助教授と助手、それに運転手2人と補助の一人だけは熱帯森林の生物の調査をするという条件で1か月の滞在を許可する。お前たち全員がブチ族に所属しているから特別の配慮だ。だが、今回だけの特別処置だということを忘れるな。他の者は1週間だけ滞在許可を与える。わが国の国内で軍事的な行動や、反政府的な行為、ブカヴの自治組織に従わない行動、あるいはわが国の資源を強奪するような行為を行ったら即座に滞在許可を取り消し、国外に強制追放する。その場合は安全の保証も無い)

鋭い目つきをした、体の厳つい黒人の話す言葉は、威嚇に似た響きを感じさせた。マリーは役人の話を、トーンを落とした穏やかな口調で全員に伝えた。どうやら、入国に必要な情報は既にマリーから役人たちに伝えられているようだった。

「Komela bier ezali bisengo ya mokili.」(世界中のひとがビールを飲むのが大好きでしょう)

マリーが役人の長に向かってリンガラ語で言いながら、テーブルの下からプリムス一箱とその上に多分紙幣を入れてあるだろうと思われる紙袋を乗せて、テーブルの横に置いた。役人の長は軽く頷いただけで、にこりもしない。別の役人がプリムスの箱を持ち上げると、部屋から出て行った。男が出てゆくと間もなく、先ほど書類を持って出て行った男が戻って来た。祐子と亜希子、ジミー、メドリスナ、それにマリーとア

ルフォンの1か月滞在が認められていた。それ以外の兵士達には1週間の滞在しか許可されていなかった。マリーは役人の長に抗議しているようだったが、役人は首を横に振った。マリーはあきらめた風に、スワヒリ語で

「*****」(この場合は、一旦引きましょう)

と言った。全員部屋を出て車に戻ると、車の脇に自然科学研究所の所長クリグ・マハナムとコンゴ人民銀行の部長ボモ・バサンスガが待っていた。マリーが

「*****」(トラッカー達の滞在は1週間しか認められなかった)と言うと、クリグが1ヶ月の滞在許可がもらえなかった者たちの書類を集め、ボモと一緒に建物の中に入って行った。全員車の中で待った。二人はすぐに出て来た。全員が1か月の滞在許可に変更されていた。マリーが二人に封筒に入った札を渡した。それを素早くしまい込むと二人は車に乗って去った。

「マリーありがとう。さすがだわ」

「ママ、ここは何とかなっただけど、これからですよ」

軽くほほえみを返して、マリーが応えた。

アルフォンの運転する車が先頭を走り、ジミーがその後を追った。検問所が見えなくなってから祐子がメドリスナに訊いた。

「*****」(メドリスナ、あの人は誰?)

「*****」(はい、従兄弟です。ザイールで役人をしているんです。家族がザイールは危険だから国から出たいと言っているようです。僕にも何度か連絡がありましたから、もうルワンダは安全だと言ってやりました。彼の家族はルワンダに移住したいようです)

「*****」(でも、せっかく役人の職に就いているのだから、惜しいわね)

亜希子と言った。

「*****」(役人とは謂っても、給料がきちんと支払われないのです。だから、あいつの家族も生活が厳しくて・・・)

祐子と言った。

「*****」(その話誰かに聞いたわ。だから、国軍の軍人でも、国民に対して略奪や暴行が絶えないって)

「*****」(そうなんです。貧困こそが元凶なんです)

既に4時を回っていた。その日はブカヴに滞在することにした。祐子も亜希子も既に黄熱病のワクチンを注射し、ツェツェバエやハマダラカに対する抗マラリア剤、南京虫などの害虫の駆除剤、コブラなどに噛まれたときのための抗毒蛇血清などの備えを十分にしてきたつもりだが、もう一度気を引き締めた。

人口25万人、カウンティ全体で50万人規模の町だと云うだけあって、いろいろな建物が建ち並んでいる。ルワンダの綺麗な街並みに比べると、荒んだ雰囲気は免れない。直ぐにホテルに着いた。新しい建付ではないが、懸念していた治安上の不安を覚えるほど廃れてはいない。簡単な鉄条網の柵で囲われた野晒しの駐車場に車を停めて、チェックインすることにした。部屋はボモが4部屋確保してくれてあった。祐子と亜希子、マリーと食料係の女性ソニア・ペルガマ、ジミーとメドリスナ、アルフォン・スダヤともう1人のトラックー ベム・ビハラムカが同室になることに決まった。マリーが全員分のチェックインをするためにホテルのフロント向かった。フロントマンに車の中に荷物を置いたままでも安全かどうか尋ねたが、保証できないという応えが返ってきた。その上ホテルの一時預かりも安全の保証はできないと言われてしまった。マリーがチェックインの手続きをしている間に、全員で荷物を部屋に運び込むことにした。亜希子が荷物運びを手伝おうとするとメドリスナがそれを止めた。男達が全て運ぶと言い切り、手際よく荷物を運び込んで来た。しかし、ガソリンには手子摺っているようだった。マリーがチェックインを終えて戻って来て、部屋の鍵を配ると、男達がガソリンや、銃器はジミーとメドリスナの部屋に、食料や医薬品などはアルフォン・スダヤとベム・ビハラムカの部屋に運び込んだ。全員が2階の部屋に割り当てられた。部屋に入ると、シングルベッドが二つ並べて置かれている。欧州やアメリカにあるようなダブルクッションではなく、簡易ベッドのような薄いマットレスだけのベッドだ。亜希子は先ずベッドの上をチェック

した。シーツは一応クリーニングされているように見えたが、どちらのベッドもマットレスに織り込んである部分が黄色く変色している。奥にあるベッドのマットレスの間から黒い虫が這い出して来ていた。

「由宇お姉様、このベッド、虫がいるみたいですよ」

「ここに来たら、もう覚悟を決めないかね。亜紀、あなたエチオピアに行ったときはもっと酷かったんじゃないの？」

「ええ、あのときのことを考えると、恐ろしくて鳥肌が立ちます。でも、あのときは、それでも覚悟を決めていましたから……」

「今度も覚悟を決めて来たんでしょう？」

「はい、お姉様。でも、もう2度とあんな病気に感染したくないので……」

「それはそうね。今日はベッドの周りに強力な殺虫剤を振り掛けて休んだほうが良さそうね。あまり効かないっていう話だけど……だけど亜紀、怖がったらだめよ。怖がると余計に虫が寄ってくるからね」

亜希子は執拗に室内をチェックした。壁には誰の作品か分からないが、アフリカの高原を写生した油絵が掛けられていて、一応ホテルの部屋らしい雰囲気は出来ている。シャワールームはあったが、水が十分には出なかった。その上、出てきた水は薄黄色だ。

「とても身体を流す気になれないわ」

と亜希子が言った。トイレのフラッシュも、レバーを引いても水が出てこない。レバーをガチャガチャと動かしているとやっと流れ始めた。やがて、夕日が西の山陰に落ちかけて、部屋の中がオレンジ色に染まってきた。祐子は狭い部屋の中を歩き回ってチェックしている亜希子を呼んだ。

「亜紀、見てご覧なさい。なんて美しいんでしょう。アフリカの夕日は最高ね。「ああ生きてる！」って感じ……あの人どうしているかしら？」

亜希子が祐子の側に来て窓の外を覗き込んだ。

「本当にすてきな夕日。わたくし幸せです。自分の一番したいことをさせて頂いて……お姉様、ありがとうございます。あの方もきっと回復なさっていなさるわ」

しばらくの間、2人で夕暮れの風景に酔いしれていると、電話が鳴った。マリーだった。安全を考えてホテルのレストランで食事をしようという電話だった。暫くして全員がレストランに集まった。兵士や食料係は祐子と一緒に食事をするというマリーの説明に緊張していた。彼らにとってママユウコは雲の上の存在なのだ。

白いスーツを着た背の高いニグロのボーイに円形のテーブルに案内された。現地人の男性達4人と、現地人の中に東洋人とおぼしき男が一人含まれた5人のグループの2つのグループが食事をしていて、4人のグループは役人達のように見える。別段祐子達を意識していないようだ。5人のグループは祐子達の動きに敏感に反応しているようだった。祐子が席に着くと、亜希子とマリーが祐子の両隣に座り、それを待っていたかのように銘々席に着いた。マリーがボーイを呼んだ。ボーイは非常に礼儀正しく、穏やかなイメージを感じさせる。マリーはボーイからメニューを受け取るとスワヒリ語で祐子にどれにしたら良いか聞いた。祐子は全員に聞こえるように、「自分には分からないから、マリーに任せる」とやはりスワヒリ語で応えた。マリーは他の全員に向かって言った。

「****」(サラダとウガリとムアンバでいいですか？ウガリはどうもろこしの固い練り粥。ここのムアンバは魚やチキンを加えたピーナツソース入りのピリ辛いシチューです。メインディッシュがムアンバで良ければ全員分頼みます)

コンゴの食事について良く知っているのはソニアだけだ。マリーがソニアの方を伺うと、ソニアが頷いたので、誰もマリーの提案に異を唱えなかった。祐子がマリーに小声で男性達にビールを頼んであげるように言った。男達の頬が緩んだ。先ず、女性達の前に水のグラス、そして男性達の前にプリムスが運ばれて来た。マリーが祐子を覗いたので、祐子はスワヒリ語で言った。

「****」(コンゴではあなたがリードしてね)

マリーは水のグラスを持つと大きくなずいて言った。

「****」(それでは無事の入国を祝して乾杯しましょう。乾杯！)

「****」(乾杯！)

発声したのは祐子と亜希子だけだった。皆、グラスを手にしたまま、じっと祐子を見詰めている。

「*****」(皆さん、ご苦労様でした。よく頑張ってくれました。ありがとう。さあ、頂きましょう)

その一言で全員が手かせを外されたようにグラスを口に運んだ。男達はコップ一杯のビールを一息で飲み干した。少しして大きなサラダボールと取り皿が運ばれて来た。コックがサラダを取って全員の席に配っていた。しかし誰も手を付けようとしない。再び祐子が出た。

「*****」(さあ、皆さん頂きましょう。遠慮しないでどんどん食べてね。食べないと無くなっちゃうわよ)

皆、うれしそうに食事を始めた。マリーが祐子に向かって言った。

「*****」(やはり、ママじゃないとだめね)

「*****」(マリー、そんなことはないわ。未だ、みんな馴れてないのよ・・・ところで、明日は何時に出たら良いかしら?)

「*****」(7時に食事をして、8時半に出発しましょう・・・・ママ、後でお部屋に伺います)

マリーは全員を見回してから翌朝の食事と出発の時間を告げ、祐子の方を向いて頷くように言った。

マリーと祐子はすべてスワヒリ語で話した。それは二人の会話を全員に分らせることと、英語や日本語で話すと全員に何か自分たちに対して隠し事があるのではないかという不安を抱かせかねないこと、そして、もう一つ大切なことは周囲の者にできるだけよそ者という印象を与えないための配慮だった。

二人のボーイが大きなボールに入ったムアンバとウガリ、そして取り皿を持って来た。皆、祐子の軽くうなづく顔を窺ってから食事を始めた。ムアンバは赤黒い色をしていて、見るからに辛そうだったが、口にしてみるとそれほど酷い辛さではなく、むしろ味が薄いとさえ感じた。

「*****」(ママ、それほど辛くないですね)

亜希子もスワヒリ語で言った。ソニアが微笑みながら胡椒と食卓塩を亜希子の方に差し出した。全員和やかな雰囲気の中での食事に満足した。

食事が済むと銘々部屋に戻って行った。

祐子達が部屋に戻り、寝支度をしていると、マリーがやって来た。マリーは部屋に入ると、先ずドアの鍵の確認をし、電球の具合を点検し、そのまま直ぐに浴室に向かいシャワーやシンクの水の流れを確認した。

「ママ、安全で、整備されたホテル、もうない。これ最後」

「マリー、分かっているわ。明日からはもうジャングルの中の村に向かう予定だったわね」

「ママ、そう、先ず我々の足跡を消す。これ大事。行動パターン感づかれないこと、これ大事。周り全部敵。今日、もうターゲットになり始めている。明日はメドリスナとベム運転する。水と薬、それとタバコ、酒手元置く。他みんなシートの下隠す。いいですか？」

「分かったわ。一番警戒しなくてはならないのは兵士ね」

「それと、役人。あちこちにいる。荷物調べられる。できるだけ早く森の道入ること大切。だけど、森の中の村にもいろいろな兵士いる。どこの兵士か見極め難しい。だから村々も安心できない。兵士監視してる。兵士村人脅して、全部巻き上げて生きてる。だけど、村人への哀れみ、返って危険。我々居なくなった後、村人酷い目に遭う。ママ、どうしたらいい？」

「方法はただひとつよ。ここの国の全ての人々が普通に生活できるようにすることよ。食べるものに困らなくすることよ。全てのひとよ」

「それ、無理です。ママ、ひとつの村だけでも、難しいです」

黙って聞いていた亜希子が言った。

「アフリカの人たちは呪いや精霊を信じていると聞きました。それをうまく利用しては如何かしら？」

「スピリチュアルなこと、それ、一番難しいです。兵士も村人も、この国の人たち、みんな霊のこと怖れてる。話しても、誰も受け付けない」

「亜紀、そう、兵士も怖がっているのね。それよ。なんか方法がありそう。私考えてみるわ。マリー、亜紀ありがとう。いよいよ明日からね」マリーが部屋を出て行くと、祐子と亜希子はベッドに入って暫くの間、これから踏み込む未知の世界のことを話し合っていたが、いつしかどち

らともなく眠りに落ちていった。

翌朝は亜希子が先に目を覚ました。起き上がると、スリッパを引っかけ、窓際に歩み寄った。キガリから持ち込んだスリッパが安心感を与えてくれる。昨夜、ベッドに入る前に祐子が撒いてくれた虫除けスプレーのおかげで安心して休むことができた。窓の外はみごとに晴れ渡っていて、雲ひとつ無い。

「亜紀・・・もう起きたの、早いじゃない」

「お姉様、ごらんになってください。とっても良いお天気ですわ」

「虫は大丈夫だったの？」

「はい、お姉様がスプレーを撒いてくださいましたから、安心して休むことができました」

「そう、それは良かったわ」

「でも、お姉様、ご自分のベッドには撒かれなかったでしょう？それでも大丈夫でしたか？」

「ええ、大丈夫よ」

祐子はおもむろに起き出し、スリッパを履いて亜希子の横に来た。

「まあ、なんて綺麗なんでしょう。アフリカの自然は本当に美しいわね」

「本当に美しいですわ・・・お姉様、これからのことが全く想像できませんわ」

「亜紀、これからのことは考えない方が良くいわ。今が最後と置いていけば、次の瞬間に何が起ころうと、悔いることはないでしょう」

「それでも、やっぱり心配ですわ」

「不安を抱いちゃだめよ。激流下りのボートに乗ってしまったんだから、もう覚悟を決めて、ボートに任せきるしかないのよ。思い切り楽しまなくちゃ」

「はい、でも・・・」

ふたりともシャワーは止めて、持参した水をタオルに含ませて顔と首回りを拭いた。それだけでも頭がすっきりした。

暫くしてふたりはロビーに降りた。祐子はいつの間にかジミーとメドリスナが亜希子の背後に附いて来ているのに気がついた。

「エレベータには乗っていなかったのに・・・」

祐子は独り言を言った。これほどまで忠実に自分たちを護衛してくれる二人の兵士に祐子は感謝の念を抱かずにはいられなかった。

既にマリーとソニアがフロントの脇のソファに腰掛けて待っていた。祐子の姿を見ると二人は直ぐに立ち上がった。朝の挨拶を交わすと、マリーは祐子を気遣いながらそのままレストランに向かった。レストランに入ると昨日の席にアルフォンとベムが坐っていた。全員が席に着くとボーイがコーヒーを給仕してくれた。朝食はバイキング形式だった。祐子と亜希子は野菜サラダとパンだけしか取らなかった。4人の兵士達は大皿に山のように食べ物を盛り付けていた。全員が食事を始めるとマリーが言った。

「*****」（食事が済んだら、一旦部屋に戻って、全ての荷物をフロントの横に降ろしてください。私が先に来て待っています。燃料や食料などの大きな荷物はチェックアウト前に車に積み込んでください。荷物番のため、車には必ず誰か乗っててください。今日運転するメドリスナとベムが乗っているのが良いでしょう。今後も必ず誰か一人は車に付いているようにしてください）

ホテルを出ると、少し街の中を走った。家々の壁にはまだ新しい銃撃の跡が残っていて、激しい戦闘があったことを物語っていた。完全に崩壊している塀や、建物もある。兵士達は座席の横に置いてある銃に常に手を掛けていて、意識を研ぎ澄ませていた。やがて家がまばらになってきた。車はカタナ・ルートをキヴ湖に沿ってゴマ方面に向けて北上した。道は酷く荒れていて、じっと坐っているのが辛くなるほどだったが、サスカブの部下が祐子と亜希子の座る後部座席だけはダブルクッションに改造してくれてあったので、何とか耐えることができた。祐子は他の者、特に臀部に肉の少ない男達はどんなに辛いだろうと思った。ジミーに尋ねると、「全然平気です」という応えが返ってきた。メドリスナもただ笑って運転しているだけだった。右手に見える湖側の景色は美しかった。地図を見るとキヴ湖の中央に縦に長い国境線が引かれている。美しい湖のどこにも国と国を隔てるような印は無い。祐子はふと「考え方、

生き方の異なる西洋人達に、元々住んでいた自然と調和した人達の種族としての繋がり、生活基盤となる自然界の領域を無視して植民地化され、領地の奪い合いの結果引かれた境界線。そしてそれがそのまま、それらの国と国を隔てる国境線として残った。自分達の現世での生き安さのために、他の遠い国の人々の自由を奪い、生活を犯し、その上に人間を人間として扱わない蛮行を繰り返してきた人間の愚かさを悲しく思った。その西欧諸国の植民地政策の負の影響が今も民族間、国家間の争いとなって残り、人を操る手腕を持った者達が沢山の罪もない人々を搾取し続けている現実。一体どうやったら、このアフリカの地を、元の姿に戻せるのかと考えた。時々道路の右手に民家の建ち並んだ土地を通過する。家々の周辺ではあちこちの木々がなぎ倒されたり、黒く焦げたりしていて、激しい戦闘が行われたことを物語っていた。ホテルを出てかれこれ1時間ほど走ると、車はキヴ湖から離れ奥地に向かって進み始めた。路面はますます悪くなってゆく。

前方にゲートが見えた。沢山の兵士が銃を手にして立っている。2人の兵士が銃を掲げて車の停止を命じた。ジミーとアルフォンは即座に銃を座席の下に隠した。ベムとメドリスナはゆっくり車を停めた。銃を持った役人のような男がベムに向かって何か言っている。どうやらパスポートを見せろと言っているようだった。ベムもアルフォンも窓を開けずにパスポートを掲げた。出掛ける前にマリーが、「コンゴ国内に入ったらどんなことがあっても相手にパスポートを手渡してはいけない」と言っていたことを祐子は思い出していた。祐子は小声で3人に窓を開けないように伝えた。全員分かっているようだった。マリーがA4に印刷してある偽造した大学助教授の身分証明書とパスポートをガラス越しに掲げた。兵士達が祐子達の車に向かってやって来た。4人はマリーを真似て窓越しにパスポートを掲げた。祐子と亜希子は帽子を深く被り、顔が分かりにくくしている。兵士が車の中を覗き込むようにした。その時前の車を調べていた兵士が腕を回した。どうやらOKサインが出たようだ。通り抜ける時祐子は兵士がタバコを6箱入れた包みを手に入っているのが目に入った。マリーが渡したのだ。マリーからトランシーバーで連

絡があった。最小限のプレゼントで乗り切れたと言った。

そこから暫くはサファリ・ラリーのような走行に耐えなければならなかった。

「*****」(亜紀、大丈夫?)

「*****」(はい、大丈夫です。気温があまり高くないから、何とか耐えられます)

祐子はその通りだと思った。このあたりは赤道直下で大分暑いだろうと覚悟を決めてきていたが、実際はそれほど暑くはなく、窓を開けずに走ってもそれほど蒸し暑さを感じなかった。車は本道から脇道に入った。細い道だったが、クリグ達との待ち合わせの町カタナに行くにはその道を通らなくてはならなかった。ほとんど民家も無くなった。

「*****」(このあたりは標高が高いのよ。だから過ごしやすいのね。だけど、ここの人たちにとって、ここはとっても生きにくい場所になっているのよ。反乱軍や他国籍軍の兵士が民家を襲撃して、全てを奪い去ってしまうから、みんな家を捨てて森に逃げ込んでいると言われてるわ。だけど、森も生きる上では別の苦しみがあるでしょう。何とかしなくては・・・)

祐子は半分独り言のように言った。その時後方で激しい銃声が聞こえた。それは人の話し声がやっと聞き取れるほどの車の騒音の中でもはっきりと分かる音だった。ジミーとアルフォンが即座に銃を持ち上げた。ジミーが言った。

「*****」(我々を威嚇している。近いぞ。ママ、アキ、頭を下げていて)

マリーから脇道に逃げ込むという連絡が入った。ベムが木々の無い狭い脇道に向けてハンドルを切り、林道の中を突き進んだ。メドリスナも後を追った。車は周囲に木々が茂る草地の端の大きな木立が数本立ち並んでいる、表通りからは死角になるところまで進んで止まった。

「*****」(ママ、アキ座席の下に潜っててください)

ジミーはそう叫ぶと銃を手にして車から飛び出し、一番道路に近い木の陰に身を隠した。アルフォンも車から降りて二番目の木の背後に身を隠

し、銃をかまえた。車体が傷だらけの古い日産のライトバンが急ブレーキを掛けて本道の路肩に停まり6人の男達が銃を手にして飛び降りて来た。軍でも民兵でもなさそうだ。祐子がメドリスナに言った。

「*****」(盗賊よ。私たちが付け狙っていたんだわ)

「*****」(ママ、絶対頭を上げないでください。私も車から降りますが、車の影でお二人をお守りしますから安心していてください)
メドリスナが音を立てないようにドアを開け、銃を手にして車を降りた。「お姉様、どうしたらいいのでしょうか？」

「大丈夫よ。盗賊は私たちが唯の調査隊だと思っているようだから、安易に襲って来たんだわ。ジミー達が追い払ってくれるわ」

ところがそう簡単には事は済まなかった。6人の男達は背丈の高い草むらの中にちりぢりに散って姿が見えなくなった。一瞬あたりは静まり返った。不気味な雰囲気漂う。突然銃声がし、銃撃戦が始まった。ジミーとアルフォンが盗賊と撃ち合っている。祐子には発砲している人間の数が分かった。全部で6人だ。勿論ジミーとアルフォンが含まれているはずだ。二人を除くと4人だ。

「あと二人居るはずよ。奴ら、ここに来るわ、亜紀、盗賊の車の中にテレポーターションして、車の警笛を鳴らすのよ。奴らが車に戻り始めたら直ぐに戻って来てね。もし鍵が着いていたら奴らの車を動かすのよ。いいわね。警笛を鳴らしながら走り続けるのよ。あまりスピードを出し過ぎないで、敵を誘い出すのが目的だから、十分離れたと思ったらエンジンを止めて、またここにテレポーターションで戻って来て」

祐子は直ぐにマリーに、盗賊が近くに潜んでいるから警戒するように伝えた。マリーはそのことを直ぐにベムに伝えた。ベムが車から降りるのが見えた。

亜紀は銃声が止んだほんの一瞬の間、意識を集中し、盗賊の車の運転席にテレポーターションした。盗賊の車のエンジンは掛かりっぱなしになっていた。荷物を強奪して直ぐに逃走するつもりだったようだ。亜希子はブレーキをリリースし、車を動かした。動かしながら警笛を鳴らし続けた。祐子が見ていると、盗賊達が3人、何か叫びながら走り去る車を

追って全力で走って行った。少しして、一人が脚を引きずりながら、その後を追って行く。亜希子は2分ほど走って、ハンドルをブッシュの方向に切り、更に道無き道を強引に2分ほど走ってから車のエンジンを止めた。5分ほどで亜希子は戻って来た。帰還して意識が戻ると亜希子は言った。

「お姉様、鍵を抜いて持って来ました」

「亜紀、偉いわ。これで奴らは動きがとれないわ。けどあと二人はどこに行ったのかしら？」

その時いきなり祐子の乗っている方の左のドアに衝撃を感じたと思うと、3発の銃声がして、何かがどさっと倒れる音がした。

「メドリスナ、メドリスナは大丈夫かしら？」

祐子の叫び声に重なるように、ベムの車の方から鉄と鉄が激しくぶつかり合う音がした。ベムと盗賊が銃身で殴り合っている。銃声が一発して、少ししてまた2発の銃声がした。車の車体に凭れ掛かるように盗賊が倒れた。二人の盗賊はこっそり車に忍び寄って、荷物を強奪する役割だったようだ。二人ともメドリスナの銃弾に倒れた。どちらも銃弾は脚に命中していたが、盗賊達の命に別状はないようだった。キガリを発つ前に祐子が決めた「自分が危なくない限り、決して命を奪ってはならない」という迎撃のルールに従ったのだ。メドリスナが助手席のドアを開けて車の中を覗いた。

「*****」(ママ、アキ、大丈夫でしたか?)

「*****」(メドリスナ、どうなったの?)

「*****」(はい、二人が草むらから突然現れたので、迎撃しました。二人とも倒れて唸っています。銃はこの通り取り上げました)

2丁ともあの有名なカラシニコフだ。

間もなくジミーが一人の男の手を自分の腰ベルトで縛り上げて連れて来た。足を引き摺りながら車の後を追って行った男だ。アルフォンも取り上げた銃を手にして附いて来た。アルフォンの没収した銃もカラシニコフだった。全員が車の外に出た。マリーが言った。

「*****」(ママ、怪我はありませんでしたか?ホテルから我々を

つけていたようです。でも、あの車はどうしてひとりで動き出したのかしら?)

「*****」(亜紀が動かしたのよ)

「*****」(え、どうやって?)

「*****」(テレポーテーションよ。今に何度か見ることになるわ) 全員きょんとした顔をしている。ジミーが言った。

「*****」(ママ、こいつらどうしましょう?)

「*****」(銃弾はどこに命中しているの、身体の中に残っているのかしら?)

ジミーが連れてきた男を押さえつけて脚を調べた。男が悲鳴を上げた。

「*****」(こいつのは貫通しています)

メドリスナが祐子達の車の横に倒れて右足を押さええている男の手をひねり上げて傷口を調べ、ベムがもう一人の男の両足の膝下を調べた。メドリスナの調べた男の脚には銃弾が2発残っていた。ベムは「銃弾は残っていないが両脚の膝下の骨が折れている」と言った。二人とも逃げ出そうとして必死にもがいていたが、4人の兵士が自動小銃を構えると、おとなしくなった。祐子はメドリスナに林の中から蔓を切って来て3人を近くの太い木に括り付けさせた。それから亜希子に消毒液と止血剤、包帯を用意させ、3人の脚を治療した。先ず銃弾の残っている男の脚をメドリスナに押さえさせ、パンツの銃弾を受けて血だらけになっている部分を切り裂いた。それから自分の手を消毒して瞑目した。祐子が目を瞑ると皆、その瞬間に意識がもうろうとなり、その後の祐子の動きがはっきり分からなくなったが、全員の意識が戻ったときには祐子の手は血だらけで、掌に実弾が2個載っていた。男の脚の傷はもう塞がっている。祐子は一応傷口を消毒して、二人目の男の治療に移った。やはりパンツを破り止血してから、傷口を消毒した。男は悲鳴を上げた。祐子が消毒のガーゼを男の脚から取り除けると、もう傷口は塞がっていた。それから、頸骨の折れている3人目の男の脚の治療に掛かった。祐子はジミーに節目の無い木の枝を2本折って来るように命じ、止血処理をしてから、それらの枝を添え木にして包帯で固定した。治療されている男達は怖れ

おののいている。やがて祐子は瞑目し、3人の傷が癒える所をイメージした。見る見る間に3人の男達の傷口は消えてしまった。マリーが言った。

「****」(ママ、こいつらは盗賊です。生かしておくだけでも十分すぎると思います。こんなに完全に治療したら、また盗賊を繰り返します)

「****」(そうかも知れないわね。だけど、ここにこのまま放置したら、食べ物も無い森の中で、この者達は獣に襲われるか、他の盗賊から逃れるために徘徊して、その結果、のたれ死んでしまうでしょう。こんな者達でも家族があるはずです。生きてゆけないから盗賊を働いているのかも知れません。この国の貧困が全ての原因です。生きる道を与えてあげれば、きっとこの国をよくするために働いてくれると信じています。皆さんも盗賊を撃退してくださってありがとう。ひと安心したから、ここらでお昼にしましょう。盗賊達もお腹がすいているでしょう。食べ物を分けてあげましょう)

ソニアが言った。

「****」(ママー、そんな！食料は8人の1ヶ月分しか用意してありません！盗賊にあげたら、私たちの分が無くなります)

「****」(ソニア、心配は要らないわ。足りなくなったら、私の分をあげるわ。この者達も、きっとお腹がすいていると思うのよ。かわいそうでしょう)

ソニアは返答できなかった。車を停めた少し先に小川が流れていた。全員で歩いて川の畔に行き、そこの草の上に腰を降ろして昼食を摂った。ソニアが全員にサンドイッチを配った。二枚の平たく引き延ばしたウガリの間に炒めたキャベツを挟んだサンドイッチだ。祐子と亜希子はウガリの味にはかなり慣れてきていた。

「****」(このウガリはキャッサバを挽き臼で磨り潰して作ったもので、コンゴではフフという名前の主食になっているんです)

ソニアが言った。まるで日本の餅のような感触がした。ウガリのおいを嗅いでか、大きなアブが集まって来た。それを振り払い、振り払いし

て昼食を食べた。小川の流れが冷風を送ってくるのが感じられる。亜希子が言った。

「*****」(お姉様、心から尊敬しています。わたくしにはとてもこんな寛大な事はできません。ひとつ間違えれば、わたくしたちの命だって危なかったんですもの)

「*****」(アキ、わたしも同感よ。私が罰として殺されても当然な悪事を働いて、みんなに攻められているときに、それでもママが私を救ってくださったのよ。私を受け入れてくれたのはママだけだった。心の底から感謝と感動の震えが沸き上がってきたわ。だから、ママのなさっていることがすばらしいことだということは私にも十分すぎるほど分かるの。でも私にはとてもママの真似はできない)

マリーが言った。みな頷いた。

8人が食事を済ますと、ソニアが祐子に3人分のウガリのサンドイッチと3本のペットボトルの水を渡した。祐子が木の蔓で縛り付けられている3人の前にそれぞれサンドイッチと水のペットボトルを置いた。3人は祐子の方を見ようとせずに、顔を背けている。祐子がリンガラ語で3人に言った。

「*****」(十分じゃないけど、食事を食べてね。フフのサンドイッチよ、珍しいでしょ。生きぬいてくださいね。この国はきっと良くなるわ)

3人は顔を上げなかった。祐子は、ジミーに言って、蔓の縛り紐を解かせ、3人を自由にした。もう、脚は動かせるはずだったが、3人はその場から動かなかった。

8人は再び車に乗り、元の道に戻った。脇道から戻っても、さほど道路のコンディションが良くなったわけではない。ジミーが言った。

「*****」(逃げた奴らはどこに行ったのだろう?)

ジミーは彼らが銃を持っていることが気がかりだった。しかし、彼らはどこに消えてしまったのか、影も形も見えなかった。亜希子がブッシュの方を指さして言った。

「*****」(あの奥の方に車を乗り捨てたわ、もしかすると盗賊達

はあの辺りに居るかも知れないわ)

メドリスナはアクセルをふかした。それから道路なのか獣道なのか判断できないほど草に覆われている悪路を30分ほど走ると、また広い道に出た。そこからは雑草で土が見えないほどの悪路ではなくなってきた。次第に民家の数が増えてくる。ここでも戦闘があったのか、壁面が傷ついて、崩れている家も少なくない。更に30分ほど走ると家が建て込んできた。カタナの町に入ったようだ。

クリグ達との待ち合わせ場所を探さなくてはならなかった。位置を確認するために一旦車を道路の脇に止めると、2台の車はいきなり十数人の若い男達と子供達に取り囲まれた。4、5人の子供達が車の前に立ちはだかった。車を動かせば子供をひき殺してしまう。青年達は窓から中を覗き込んだり、車の屋根を拳で叩いたりしている。ジミーとメドリスナはそんなことに頓着無く、地図を広げて待ち合わせ場所を確認した。亜希子が言った。

「*****」(この子達は一体何なんでしょう?)

祐子が応えるように言った。

「*****」(きっと、何かほしいのよ。お金とか、食べ物とか。でも、暫くは黙って様子を見ていた方がいいわね)

マリ一達の乗っている車も、エンジンはかけたままだが、じっと動かない。ジミーが言った。

「*****」(ママ、地図で見ると待ち合わせ場所はこの近辺の筈です。ベムは場所を分かっていて停めたのかも知れません)

その時、銃声が2発轟いた。車に張り付いていた子供と青年達がさっと散って姿が見えなくなった。1台の古いトヨタカローラが祐子達の車の横に停まった。カラシニコフを手にした4人の男達が車から出て来た。一人の男が運転席のドアガラスを拳で叩いた。外で何か言っている。メドリスナはマリ一達の乗っている車を指さした。男達は前の車に移動した。緑色のシャツと黒いパンツをはいたニグロの男がベムの乗っている運転席のドアガラスを叩いた。ベムがガラス窓を開けた。男がリンガラ語で言った。

「*****」(おまえ達はどこから来た?)

後部座席からマリーが応えた。

「*****」(我々はルワンダだから来た。森林に住む動物の調査をする予定だ)

「*****」(おまえ達はブチか?男どもはブチの顔をしている。パスポートを見せろ)

種族名を聞かれて、マリーは緊張した。他の3人も一瞬身構えた。マリーはパスポートを開いて見せながら言った。

「*****」(森林の調査に行く途中だ。私は大学の助教授だ)

「*****」(滞在許可を調べる。パスポートをよこせ。おまえだけでなく、全員の分だ)

マリーが躊躇しながらパスポートを渡そうと、ベムの肩越しに手を伸ばした。とその時、立て続けに10発ほどの激しい銃声が聞こえ、マリーからパスポートを受け取ろうとした男がその場に倒れた。後方の家の影からまた銃声がした。男達はマリー達の車を盾に反撃を始めた。ベムは隙を見てエンジンをふかし急発進した。メドリスナも続いた。男達は盾を失い、急いで自分たちの車の影に戻り銃声のする方向に向けて発砲した。祐子と亜希子は後ろを振り返り後方で起きている銃撃戦を見た。先ほどの男達は全員銃弾に倒れたようだった。ベムが交差点を右折した。メドリスナも続いた。右折すると直ぐの所に1台の深緑色のライトバンが停まっていた。2台の車は停車している車の前に出て停まった。中に5人の男達の姿が見えた。運転席の男はクリグだ。助手席にボモが乗っている。後部座席には子供が3人乗っている。ボモが車を降りて来てマリーの横のドアウインドウの外から顔を覗かせた。マリーが直ぐにガラス窓を降ろした。

「*****」(今、そこで銃撃戦があったでしょう。あれはφDLRの連中です。全員国軍の兵士に撃ち殺されたようです。彼らに何か盗られませんでしたか?)

「*****」(パスポートを盗られそうになりました。だけど、大丈夫でした)

「*****」(我々もあそこに行くつもりで、その交差点を右折しようとしたんです。その時銃撃戦が始まってしまったので、そのまま直進して、ここに車を停めて様子を窺っていました。皆さんがあそこから抜け出して来るのを待っていました)

「*****」(何時もこんなに危険なんですか?)

「*****」(いいえ、今日は特別です。皆さんが移動しているので、隠れていた武力集団が隙を狙って動いているんです。皆さんはかなり目立ちますからね……ここは危険ですから、安全な場所に移動しましょう。わたしの車に附いて来てください)

ボモは車に戻ると、直ぐに発進した。ルワンダからの2台の車もボモのライトバンの後を追った。祐子はマリーとボモの会話の内容が分かった。あの場所だけが危険なわけではなさそうだ。家々はアプローチの手入れなど全く為されてなく、生気を欠いている。時々見かける子供達には無邪気な陽気さを感じなかった。亜希子が言った。

「*****」(この国の人たちの心は一体どこに行ってしまったのかしら? どうしていつも傷つけ合ったり、殺し合ったりしているのかしら?)

「*****」(もっとこの国の内側に入っていかななくては分からないわ。みんな酷い仕打ちに怖れおののいて、生きる喜びを忘れてしまっているんじゃないかしら)

「*****」(わたくし、先ほど銃弾に倒れた人たちの意識にコンタクトしてみます)

亜希子は瞑目した。直ぐに幽界の中に4人の姿を見つけることができた。4人の意識は恐怖と憤りに猛り狂い、取り次ぐ島は無い。亜希子は4人の意識に向けてメッセージを送った。

「あなた方は今の銃撃戦で亡くなりました。これからは先ず冷静にならなくてははいけません。もう何も怖いものはありません。これまでの行為を反省し、心の平静を保つように努めなさい」

男達は亜希子の声に気づき、辺りを見回し、益々恐々とした。

「心が穏やかにならない限り、あなた方は安全な場所に行くことができ

ないのです。これからのあなたがたにとって、とても大切なことです。これだけは覚えていてください」

亜希子の声は男達の意識に響いたようだったが、亜希子はそれだけを伝えようと、自分の意識を車中に戻した。

15分ほど走るとボモは5、6軒の民家に囲まれた広い空き地に車を停めた。そこは周囲からの見通しが良く、その上、民家の間に入ると表通りからは死角になる絶好の避難場所のように思えた。車が空き地に入ると行くと、外に居た4人の女性が急いで家々の中に消えた。ボモが車から降りた。続いてクリグも降りて、後部席のドアを開け、3人の子供達を降ろした。よく見るとそれは子供ではなかった。身体の小さな大人の男性だった。男達は上半身裸で、足は裸足、腰に葉っぱを重ねて作った腰蓑を付けている。祐子と亜希子はその姿に驚いた。全員車から降りた。4人の兵士が銃を手にして、祐子達を囲むように四方に分かれ、防御態勢をとった。

「*****」(ジュベステル教授、ママユウコこれから長い間整備がされていない林道を走り、そのあと調査の為に森に入ることとなります。車の入り込めるところまではいいのですが、それから先は彼らピグミーの力を借りなくては、どうにもなりません。ですから、ピグミーを雇いました)

3人のピグミーは俯いている。

「*****」(ムグムグとソノンとバンメです)

ボモが自分たちの名前を口にしたので、3人は顔を上げた。3人はまるで他の者達が存在していないかのように、直接祐子の方に顔を向けた。祐子は3人の目に意識が吸い込まれそうな感覚を覚えた。3人の目には全く濁りが無かった。これまで会ったコンゴの人たちの目ではない。言葉は必要なかった。3人の目の中にコンゴの美しい森が見えた。3人とも祐子の目をじっと見詰め、口元にほほえみを浮かべた。

「*****」(おやおや、このピグミー達は祐子さんと亜希子さんに興味があるみたいですね。彼らは滅多に初対面の人に微笑みかけることはないんですよ)

クリグがマリーに向かって言った。マリーは納得したように頷いた。亜希子の目には3人の周囲に何か別の存在が見えた。それが何かは分からなかったが、少なくとも不快感を催す存在ではなかった。祐子が言った。

「*****」(この人達は、私たちと違う世界を見ているようですよ。目の中に自然が映っています)

クリグとボモは祐子の言った言葉の意味が分からなかったので、只簡単に会釈を返しただけだった。ボモが周囲に注意を向けながら言った。

「*****」(ここも長い間居ては危険ですから、直ぐに出発しましょう)

その時木陰から一人の女性が駆け寄って来た。兵士達が一斉に銃を向けた。女性は一向に気にしない風で、直接ボモとクリグの近くに行った。

「*****」(薬ください。病人が居ます)

ボモは首を横に振った。クリグも知らぬ損禪を決め込んでいる。マリーがボモに向かって言った。

「*****」(どうしたの?)

「*****」(いつもそうなんです。我々の姿を見ると直ぐに薬を欲しがります)

祐子が言った。

「*****」(何の薬がほしいのかしら?)

「*****」(この人達は何の薬でもいいんです。どんな病気でも同じ薬でいいんです)

ボモがそう言うと、祐子は直接女性に向かって言った。

「*****」(どうしたの? 誰か病気なの?)

「*****」(家族みんな病気です。助けて)

ボモが女性を止めて言った。

「*****」(俺たちは急いでいるんだ。あっちへ行け)

「*****」(あなたの家は何処? 私が診てあげましょう)

祐子が女性にそう言うと、女性は時々振り返りながら家の方に向かって歩き出した。

「*****」(亜紀、救急箱を持って来てね)

亜希子は顔を、直ぐに車に戻った。メドリスナが亜希子に附いて行った。女性に導かれて家の中に入ると、むっとする蒸れた雑巾のような異臭が漂っていた。この家は二部屋からなる小さな家だった。奥の暗い部屋に入ると激しい臭気が鼻を襲った。そこまで附いて来ていたマリーは顔を背け、鼻を摘んだ。祐子が部屋の中に入ると、まるで窓から日が差してきたように部屋の中がパッと明るくなった。マリーと後から入って来た亜希子が目を屢叩いた。老婆と10歳くらいの少女が部屋の角に横たわっていた。粗末な布が身体に掛けられている。老婆は衰弱が激しく、苦しそうな呼吸をしている。目がうつろで、意識がはっきりしていないようだ。祐子達が入って来たのも分からない。あごの下に直径10センチはある大きな瘤が見えた。少女はやせ細っていて、顔にイチゴのような湿疹が出来ている。祐子は二人が栄養失調の状態にあることを見て取った。

亜希子がマリーの背後から身体をすり出して祐子の近くに来て言った。

「お姉様、フランベチアではないでしょうか？」

「私もそう思うわ。亜紀、ペニシリン持ってきているわね」

「はい、お姉様、注射液で持ってきています」

亜希子が注射器にペニシリン液を充填してアルコールを含ませた消毒用ガーゼと一緒に祐子に渡した。祐子は先ず老婆の左腕を持ち上げ、腕を拭い、静脈注射をした。そして、娘に対しては、老婆の半分の量を注射した。祐子は部屋の外に立って中をのぞき見ているソニアに向かって言った。

「*****」(ソニア、ウガリを持って来て。二人の三日分をお願いね)

ソニアは不安そうな顔をしたが、黙って外に出て行った。祐子は老婆の衣服がかなり汚れていることに気付いた。不衛生が原因で発病し、孫娘に感染したのであろう。祐子は近くで祈るように見詰めている母親に、老婆と娘の洗った衣類を持って来させ、水桶とタオルを用意するように言った。タオルの意味が分からないようだったが、亜希子が手振りでも伝えたのでやっと理解でき、水桶と一緒に二人の衣類と一枚の白い布地を

持って来た。祐子は二人を裸にし、全身を水で拭い、洗いざらしの服に着替えさせた。そうしておいて、母親の大きな瘤の上に右手を宛て、瞑目した。大きな瘤がみるみる小さくなって行き、遂に消えてしまった。老婆の意識が戻ってきたようだった。

「ナトンディ ヨ ボトンディ(natondi yo botondi)」(ありがとう)
老婆は祐子の左手を取って言った。祐子は老婆の手をそっと下ろし、右手で額の熱を看てから頷いた。

「*****」(もう、大丈夫よ、きっとよくなるわ)
祐子は娘の脇に寄り、綺麗になった娘の服の上から檀中に手をかざし、瞑目した。娘の目が大きく開き、唇にほほえみを浮かべた。イチゴのように赤く腫れ上がった顔の湿疹も消えていった。

「*****」(もう、大丈夫よ。あとは、フフを食べて元気を出してね)

祐子はソニアが渡してよこしたウガリの包みと錠剤を母親に渡した。母親はそれらを受け取ると、その場に平伏し、涙を流した。

何度も目にした祐子の奇跡だったが、マリーをはじめその場に居合わせた者達は誰一人として、言葉を口にすることができなかった。只打ち震えるような畏敬の念に包まれていた。

母親に見送られ、一行は北方に向けて出発した。大通りを少し北上すると直ぐに道は草で覆われた悪路になり、行く手が二つに分かれた。ボモの運転する車は右側の道路に入った。2台の車も後に附いて進んだ。次第にまたブッシュのような道無き道に入り込んだ。車は更に北上を続けた。一時間ほど走ると家々がちらほら現れてきて、湖岸に抜ける何本かの脇道を通り越した。

「*****」(この辺りの湖岸近くには、反乱軍が潜んでいるらしいです。できるだけ早くここを抜けましょう)

そうは言っても、ボモの運転次第だ。ボモの車がスピードを上げたのが分かる。ベムもメドリスナも先頭の車に追従した。少しして右手に湖が現れた。陽は大分傾いてきていて、湖面に反射した光でまぶしい。メドリスナとベムは慎重に車を走らせた。美しい湖岸路線を蛇行しながら走

る。家々の数が増えてきた。小さな村のようだ。その村落も通過した。外には人影が全く無かった。ちょっと気を緩めたら、転落してしまいそうな、路肩の整備されていない崖の上の道を走らなければならないこともしばしばあった。車がほとんど通っていないことが幸いだった。祐子と亜希子は夕日を映すキヴ湖の絶景を堪能していた。日が暮れかかってきた。一行は民家がちらほら建っている町に着いた。祐子が地図で確認するとどうやらカレへという町のようだ。ボモが本道から外れて民家の間の道に入って行き、空き地に車を停めた。既に6時を回っている。クリグが車から降りて来て、マリーの元に行った。マリーは窓ガラスを下げ、クリグと話をしている。祐子は二人の会話に意識を集中し天耳を開いた。

「*****」(夜になると危険ですから、この辺りの民家に泊めてもらいましょう。私が交渉して来ます)

「*****」(こんなに沢山の人間を泊めてくれる所なんてあるの?)

「*****」(勿論、普通の交渉では断られるでしょう。いざとなったら、金を使うんです)

「*****」(危険と背中合わせでも、受け入れてもらえるのかしら?)

「*****」(この辺りの人たちは、大抵、貧困に苦しみ、戦闘や強奪の恐怖に怯えて生きています。我々が安全な人間で、その上、兵士が守ってくると分かれば、泊めてくれるでしょう。問題は我々を泊めたことを反乱軍や政府軍のチンピラ兵士が知ると、我々が去った後で襲撃される恐れがあることです。その危険性さえ無ければ、彼らは心が優しく、誰でも受け入れる人たちですから、直ぐに我々の申し出を受け入れてくれると思います)

「*****」(分かったわ。ママユウコと相談して来るから、少し待っていて)

マリーはトランシーバーを使おうとしなかった。車から降りて、祐子達の車の所にやって来た。祐子は窓を開け、マリーに向かって言った。

「*****」(マリー、今の話でいいわ。できるだけ目立たないように移動しましょう)

マリーは、祐子が自分たちの会話の内容を知っていることを自然に受け入れてしまっていた。車に戻るとマリーはボモにOKを出した。

「*****」(目立たないようにとママが言っています)

ボモは頷くと直ぐに車に戻り、再び車をスタートさせた。エンジンを噴かさずにゆっくり動き出した。後続の2台もそれに習った。やがて、ボモは木立が立ち並び周囲から孤立したような15、6軒の家の密集した区域に入り、車を停めた。後続車も木陰を選んで停車した。ボモが車から降り、一軒の土壁の家に入って行った。暫くして家の入り口から姿を現すとボモは指でVサインを出し頷いた。全員が車から降りた。ボモは戻って来ると、マリーに向かって言った。

「*****」(ここの人たちはみな、我々を受け入れてくれるようです。金銭などの要求は一切ありませんでした。でも私は明日の朝発つ前に一人一泊 20000 C F R (コンゴフラン) を払って行こうと思います。彼らは自分たちの食べるものも十分には無いはずなのに我々を受け入れてくれるのです。一軒の家に2人ずつ泊まります。だけど、ピグミーは外で休むはずです)

マリーが頷いた。祐子が言った。

「*****」(現金以外に何かプレゼントも置いて行きましょう)

ボモは応えた。

「*****」(では、一軒につきタバコを三箱、ビール1本ずつ贈ってはいかがでしょう。彼らは自分たちが生きるだけでなく、リスクをも受け入れてくれたのですから)

家から男性が出てきて、隣の家に向かった。少しすると住民の男達が集まってきた。男の中の一人が言った。

「*****」(我々の隣組は六軒ある。あなた方の内の外に寝るつもりの人も、家の中に寝た方がいいです。この辺りは夜は危険です。それに悪霊が徘徊しています)

マリーは礼を言った。男達は先ず共同トイレなどの周囲の施設について簡単に説明した。それから先ず女性達を受け入れる家に案内すると言った。兵士達が荷物を車から降ろし、六軒の家に分散して運び込んだ。住

民達が兵士を手伝った。ソニアがフフのサンドイッチを包みから取り出し、全員に配った。亜希子は車のことが心配だったが、兵士が交代で徹夜の警備をすると聞いて、ひとまず安心した。祐子は亜希子とペアで一番奥の家に宿泊することになった。男性一多分家の主だろうが一に導かれて家の中に入ると、家の主婦と思われる40歳ほどの女性がにこにこしながらふたりを迎えてくれた。

「*****」（こんばんは、私はクリメリです。どうぞ中に入ってください）

祐子と亜希子も習いたてのリンガラ語で挨拶した。

「*****」（こんばんは、私は由宇、こちらは亜紀です。無理を言って申し訳ありません。お世話になります）

部屋の中は非常に暗かった。どうやら電気は来ていないらしい。目が暗さに慣れてくると壁の壁龕（へきがん）に立てられた蝋燭の火に気が付いた。蝋燭の炎は壁から部屋の中全体を薄明るく照らしていた。改めて周囲を見回してみると、部屋の中には全く何も無かった。ただ土の床には草の葉で編み上げた敷物が敷かれているだけだった。奥の部屋には子供達が居るようで、小さな話し声が聞こえてくる。少しして、クリメリが板の上に直径20センチほどのフフ2枚と水の入ったカップ二つを載せて持って来た。子供達が隣の部屋から顔を覗かせた。顔が痩せている。クリメリが子供達に向かって何か言った。覗かないように注意したようだ。よく見ると蝋燭の光を受けたクリメリの頬も落ちていて、目ばかりがぎよろぎよろと光って見えた。祐子が言った。

「*****」（これ、あなた方の夕食なんでしょう？）

「*****」（いいえ、フフは沢山ありますから大丈夫です。遠慮せずに召し上がってください）

「*****」（本当に沢山あるのですか？本当のことを仰ってください）

クリメリは黙り込んでしまった。奥の部屋から子供の声が出た。

「*****」（僕、今日はフフ食べたい。お腹すいたよ）

「*****」（僕もおなかすいたー）

祐子はやはりそうかと思った。母親が隣の部屋に入って行った。子供の泣き声が聞こえた。どうやら叱責されたようだ。母親が戻って来ると、祐子が言った。

「*****」(奥さん、ありがとうございます。では遠慮無く奥さんのご親切なおもてなしを受けさせていただきます。ところで、奥さん、私たちはウガリのサンドイッチを持って来ています。サンドイッチなんて珍しいでしょう？是非味わってみてください。少ないけど、私とこの妹の分を差し上げます。ルワンダ流に作ったウガリなので、美味しいかどうか分かりませんが。このウガリもフフのように練って作ってありますから)

「*****」(それは、皆さんの朝のお食事ではないですか?)

「*****」(ダイエットですよ・・・ご存じ？女は太り過ぎちゃまずいでしょ。だから朝食はほんの少しでいいのです。この、夕飯を半分取っておけばそれで十分です。ねえ亜紀)

亜希子は微笑みながら頷いた。クリメリは初め躊躇していたが、祐子と亜希子の差し出した包みを大切に受け取ると、思わず微笑んだ。

「*****」(お客さんにこんなことして頂いて・・・)

ここには女性のダイエットなど存在しない。祐子は自分が冗談のつもりで言った言葉を恥ずかしく思った。母親がフフのサンドイッチを持って奥の部屋に入っていくと、子供達の歓声が聞こえた。父親が小さな低い声で何かを言っている。子供達の返事をする声が聞こえる。暫くして、家族の笑い声が聞こえてきた。

「よかった。彼らの夕食を完全に奪ってしまわなくて済んだ」

と祐子は思った。

「どうかこの人達に幸せな生活が訪れますように」

亜希子は心の中で創造主に祈りを捧げた。クリメリの出してくれたフフを半分ほど嚙って夕食を済ますと、少しして、クリメリと亭主が部屋に入って来た。祐子と亜希子は亭主に礼を言った。亭主はマンドリグと名乗った。薄暗い蠟燭の光に浮かぶマンドリグの顔は、痩せてはいるが、眼光が鋭く、ふたりの女性には理知的に見えた。マンドリグは祐子に質

問した。

「****」(どうして、こんな紛争の多い国に来たのですか？森林の生物を調べるのなら、もっと安全な地域に行った方が良かったのではないですか？)

祐子が応えた。

「****」(私たちは、ルワンダから来ました。あなたの国に、いろいろな問題を持ち込んだ国です。ルワンダに住んでいるものが言うのもおこがましいのですが、今、この国、いいえアフリカ全体の自然が次々に破壊され、昔からこの地に住んでいる人たち、あらゆる動物、そしてそれを支えてきた植物の生態系がことごとく破壊されつつあります。私たちはこの国の森林の生態系の実状とこれからの進むべき道を見いだすべく、コンゴの密林に生息する動・植物の生態の調査をしたいと思ってやって来ました。それから、もう一つ重要な目的があります。それは、この国が幸せな国になるように、微力ながらお力添えをしたいということです。ルワンダはあのブチとクツの2部族間の悲劇的な衝突から見事に立ち直りました。一旦政治が軌道に乗れば、アフリカの人たちは誠実ですから、直ぐにめざましい発展を遂げることができると思うのです。不幸にも過去にアフリカ大陸は西洋の国々によって植民地化され、心が優しく、物質的な欲望の少なかった人々を、西洋人達は自分たちの思うとおりに働かせることのできる存在と見なし、奴隷とし、大自然の恵みの中で生きてきたあなたがたの祖先の命と生きる糧さえ奪って来ました。そして、植民地政策に行き詰まると今度は、独裁政権に国々を任せ、自分たちは安全を図るために、撤退という体の良い平和主義を持ち出したのです。人々の住む仕組みをめっちゃめっちゃに破壊し、線引きで国と国との間に争いを引き起こす火種を残しての撤退を行ったのです。そんなに酷い状態の中でも、苦悶しつつ立ち直ってきた国がいくつかあります。一つは南アフリカ、そして私たちの住むルワンダなどです。いずれも困難を乗り越えて、発展の軌道に乗って来ました。私はコンゴにもきっと立ち直れる道がある筈だと思うのです。私たちは、そのほんのきっかけを作るお役に立てる道を求め、それを探すためにやって来ました)

祐子は自分が、まだうろ覚えのリングラ語を流暢に話している事に驚きを感じた。マンドリグは真剣に聞いていたが、少し声のトーンを落として話し始めた。

「*****」（この国は今呪われています。本来我々を守ってくれるはずの政府軍の一部の狂人が我々を襲って家財道具を没収したり、女性達を陵辱したり、殺したりするのです。私たちは何を信頼いいのかも分からない状態に置かれているのです。あまりに沢山の反乱軍や外国籍軍が居て、我々を襲ったり、お互いに殺し合ったりしています。空恐ろしい国と化してしまいました。あなた方のような若い女性は自分の身を守ることすらできなくなっています。この国の方向を改めさせるためには、強靱なリーダーシップと国民を思う不動の精神が必要です。失礼な言い方かも知れませんが、あなた方女性に一体何ができるのでしょうか？せめてご無事に森林の調査を終えてルワンダに帰国されることを祈っています)

祐子は反論しようとは思わなかった。自分たちを拒否せずに受け入れてくれただけで十分だった。マンドリグは微笑むと、ゆっくり休むように言い残し、部屋を出て行った。クリメリは亭主の話聞いていたが、一言も口を挟まなかった。マンドリグが出て行くと、直ぐにベッドの準備をしてくれた。それは床の上に厚手の布きれを敷き、その上に簡単なカバーを被せただけの寝床だった。枕も小さく、固そうな筒状のものだが、触ってみると意外に柔らかかった。部屋の中に何匹かの蚊の羽音が聞こえる。亜希子は身構えた。ベッドメイクを終えるとクリメリは直ぐに蚊帳を持って来てくれた。亜希子はうれしそうだった。祐子も何も無い中での暖かいもてなしに頭が下がった。突然現れたよそ者に対して、自分たちの窮状をも顧みず、優しく対応してくれるコンゴの住人の親切心にふつつつと感謝の念が湧いてきた。賢の居る日本にもまだこういう人たちが居るはずだ。クリメリの姿が、あの東北大震災と福島原発事故後の日本人の心の変化に重なった。あのとき、日本人の心の中に何かが起きた。皆忘れていた何かを思い出した。人は誰でも心の奥に慈悲深い本質を持っているのだと思った。

夜半過ぎに亜希子が祐子の耳元で囁いた。

「お姉様、わたくし・・・」

「トイレね。私も行きたかったところよ。さっきここのご主人が、共同のトイレが外にあるって説明してくれたでしょう。一緒に行きましょう」二人は蚊帳から抜け出した。祐子は壁龕にある蠟燭立てを手にとると忍び足で外に出た。亜希子も祐子にくっつくようにして外に出た。外は真っ暗だ。月明かりも無く、星も出ていない。時々吹き来る微風に蠟燭の炎が揺れる。直ぐにジミーが近付いて来た。暗闇の中で照明も無しに歩哨に立っていたのだった。ジミーは黙ってふたりに附いて来た。トイレは土壁で出来た簡素な作りだった。先ず祐子が中を点検してから、蠟燭を手元に置いて用を足した。亜希子は真っ暗闇の中にジミーとふたりで立っていた。祐子が出て来ると直ぐに亜希子に交代した。遠くで低く響くような獣の吠え声がする。トイレの中から亜希子の囁くような声がする。

「お姉様、近くにいらしてくださいね」

「ここに居るわよ。安心なさい」

祐子は周囲に異様な雰囲気を感じた。ジミーの他に誰かが居る。少し離れたところにある木の裏側に2、3人の人の気配を感じた。真っ暗闇である。また、オオカミのような獣の遠吠えが聞こえた。亜希子が慌ててトイレから出て来た。祐子が囁いた。

「済んだの？」

「はい」

亜希子の声は少し大きかった。木の背後に何かが動いた。やはり人のようだ。亜希子が今度は囁くように言った。

「お姉様、あの木の陰から、白い煙のようなものが立ち昇って、ずっと空を通って、湖の方に向かって行くのが見えます」

「私には見えないわ。亜紀、外は危険だから、直ぐ部屋に戻ろう」

ふたりはジミーに礼を言うと、部屋の中に戻った。抜き足で蠟燭立てを元に戻し、蚊帳の中に潜り込むと、少しして、隣の部屋から「ウォーウォー」といううめき声が聞こえてきた。その声は非常に不気味に響いた。

亜希子が祐子の耳元で囁いた。

「お姉様、あのうめき声はさっきの白い煙と何か関係があるのかしら」

「呪詛かしら。それとも神託かしらね。アフリカには多いのよ。でも、とにかく気にしないで寝ましょう」

翌朝、祐子と亜希子はキガリから持ち込んだ濡れティッシュで顔と手を拭った。幸い蚊には刺されなかったようだ。クリメリがカップを二つ持って姿を現した。

「*****」(おはようございます。眠れましたか?)

「*****」(ありがとうございます。よく眠れました)

「*****」(身体に良い飲み物を召し上がれ、キンケリバ茶ですよ。

外国の友達が作り方を教えてくれました。これは蚊に刺されたときの解毒にも効果がありますよ)

ふたりは礼を言ってカップを受け取った。一口飲むと、ほのかな甘みが口の中に広がった。亜希子は以前よく飲まされたドクダミ茶のような味だと思った。茶を飲みながら昨日のフフの残りを食べた。胃は十分には満たされなかったが、ふたりはそれで満足だった。クリメリが蚊帳と床を片づけてくれた。ふたりは用足しに外に出た。亜希子がトイレに入っている間、祐子は昨日人影を感じた場所に行ってみた。大きなマンゴーの木の前元で割られた木製の面が落ちていた。やはり呪詛なのだろうと祐子は思った。二つの部分を手に取って重ね合わせてみると、それは見覚えのある顔を模ったもののように思えたが祐子はそれが誰なのか思い出せなかった。亜希子がトイレから出たようなので、続いて祐子が入った。昨夜は気付かなかったが、そこは決して衛生的とは言えない場所だった。長い間清掃されていないようだった。祐子はこういう環境も整備して行かなくてはと思った。

暫くして、全員の出発の準備が整った。家々から主婦と子供達が外に出て来た。ボモが全員を代表し、住民に向かって挨拶した。

「*****」(みなさん、いろいろありがとうございました。本当に助かりました。これは皆様に対しての我々の感謝の印です。そして、こちらは調査隊から皆様へのプレゼントです。それぞれの家の分あります)

そう言いながらボモは6通の紙袋に入れた金とマリーの差し出したタバコの包み、ビールを入れた箱を住民達に渡した。男達は期待していなかった金とプレゼントを渡されびっくりしていたが、女達と子供達は興味深そうに見詰めている。男達は直ぐに感謝の気持ちを露わにした。しかし決して卑下するような態度は見せなかった。

兵士達が荷物を車に積み込むと、ボブは直ぐに車を発進させた。住人達は車が見えなくなるまで見送ってしてくれた。

それから暫くは、また状態の悪い道が続いた。景観は素晴らしい。美しい景観と酷い道、人間達の争い、そんな相容れない要素を意識しながら3台の車は蛇行した湖岸の道をゆっくり北上した。この日の運転はジミーとアルフォンだ。ジミーが視線を動かさずに言った。

「****」(ママ、こんな混沌とした国で、凶暴とも思える国軍や反乱軍、他国籍軍、さらには盗賊などを相手にしながら、どういう風にこの国を変えて行こうとされているのですか？私には、ママが何をなさろうとしているのか皆目見当も付きません)

ジミーの言葉には非難めいた響きは無かったが、それは誰しもが思っていることだった。亜希子とメドリスナも祐子の応えを期待して、聞き耳を立てた。祐子は穏やかに、しかししっかりとした声で応えた。

「****」(私にはこの世で一番尊敬している人が居るのよ。その方が、1点の迷いも無く、唯ひたすらに思い続け、自分が必ず成し遂げようとしている目的が達成されつつあるということを確認し続ければ、必ずその通りになると教えてくれたのよ。私たちの住んでいるこの世界はそのように出来ているって。私はその方の教えに従って生きている。コンゴのことも、ルワンダの90倍もある国土だとか、70%がジャングルだとか、インフラの整備が極端に遅れているだとか、独裁者がこの国を私物化しているだとか、多くの非合法的な団体が押し掛けて来て、お互いの権益の為に戦っているだとか、そういうことは私が今行っていることに対して何ら影響を与えないという絶対的な確信を持っているのよ。いつも私の心の中にあるのは、この国を必ず平和な国にしてみせるという信念よ。いつかチャンスは巡ってくるわ。揺るぎない心で一瞬一

瞬を生き抜いていれば、現在がどれほど、その理想からかけ離れていても必ず大変革への入り口が見えてくると思っているの。その入り口が見えたとき、決してひるんではいけないのよ。たとえこの命が失われても、やろうとしていたことを貫き通すのよ。そうすると、不思議なことに私を取り巻くあらゆる環境が私を支えるように働いてくるのよ。私は、このことを何度も経験したのよ。ジミー、大変かも知れないけど、私たちを守ってね。私はあらゆる可能性に向かって只ひたすら突き進むだけなのよ)

ジミーは頷いて応えた。

「*****」(分かりましたママ、これまでも、そして、これからもずっとママを守ってゆきます)

ジミーはそれ以上の質問をすることはなかった。

昼近くになって一行は湖のよく見える場所に一旦車を止め、車中で昼食を摂った。昼食後車は再び北上を続けた。全員が、次第に危険な領域に近付いて来ていることを意識していた。わざわざ遠回りをしてここまで来る理由については、誰も回答を持っていなかった。全ては祐子の意志に従っての行動だった。左側に旋回するようにキヴ湖から少し離れて行くと、どうやらキヴ湖とは違う湖の畔に出た。全体が一望の下に見えるが、湖と呼べるほど大きくはない。湖から分離した池なのだろう。その西側の畔を走る道路をゆっくり北上した。亜希子が言った。

「*****」(お姉様、わたくし、頭が痛くなってきました。とてもいやな波動を身体に受けているのを感じます。この辺りには暗い想念が渦巻いているようです。注意した方がよろしいと思います)

「*****」(亜紀、私も感じるわよ。注意した方が良いわね。メドリスナ、警戒を嚴重にしてね)

「*****」(はい、分かりました)

メドリスナとジミーは緊張した。祐子はトランシーバーを取り出し、マリーとクリグに連絡した。マリーもクリグも異様な雰囲気を感じていた。マリーはたった今アルフォンとベムに注意するように伝えたばかりだと言った。池から離れると直ぐに先方に銃を手にした10人ほどの男

達の姿が見えた。クリグから金目のものが男達の目に入らないように注意するようという連絡が入った。クリグの車が停止させられた。2人の男が銃口を運転席に向けている。クリグがウインドウを開けた。一人の男がA4ほどの紙を見ながらクリグに何か話している。祐子は天耳を開いた。

「*****」(我々は国軍だ、おまえ達は何者で、どこに何をしに行く？目的は何だ？)

「*****」(私は自然科学研究所の所長クリグ・マハナムでこいつは中央銀行の部長ボモ・バサンガニだ。フランス人の大学教授の森林の生態系の調査を支援するため同行している。この直ぐ後ろが大学教授のマリー・ジュベステルの車、3台目が助手のユウコ・ツグンショウ、アキ・サキノの車だ。運転している者達はみな、トラックと森のガイド達だ)

「*****」(教授達はどこから来た？)

「*****」(ブカヴから来た)

「*****」(おまえ達はここに待機している。後ろの2台の車を調べる)

そう言うと、二人の男達はマリーの乗っている車に近付いた。ベムがウインドウを下げた。男達はベムの横に来て言った。

「*****」(おまえが教授か？)

マリーが後部座席から言った。

「*****」(私が生物学教授のマリー・ジュベステルだ)

「*****」(なんだ、女じゃないか。おまえが森に入ると云うのか？)

マリーがそうだとすると、男達はマリーの横に来て窓を開けるように言った。マリーが窓を開けると、男は銃口をマリーに向けてパスポートを見せろと言った。マリーは仕方なくパスポートを出した。男はマリーのパスポートをチェックするとマリーを睨み付けるようにして言った)

「*****」(おまえ達はルワンダから来たのか？)

マリーがそうだというと、男は更に突っ込んで聞いてきた。

「*****」(ルワンダで何をしていた？)

「*****」(調査の準備をしていた)

「*****」(このパスポートはフランスが発行しているではないか。ルワンダの長期滞在ビザになっているが、ルワンダのどこに住んでいる?)

「*****」(キガリだ)

「*****」(キガリだと?まさかダイヤモンドを探しに来たんじゃないだろうな?)

「*****」(ただの生態系の調査だ)

マリーは譲らなかった。

「*****」(荷物を沢山積んでいるようだが、何を積んでいる)

「*****」(調査に必要な機材と、調査の間必要になる食料などだ)

「*****」(見せてもらおうか?)

マリーは了解して、車から降りトラックの荷台の幌を外した

沢山の袋が積んである。外側からはガソリンやプレゼント用に準備したものに気付かれないように、森に入るのに必要にものを上側に置いて目立つように工夫して積んである。その脇の目に付きやすいところにビール一箱と、調理していないキャッサバの袋を置いてある。男はビールの方をちらちら見ながら言った。

「*****」(おまえはビールも飲むのか?ビールは男の飲み物だ)

マリーはトラックー達の疲れを取るために用意してきたと言った。その時遠方で銃声が聞こえ、それに応戦するかのようにまた銃声が轟いた。男は銃声のする方を見て言った。

「*****」(俺たちも命がけでこの国を守っている。今ゴマとサクの間回りりで戦闘が起きている。このまま直進はできない)

マリーは丁重に出た。

「*****」(防衛ご苦労様です。荷台にあるビールを皆さんで召し上がってください。トラックーには我慢してもらいます。我々は北に向かわずに森に入って行きます。この辺りの森が調査対象ですから)男の顔が緩んだのが分かった。

「*****」(よし、パスポートは無くすなよ。この先に左に入る道

がある。敵はそこまでは来ていない。気を付けて行け)

男はパスポートをマリーに返してよこした。マリーは急いでパスポートをポケットにしまい込むと、荷台の幌を元に戻し、車に乗った。また銃声が聞こえた。今度はもっと近くを感じる。男達はビールの箱を抱えると道路の端に5、6本立ち並んでいる大木に向かって小走りで去った。他の男達も一斉に大木に向かって去って行った。クリグが車をそっと発進させた。アルフォンとジミーもゆっくり発進させ、その場を通り抜けた。兵士達は依然として緊張を解かない。祐子と亜希子は自分たちの車まで調査の手が及ばなかったことに、胸を撫で下ろした。確かに3百メートルほど走ると左に折れる道があり、ボモがそこを左折した。2台の後続車も離れずに後に続いた。また銃声が聞こえた。ボモからトランシーバーで連絡が入った。

「*****」(ジュベステル教授とママユウコに同時に送信しています。3者通話モードに切り替えてください。ラジオのニュースで知りました。ゴマで政府軍とルワンダ・ウガンダ・ブルンジの3国連合軍との間で戦闘が始まったようです。先ほどの国軍の兵士達はまだ、状況を把握していなかったようです。助かりました。しかし、これからは極めて危険な状態になります。これは申し上げにくいんですが、今回の調査は中止にされて、戻られては如何でしょう？それか、別の地域に移動して、調査を行った方が良いと思いますが・・・・)

祐子が言った。

「*****」(この調査はこのまま続けます。どうか私たちに同行して、案内して頂きたいと思います)

「*****」(そうですね。それなら、これ以上同行しても我々にはあなた方の身の安全の確保を保証できませんから、我々はここで同行を辞退したいと考えます。避難民が居住していると思われる森林地帯に通じる村までの道をお教えします。この少し先で3人のピグミーをガイド役にさせて頂いて、そちらの車に移ってもらい、我々ふたりはオフィスに戻ります)

祐子はここでボモとクリグに逃げ出されては、この国を救済するどころ

か、目的地に辿り着くことすらできないと思った。マリーも当然同じことを考えているようだった。マリーがボモに抗議したが、ボモは命を掛けるだけの金はもらっていないと言った。マリーは契約したときの条件を引き合いに出して抗議した。

「****」(こういう事態が想定されるからこそ、あなた方をお願いしたではありませんか。我々は女性の調査隊です。こういう状況下で、女性が屋外を移動することがどれほど危険かということはあなた方が一番よく知っているはずです。あなた方が居なくなったら、この土地の事情を把握している人間が居なくなってしまう。我々は腹を空かせたライオンの前に放り出された子羊達のようなものです。少なくとも避難民の居住区にまでは同行して頂きます)

ボモは引かなかった。祐子はふたりの協議に口を挟まなかった。恐怖感を抱いて、怖じ気づいているボモの及び腰を攻めることはできないと思った。直感的に「無理に随行させるとボモ達が危険な目に遭う」と思った。話し合いは暫く続いたが、とりあえず、クリグとボモは森への進入口になる村までは同行することになった。左折すると道は直ぐに獣道のような酷いコンディションになった。あちこちに大きな穴がある。道の両サイドには木々が生い茂り、これまでとは異なった暗い雰囲気になってきた。突然前方から銃声が聞こえた。クリグ達の車がハンドルを取られ路上の穴にはまって動けなくなった。突如木陰から5、6人の銃を手にした男達が現れ、クリグ達の車に銃口を向けて包囲した。どうやら国軍ではなさそうだ。アルフォンとジミーも直ぐに車を停めた。兵士達は直ぐに小銃を手にした。男達の一人がクリグに何か言った。クリグはドアを開けない。男がいきなりクリグに向けて銃を発砲した。ガラスが飛び散り、クリグが前のめりにハンドルの上に倒れかかった。クラクションが鳴り続けている。ベムとアルフォンがいきなりドアを開け路上に身を投げ出して、泥の上を転げながら男達に向かって発砲した。クリグに向けて発砲した男が倒れた。他の男達はベムとアルフォンに向けて反撃したが、二人の素早い動きに的を絞れないようだった。もう一人の男が倒れた。男達は倒れているふたりの男を放り出して、森の中に姿を消し

た。ベムは車の左側に倒れている男が身体を横にして銃を取り、反撃しようとしたところを、手に向けて発砲した。男は手を撃ち抜かれ、もたえ苦しんだ。ベムは直ぐに銃を取り上げた。アルフォンが地を這うようにして銃を構え、男達を追って行った。ジミーとメドリスナは直ぐに飛び出せる体制でいたが、祐子達の近くを離れることはしなかった。ジミーがメドリスナに言った。

「*****」(ママ達は俺が守る。おまえはクリグの所に行け)
メドリスナは銃を手にして車から飛び出すと、身体を屈めて小走りでクリグの車の所に行った。クリグを撃った男は脚と胸に銃弾を受け、仰向けに倒れてもがいている。銃は横に放り出していた。メドリスナは直ぐに男の銃を取り上げた。運転席のドアウインドウのガラスが粉みじんになっていて、クリグがハンドルに俯せになって倒れ込んでいる。クリグは頭と顔から血を流していたが、どうやら割れたガラスによる怪我のようで、直接の被弾はしていないようだった。ボモはダッシュボードの下に頭を突っ込み蹲っている。3人のピグミー達も頭を抱え込んで蹲っていた。

「*****」(おい、しっかりしろ)
メドリスナが片言のリングアラ語で言った。ボモが頭を上げて言った。

「*****」(や、奴ら、行ってしまったのか?)
メドリスナは首を横に振った。

「*****」(まだ、分からない)
祐子はジミーの制止するのを振り切って、ドアを開け、クリグの所に小走りで向かった。亜希子も降りようとしたが、ジミーが許さなかった。ジミーが車から半身降りだして、辺りを警戒しながら叫んだ。

「*****」(ママー、危険です。戻ってください)
祐子はかまわずにクリグの元に駆け付けた。マリーも降りて来た。

「*****」(クリグ、クリグ、しっかりして)
祐子はメドリスナの横から上半身を車の中に突っ込んで、静かにクリグの身体を起こした。額と頬が大きく切れて、血が流れている。頭にも傷があるようで、縮れ毛の間から血が流れ出している。祐子は直ぐに瞑目

し、クリグの体内を透視した。被弾はしていない。脳にも損傷は無いようだった。祐子は自分の服の袖を切り裂き、額の傷の上に巻き付けた。それから切り残した部分を裂いて端布を作り、今度は出血している頭の血を拭い、頬の傷口の血を拭った。祐子は出血の止まるのをイメージした。程なく出血は止まった。クリグの顔面はどす黒くなっている。出血で血色が悪くなっているためだと祐子は思った。マリーが祐子の側に来た。ボモがマリーに向かって言った。

「*****」(もう、これ以上はガイドはできません。やはりあのとき、引き返せば良かったんだ)

祐子がスワヒリ語でマリーに言った。

「*****」(この人他達はここで解放してあげましょう。これからは私たちだけで目的地に向かいましょう)

「*****」(でもママ、生きて目的地に到着できるかどうか分かりませんよ)

「*****」(あなた、私に附いて来てくれるのでしょ？私は突き進むのみのよ)

マリーは返答できなかった。暫くしてベムとアルフォンが戻って来た。アルフォンが言った。

「*****」(ママ、奴らの後を追跡したら、小さな集落に行き着きました。奴らはどうやら、この森の奥に住み着いているようです。男達が慌ただしく動き廻っていました。奴らは反撃して来ると思います。できるだけ早くここを立ち退いた方が良いと思います)

ピグミー達を降ろし、全員で必死になって、泥穴の中からクリグ達の車を引き上げた。祐子はクリグを後部座席に横たえ、ソニアの渡してよこした救急箱を開け、傷口をしっかりと治療し、包帯も巻き替えた。ボモは避難民が潜んでいるという噂のある森への入り方を祐子とマリーに説明した。その森への入り口になる村はここからそれほど離れていないことが分かった。マリーから契約料の残額を受け取るとボモが運転席に移り、急いで元来た道に戻って行った。マリーはピグミー達をトラックの荷台に乗せた。ピグミー達は表情ひとつ変えることもなく、言われると

おりに行動した。言葉は通じないが、マリーのジェスチャーを加えたリンガラ語を理解できるかのようにだった。アルフォンとジミーは全員が車に乗り込むと、急いで車を発進させた。祐子は傷を負った男達の治療ができなかったことを悔やんだが、それはやむを得ないことだと自分に言い聞かせ、心の中で、彼らの回復を祈った。ジミーに動きを封じられていた亜希子もようやく解放されたとでもいうかのように話し始めた。

「*****」(クリグさんとボブさんは大丈夫でしたのね。良かったわ。でも、あの戦闘地域の中をどうやってブカヴに戻るのでしょうか?)

「*****」(そうね、敵を怖れていなければ良いのだけれど……少ししたら、通じるかどうか分からないけど、トランシーバーで確認してみるわ)

2台の車は路上の窪みを避けながら、ゆっくり走った。やがて道は周囲を木々で囲まれた、広い空き地に出た。どうやらそこは以前村があった場所のようだ。所々に家の建っていた形跡が窺える。今では完全に草原と化していた。周囲を見回してみても、車で入り込んでゆけるような道らしきものは無さそうだった。全員がもうそれ以上先に進むことはできないと諦めた。祐子に向かってマリーが言った。

「*****」(ママ、車を乗り捨てますか?もしそうすると、最悪の場合、もうキガリには戻れないかも知れませんが)

「*****」(何かうまい方法があるはずよ。だって、私たちはここまで導かれて来たのだから)

陽は西に傾いているようで、先ほどより一層薄暗く感じられる。

「*****」(ママ、今夜はここで野営したらどうでしょうか?)

亜希子が言った。それに対してマリーが反論した。

「*****」(それはあまりにも危険です。そもそもここはあの分岐点から来た行き止まりの場所でしょう。ここに住むものなら誰でも知っている場所のはずです。簡単に見つかり、攻撃されてしまうと思います)

祐子が言った。

「*****」(ボモはこの先の森の中に避難民が住んでいる可能性が

あると言っていたわ。その理由を聞いてみようか?)

祐子は直ぐにトランシーバーでボモを呼び出した。トランシーバーの音は途切れ途切れだが何とか話が通じた。ボモは無事にあの3差路を右折し、帰路に着いていると言った。クリグの傷口も悪化していないとのことだった。ボモは「今祐子達の居る場所には、以前村があったのだが、住民がブチ族だったためφDLRに虐殺されたのだ」と言った。その後φDLRがここを占拠していたが、今の政府軍ρCDの攻撃を受け殲滅され、そのことが人々の間に伝わり、ここには悪霊が住んでいるという噂になって広がり、その後は誰もここには近付かなくなったとのことだった。反乱軍も悪霊を怖れているためここには接近しないとボモは言った。それで、反乱軍や盗賊はここより東の地点に拠点を置いて、その周囲に逃げ込んで来た人々から生活物資を搾取して活動しているとのことだった。祐子はその話を聞いて、アイデアが閃いた。ここを人が近づけないような不気味な雰囲気のできとしようと考えた。マリーと相談し、ピグミーを使い、兵士が協力して、この空き地の入り口に草のシールド柵を作ることにした。そして、草地の中央に車を駐車し、車を草で覆い、車の中から銃撃できるようにすることにした。車の背後に4枚のテントを張ることにした。草の柵の向こう側には枯れた蔓を張り巡らせ、その蔓にガソリンを振り掛け、染み込ませた。男達が柵やテントを作っている間に、ソニアは夕食の支度をした。ソニアもやっと息が継げたので、晩食は腕を振るうことにした。久しぶりに火を使い、シチューを作った。交代で必ず兵士の中の一人が監視に着くことになった。監視に向かったジミーを除いて全員で火を囲み、シチューを楽しんだ。ジミーからは特に連絡は無い。祐子はしばし瞑目し、ここまでの道を透視してみた。別段不穏な動きは感じられなかった。全員がしばし歓談してから、再び透視を行った。既に8時を回った頃だ。先ほど襲われた場所近辺に人の動きが見える。大勢居る。意識を集中すると全部で50人ほどの人間が居ることが分かる。どうやら銃を所持しているようだ。車が2台あるのが分かった。車がゆっくりこちらに向かって走って来る。大勢の人間がその後に従って歩いて来る。祐子は瞑目を解いた。亜希子に向かって囁い

た。

「亜紀、テレポーテーションして、滞空状態でいられるかしら？」

「できるかも知れませんが、自信はありません。高い木の上とかでしたら鳥のように停まっていることはできると思います」

「火の点いた松明を持って、さっき来た道の途中の高い木の上にテレポーテーションしてくれる？敵が来るのよ。超現実的なものを見せて、恐怖心を煽るのが一番良いと思うのよ。彼らは銃を持っているから、撃つて来る危険性があるわ。そうしたら、直ぐに戻って来て」

「はい、お姉様。わたくし、やってみます」

「気を付けてね」

祐子と亜希子がひそひそ話をしているので、全員が不安げにふたりを見詰めていた。祐子がいきなり立ち上がって言った。

「*****」（皆さん、落ち着いて聞いてください。今、敵とおぼしき一団がこちらに向かって来ます。全員守備位置に着いてください。いざというときはさっき取り決めたように敵を迎え撃つ体制をとってください。マリーもソニアも押収した銃を持って待機してください。今から亜紀が空中を飛んで、相手を威嚇してきます）

丁度その時、ジミーが戻って来て祐子に報告した。

「*****」（ママ、大変です敵がこちらに向かって来ているようです。遠方に微かに動きが感じられました）

「*****」（やはりそうね。亜紀、お願いね）

亜希子はたき火から、まだ燃え始めたばかりの火の付いた薪を2本手に取り、瞑目した。皆が急いで食事の後片付けを始めた時、亜希子が一瞬にして薪と共に消えた。それを見て全員呆然となったが、祐子が促したので、急いでたき火を消し、配置に就いた。ソニアがジミーにスプーンの椀を渡した。ジミーはにっこり笑って一気に口の中に流し込んだ。

祐子は森の入り口の低木の茂みに身を潜めた。ジミーとメドリスナが祐子の前に陣取り、祐子の後方にピグミー達も3人寄り添って、しゃがみ込んだ。それぞれが皆自分の配置に着くと辺りは静まりかえった。

亜希子は一番高い木の上を意識して顕現した。木の枝を背にするだけで

滞空できた。接近して来ている歩兵の何人かが、突然前方の大木の天辺付近に火が燃え上がったことに気付いた。亜希子はその火を持った腕をゆっくり、大きく左右に振った。下方にどよめきが起こった。亜希子は意識を集中し、そのまま滑空を試みた。うまくいった。歩兵団の兵士達は驚愕した。何ものかが空中を飛んでいる。その周りに火の玉が揺らめいている。兵士の何人かが後方に向かって走り去って行くのが分かった。その時突然、祐子達の居る草地に勢いよく炎が上がった。監視に出たアルフォンが蔓の導火線に火を付けたのだ。従軍の運転手は急に停車した。もう、前進する勇気を完全に失ってしまったようだ。更にその時、森の中から、「ウオー、ウオー」と地をも揺るがすような唸る声が出た。まるでゴリラの咆哮を拡声器で拡大したような身の毛もよだつ声だった。兵士達は先を争って一目散に反対方向に向かって退散した。車を運転している者も、無理矢理ハンドルを切り、アクセルを噴かして引き返して行った。それを見ていた亜希子は、あの暗がりでもよく穴にはまらずに走れたものだと感心し、一呼吸して、テントの前に戻った。誰の姿も無い。藪の中から祐子の囁くような声が出た。

「亜紀、こっちよ。藪の中に居るわ」

亜希子はみんなが森の中に待機しているのを知り、急いでそこに向かった。

「*****」(皆さん、敵は逃げ帰りました。あのものすごい声はどうやって出したのですか?)

亜希子の大きな声が響く。祐子が声を抑えて言った。

「*****」(あれは、我々が出したんじゃないの。何かが近くに居るのよ)

メドリスナが森の方を見詰めて言った。

「*****」(き、きっと、モケレ・ムベンベだ。この奥に居るんだ。早くここから逃げ出さないと、俺たちだって食われてしまうぞ)

ジミーが笑いながら言った。

「*****」(はっはっはっは、モケレ・ムベンベはウバンギのテレ湖に棲んでいるんだ。こんな所にまでは来ない)

「*****」(それじゃ、あの吠え声は一体何ものだと言うんだ?)
それまでほとんど声を出さずに、言いつけられたことを黙々と行うだけ
だったピグミーの一人が何か言った。

「*****」

ピグミー達の言葉の中にモケレ・ムベンベという言葉が入っているのが
分かる。他の二人のピグミーも頷いている。誰にも、ピグミーの言葉が
分からない。しかし、祐子はその言葉の持つ雰囲気理解できた。

ジミーとメドリスナは黙ってしまった。亜希子が言った。

「*****」(お姉様、モケレ・ムベンベって一体なんですか?)

「*****」(西にあるテレ湖という湖に棲んでいると謂われている
怪物よ。見たことがあるという人の話では、犀を大きくして、首を長く
したような姿の怪物だということよ。蛇とワニを合わせたような姿で、
60メートルもある怪獣だという話もあるのよ。だけど、写真に撮った
人はいないの。いろいろな国の人たちが調査に行ったけど、沢山の人が
途中で死んでしまったり、行方不明になったりして、戻って来られ
なかったと聞くわ。そんなにして調査に挑んでも今まで誰も発見できな
かったようだわ。勿論物見高い日本の探検隊なんかも行ったらしいけど
ね。森に棲む人たちにとっては、その存在は疑う余地の無いほど確かな
そうよ。私は、この動物がこの世界だけの存在ではなくて、幽界にまた
がる存在のような気がしているのよ」

「お姉様の大好きな世界ですね。お姉様、そこは昔から変わっていらっ
しゃらないですわ」

祐子の心の中に言葉が響いてきた。祐子は後方を振り向いた。ピグミー
達と視線が合った。それは不思議な体験だった。ピグミー達が祐子に語
り掛けているのだ。その声は亜希子と二人の兵士には理解できなかった
が、祐子にははっきり分かった。

「ウバンギには我々の仲間が居る。我々には仲間のことが分かる。森は
一つだ。我々はここに居て、どこにでも居る。森が自分たちだ。ウバン
ギもこのカルバもみんな同じだ。白人達の探しているモケレ・ムベンベ
はどこにでも居る。あの鳴き声はモケレ・ムベンベだ。戦いを嫌う森の

精だ」

暗闇の中でも、祐子にはピグミー達の純粹な意識の流れが感じられた。祐子は日本語でピグミー達に話し掛けた。

「あなた方は、素晴らしい方達ね。複雑な仕組みで雁字搦めになった私たちとは全く違った生き方をしているのね。モケレ・ムベンベがあなた方にしか見えない理由が分かるわ」

「モケレ・ムベンベは誰にでも見える。みんな見たことがある。恐ろしい存在ではない。我々の森を守っている存在だ。我々が刃を向けない限り、我々に危害を加えることは無い」

祐子は賢と一緒に行ったあの八丁池の大蛇のことを思い出していた。日本の神話に出てくる大蛇は生け贄として若い娘を食べるのを好んだ。祐子はモケレ・ムベンベが危害を加えないというのは、ピグミー達が存在を怖れて、近付かないからだろうと思った。

ピグミーのバントゥー系の言葉と、祐子の話す極東の言葉は巫希子以外誰も理解できなかった。巫希子は最初のうち、祐子の話す言葉しか理解できなかったが、次第にピグミーの話している言葉の持つ意識が脳裏に展開されてきた。ピグミー達の言葉は言語というより、単語と意思表示の表現のように巫希子には感じられた。

敵が退散したのを知った者達が三々五々藪の中から姿を現してきた。マリーが祐子の元にやって来て言った。

「*****」(ママ、敵は行ってしまったんでしょうか?)

「*****」(どうやら退散したようね。まあ、今夜はもう攻めて来ることはないでしょう。テントに戻って、蚊帳を張りましょう。明日はピグミー達に、避難民の人たちが居住している場所に連れて行ってもらいましょう。彼らもこの森に住んでいるわけではないから、自分達の感に従って我々を案内するのでしょうか、森の中のことならどちらに進むのが安全で、人々がどちらに向かって移動したかが分かるとクリグさんが言っていたから、ここでは彼らの感覚を信じて行動するのが一番確かだと思うわ)

祐子の言うとおりに、その晩敵が攻めて来ることはなかった。翌朝はソニ

アがいち早く起き出して、朝食の支度をした。調理道具も不足する中で、ソニアはいろいろ工夫しているようだった。野宿でありながら、ソニアの作った朝食は全ての者達に満足感を与えた。食事が済むと、全員で車を、その存在が全く分からないように隠すことにした。しかし、どれほどうまく草で覆っても、そこに車があることは明らかだった。祐子は賢に相談することにした。テレパシーで賢を呼び出した。賢は直ぐに応答した。賢は2台の車を一時由仁に持って来ようと言った。物質転送機の隠し機能で、切り取る空間の底面を10メートル四方に設定することにした。祐子が受物装置の位置情報検出端末を用いて、車の位置を賢に知らせると、賢は趣味の部屋の物質転送機を操作して、2台の車を即座に由仁の家の駐車場に転送することにした。

転送の準備が出来ると、祐子は全員を集めて、車を前にして立ち、両手を広げて言った。

「*****」(皆さん、車から必要な荷物は降ろしましたね。それでは、しばらくの間、車に消えてもらいましょう。さあ、車からずっと離れて・・・・車よ、車、しばしこのコンゴから消えていなさい)祐子の叫び声が轟き渡った。一瞬間を置いて突然車が目の前から消え去った。全員、驚愕の中に居た。ピグミーも何が起きているのか分からないようだった。兵士達は祐子の魔力のような力を恐れ、それを呪術的なものと扱えたようだった。マリーとソニアは只呆然としているだけだった。

「*****」(さあ、皆さん、これで、安心して移動できるわね)超常的なことを行う二人の女性を全員が怖れるようになっていた。祐子はピグミー達に、最近の戦争で多くの人たちが逃げ込んだと思われる場所に案内してほしい旨を伝えた。その要望は既にボモとクリグが彼らに伝えていた内容なので、意志の伝達だけで、十分だった。メンバー全員が荷物を背負い、森の中に向けて出発した。女性達の背負うバックパックは男達のものに比べ1/3ほどの大きさに制限した。ピグミー達が先頭を行き、全員を誘導する。次にジミーが続き、その後に祐子、亜希子と続いた。亜希子の直ぐ後にメドリスナが附いて、その後にマリーとソ

ニアが続き、しんがりがアルフォンとベムだ。一步森に足を踏み入れると、そこは全く別の世界だった。昼間でも日が当たらない薄暗い場所で、道らしき道も無い。やはり、森は一筋縄では行かない場所だった。茨が行く手を遮り、アブや蚊、蟻に悩まされ始めた。一方、これまで兵士や女性達の背後に居て、目立たなかったピグミー達が一気に活気付いた。周囲から鳥の鳴き声が聞こえてくる。日本に居るウグイスやホトトギスなどの愛らしい声とは違い、それはジャングルという大自然の中で生き抜いている逞しい鳥たちの鳴き声だ。森に入っても、一行はどの方向に向かって良いのか皆目見当も付かなかった。しかし、ピグミー達は自分達がどの辺りに居て、目的地に着くためにはどの方向に向かえば良いのか分かっているようだった。草の茂みを打ち払いながら進むピグミー達は、身体こそ小柄だが、とても逞しく祐子の目には映った。亜希子は常に足下に神経を使った。女性達は皆、長袖のサファリシャツを着て、厚手の帽子を被り、綿の手袋をし、ロングパンツを履き、ブーツを履いていたが、それでも亜希子は直ぐに蟻に手の指を噛まれて、祐子に助けを求めた。ピグミーのムグムグが森の中の木々の奥に入って行き、草の葉を取ってきた。それをすりつぶして亜希子の指にすり込んでくれた。飛び上がるほど沁みたが、やがて、傷口の腫れは引いてきた。ピグミー達の歩く速さは女性達には附いて行くのがやっとだった。時々姿を見失ったが、少しすると、ピグミーのバンメが戻って来て、全員が附いて来ていることを確認してくれた。足下は水気を含み、時々積もった落葉の中に足が滑り込みバランスを崩した。暫く行くと岩陰に高さが大人の背丈の倍ほどもある大きな蟻塚があった。蟻塚の裏側の穴から体長が1センチ以上もある大きな蟻がぞろぞろと這い出して来ていて、一行がこれから進もうとする森の奥に列を為して行進している。ムグムグが木の切れ端で蟻の進行方向を変えようとしたが、蟻はそれをものともせず、その棒に向かって食らいついてくる。亜希子にとっては恐ろしい光景だった。ムグムグが祐子の方を伺った。祐子は彼が火を求めていることを理解した。祐子はバックパックを降ろし、中からライターを出して火を付けた。ムグムグは枯れ木の棒の先をライターの炎の上に翳した。棒に火

が付くと、ムグムグはその火を蟻たちの方に向けた。それでも暫くは、蟻は動じる様子を見せなかったが、1、2匹が火に炙られて焼け焦げると、続いていた蟻たちが、漸く進行方向を変えた。後続の蟻たちが撤退したのに気付いたのか、先行の蟻群は一目散に蟻塚に向かって戻って来た。祐子と亜希子は蟻たちの群れとしての統一した行動に、今更ながら驚きを禁じ得なかった。

「*****」(ジャングルの蟻は、生きている動物でも襲って食べてしまうのよ。一人で居るところを一旦群れに襲われたら、助からない場合も多いの。白骨だけを残して、食べ尽くされてしまうらしいわ。油断は禁物ね)

「*****」(お姉様、脅かさないでください。さっきその蟻に刺されたことを思うと、背筋が冷たくなります)

「*****」(亜紀、冗談なんかじゃないのよ。だから、動物を捕らえて繋いでおくのにも、注意が必要なのよ)

暫く進むと、草や人の背丈ほどの木々がなぎ倒されている場所に出た。やっとピグミーに追いつくと、ピグミーの一人ソノンが祐子に向かって言った。

「*****」

祐子はそれを感じ取った。どうやら、象の通る道のような。野生の象は動物園で見ているような、ゆったりとした、おとなしい動物ではない。そのことは祐子も亜希子もアフリカに来て、いろいろな人に聞いてよく知っている。近くに象が居ないことを願いながら、ピグミー達を倣い、あまり大きな音を立てないようにして前進した。象を刺激しないためだ。こちらにとっては象は危険な存在だが、象にとって人間は、恐怖そのものだ。つい最近まで西洋人が金儲けのために探検隊を編成して森に入り、夥しい数の象を殺し、象牙を持ち帰っていた。それは象に限ったことではないが、今更にして、動物博愛主義などという美辞麗句で動物保護を唱えている者達も、他人を責める前に、自分達の先祖が行ってきた行為をじっと見詰める必要があると亜希子は考えた。背丈の低い灌木の奥でがさがさと何か動く音がした。ピグミー達が立ち止まった。ピグミー

の動きを見て、全員が立ち止まった。祐子は藪の中に何か居て、こちらを窺っているのを感じた。亜希子もそれを感じたようだ。草むらからゴリラが顔を出した。じっと祐子達を見詰めている。どうやらゴリラの背後に一つの群れが隠れているようだ。姿を見せたゴリラは頭部から背中にかけて銀色の美しい毛並みで覆われている。それがシルバーバックと呼ばれる群れの長であるらしいことが分かった。ゴリラは一行の方をじっと睨み付けている。全員が、動物たちに出会ったときには、慌てずに、じっと対峙すべきであることを知っていた。一分間ほど睨み合っていたが、やがてゴリラは草むらの中に姿を消した。祐子にはまだ、沢山のゴリラが藪の中に居ることが分かった。ピグミーもそれを感じているようだったが、ゴリラを刺激しないように注意しながら、先に進み始めた。少し行くと、前方でムグムグが棒を使い木の幹を叩いている。よく見るとそれは大きな蛇だった。全長3メートルはある。ムグムグは蛇を威嚇して追い払っていた。全員、暑さが身体に堪え始めた。祐子の提案で、昼食にすることにした。木陰の広い場所を見つけて、そこで休息することにした。ピグミー達が森の中に入って行きやがて木の枝を何本か持って戻って来た。3人がそれぞれ手際よく何かを組み立て始めた。見ているとあっという間にベンチが出来た。ピグミー達は女性達をベンチに座らせるつものようだった。もう一度森の中に入って行き、今度は大きな葉を何枚も採ってきた。その葉を出来立てのベンチに敷いてくれた。男達は藪の草をなぎ倒して、その上に直接腰掛けた。ソニアが大分ばてているようだったので、女性達はソニアが食事の支度をするのを手伝った。

「*****」(お姉様、村の人々はこんな森の中に逃げ込んでいるのでしょうか?)

「*****」(クリグさん達がそう言っていたわ。ピグミーの人たちもそのことを知っているよね)

「*****」(こんな森の中で、どうやって生きているのかしら?)

「*****」(私にも分からないわ。コンゴの国の中で本当に苦しんでいる人たちがどんな生き方を強いられているのかを知ることが、この

探索の目的なのよ。そこから全てが始まるわ)

二人の会話を聞いていたマリーが言った。

「*****」(私には、まだ、どうしても分からないのです。こんな未開発の、電気も、ガスも、何も無いジャングルの奥地から、どうやってコンゴの国全体を動かして行くのかということが。ママ、是非お聞かせ頂けないでしょうか？もし、それができたら、この地球全体を天国にすることだって、夢ではなくなると思うのです)

「*****」(そうね、私もそう思うわ)

「*****」(でも、ママ、ママには何か信念がおありのように思うのです。それとこれからどうやってこの国を変えて行くのかと云った方策のようなものもおありなのではありませんか？)

「*****」(前にも言ったように、何も無いわよ。私も、亜紀もただ苦しんでいる人々を救いたい、この世界を苦しむ人のいない平和な世界にしたいと思っているだけ。このジャングルの中でも過酷な人生を強いられた人たちが生き抜いていると聞いたわ。町の中に住んでいる人たちは、苦しい生活の中でも、周囲を軍に取り囲まれていて、何時襲われるか疑心暗鬼となっていて、恐ろしくて、本当のことを口にできないように思うのよ。兎に角、クリグさんは、順調にいけば10数人の避難民が住んでいる場所には、今日中に着くはずだと言っていたわね)

「*****」(はい、その人達には何も無いから、盗賊も、軍も見向きもしなくなっているって言っていました。だから、あまり奥地でないところに住むこともできるのだって)

ツェツェバエを払い除けながら食事を摂ると、皆元気を取り戻したようだった。しかし、ソニアの状態はあまり芳しくなさそう。祐子がソニアに近付いて何処か具合の悪いところがあるか訊いた。ソニアは「何となく全身が疲れているような感じですが、特に痛いところなどはありません」と応えた。祐子は瞑想し自分の身体を通してソニアにプラナのエネルギーが注がれるのをイメージした。瞑目を解いたが、ソニアは一向に元気にならない。祐子はソニアに寄り添って耳元で囁くように尋ねた。

「*****」(ソニア、どうしたの？何か悩みでもあるの？)

「*****」(ママ、ご心配をおかけして申し訳ありません。私は大丈夫です。何処も悪くありません)

ソニアは元気なく応えた。祐子はソニアを励まし、暫く様子を見ることにした。一行が出発するとき、ソニアと亜希子の順番を入れ替えて、自分の直ぐ後ろを歩くようにさせた。昼食を摂ったためか、皆元気が良い。メドリスナがソニアに向かって言った。

「*****」(ソニア、大丈夫か？背中の荷物を俺によこせよ。持つてやるから)

ソニアは首を横に振った。

「*****」(大丈夫。心配かけてごめんなさい)

メドリスナはソニアのバックパックを無理やり降ろさせ、自分の大きな荷物の上に括り付けた。

「*****」(ソニア、ごめんなさいね。私が大変な仕事をお願いしたばかりに)

祐子が言った。ソニアは首を横に振った。

「*****」(ママ、ごめんなさい。私、足手まといになってしまって)

ソニアは涙ぐんだ。祐子が立ち止まったので、全員立ち止まった。ジミーが後ろを振り返った。

「*****」(ママ、大丈夫ですか？)

「*****」(私は大丈夫よ。それより、ソニアの元気がなくて)

ソニアが唇を噛んで、下を向いている。その時、行く手に急に大きな鳥が飛び立った。サイチョウだ。ピグミー達が駆け足で戻って来た。それと同時にドドドド・・・と地響きがしてきた。祐子はピグミーが口々に叫んでいることばを聞き取った。

「*****」

象の群れがこちらに向かってきているようだ。全員急いで元来た道に戻った。象の通る獣道を避けて、全員が大きな木の陰に身を潜めた。五メートルほど先の藪の中を、木々をなぎ倒して、象たちが走って行く。20頭はいる。その地響きのすごさはまるで地滑りでも起きたかのようだ。「ド

ドドドド……」全員その恐ろしさに生きた心地がしなかった。祐子と亜希子は木陰に小さくなっていった。その背後をメドリスナとジミーが防御するように立っていた。ソニアがジミーの腰辺りに頭を埋めるようにして蹲っている。マリーとソニアの脇にベムとアルフォンが仁王立ちしていた。象の群れが通り過ぎてしまっても、ソニアはジミーの腰辺りに顔を埋めたままじっとしている。

「*****」(ソニア、もう行ってしまったよ。大丈夫だ)

ジミーの声にソニアがジミーの顔を見上げるように窺って、直ぐに目を伏せた。祐子はソニアの病気の原因が理解できた。ムグムグとソノンの2人はいつの間にか木の上に昇っている。バンメは象が行ってしまったのを確認に行き、直ぐに戻って来た。一行はそこで休憩を取ることにした。ソニアが心なしか元気になっている。木の上に昇っていたソノンが大きな袋のようなものを手にして降りて来た。それは蜂蜜の巣だった。沢山の蜜蜂が大騒ぎしてソノンの周りを飛び回っている。ソノンはそんなことはお構いなく、巣に人差し指を差し込んで蜂蜜を嘗め、それを全員に廻した。全員が1回ずつ人差し指で蜂蜜を嘗め、残りの巣をソノンに戻した。ソノンはそれをソニアに渡し、収穫物は夕食用としてソニアのバックパックの中に仕舞い込まれた。

「*****」(ソニア、大丈夫か？少し顔色が良くなったな)

ジミーがソニアの顔を覗き込むように見て言った。

「*****」(うん、もう大丈夫)

「*****」(ジミー、ソニアの荷物はおまえが持て)

メドリスナがジミーに向かって言った。メドリスナも感づいたようだった。

「*****」(私、自分で持てます)

ジミーは黙ってソニアの荷物を自分のバックパックに括り付けた。

5分ほどして、一行は再出発した。いろいろなハプニングがあり、緊張の連続だったが、蜂蜜を嘗めて、全員心が浮き立ってきた。ピグミー達はピッチを上げた。やがて、森は山裾に掛かってきた。所々、木々の合間に苔で覆われた大きな磐が現れてきた。磐と磐の間を迂回しながら、

進んで行くと、岸壁に突き当たった。更にその岸壁の麓に沿って歩いて行くと、磐の間を流れる沢が現れ、その沢の向こう岸に少し広い草地が見えた。ピグミー達がそこを指さした。祐子はそこが目的地だと理解した。しかし、沢のこちら側から見る限り、家々があるようには見えない。広い草地の周囲は藪に囲われていて、切り倒された木々があちこちに積み重なっている。一行は沢の石の上を滑らないように注意しながら渡った。亜希子が沢の真ん中付近で石の上から足を滑らせて、溪流の中に落ちてしまった。アルフォンが直ぐに助けたので、流されずに済んだ。既に渡り切っていた祐子は亜希子を心配したが、アルフォンに腕を持って引き上げられ、舌を出した亜希子の顔を見て、祐子もほほえみを返した。沢を渡り切ると、草原に向かおうとするジミーを遮って止めたバンメが祐子に振り向き何かを訴えた。どうやら、そこで待つようにとのことのようにである。ピグミー達は3人が別々の方向に向かって非常にゆっくりと進んで行った。他の者達は沢の縁に腰を下ろし、ピグミー達の様子を見ていた。草地の右端を進んでいたムグムグが右手を挙げた。左側と中央を進んでいた二人は直ぐに戻って来た。右端を進んだムグムグは前方の藪に向けて進みその中に姿を消した。暫くして、ムグムグは再び姿を現した。自分の進んで行った草地の右端をそのまま大回りしてみんなの待っているところまで戻って来た。ムグムグはマリーに附いて来るように手招きした。マリーとベムがムグムグの後に附いて行き、藪の中に消えた。暫くして再び3人が戻って来た。全員の所に戻ると、マリーが祐子に言った。

「****」(ママ、あの藪が避難民の人たちの住んでいる場所です。あそこには芦で屋根を葺いた小さな5、6軒の家が建ち並んでいるようです。ここから見ると藪にしか見えませんが、そこに彼らは潜んで暮らしているようです。我々が危害を加えない安全な人間であることを伝えて来ました。彼らは何も持っていません。どん底の貧困状態です。とても衰弱していて、敵が来てもとても歯向かうだけの力は無いように見えます。どうしますか？直ぐに彼らにお会いになりますか？)

「****」(ええ、直ぐに会います。ところで、どうして、右端を

迂回するのですか?)

「****」(中央と、左側には罾が仕掛けてあるとのこと。足を踏み入れると、毒矢が飛んで来ます。その毒に触れたら、即座に死に至るほどの強い毒です。ピグミー達はそれを知っています。この場所で生きるのも、命がけのようです)

兵士達もお互いに顔を見合わせて頷いた。祐子はムグムグとマリー、ベム、メドリスナを伴って家々の入り口らしきところまで進んだ。直ぐ近くにまで行っても、唯の藪のようにしか見えない。ムグムグが草を掻き分けるようにして中に突き進んで行く、マリーが次に続き、祐子はその後から入った。ベムとメドリスナは外で待った。草を押し分けて中に入ると、そこは芦の葉に囲まれた部屋のような空間だった。光が入るように工夫はされているが、薄暗い。身体を屈めなくては頭が芦の天井に突いてしまうほどの狭い場所だ。中には老翁が一人居た。その顔はやせ衰え、目は落ち窪んでいる。手足は古竹のように骨が浮き出ている、一目でまともに食事を摂っていないことが見て取れた。

「****」(先ほども申し上げましたように、私たちはこの森の生物を調査する為にルワンダのキガリから来ました。決してあなた方に迷惑をおかけするようなことはありません。少しでもあなた方のお役に立てたらと思っています)

老翁は顔を上げて、マリーを見詰めた。警戒する力も残っていないかのように、視線を土の床に向けて、ぼそぼそと言った。

「****」(動物や植物を調べるのは勝手ですが、残念ながら、私たちにはあなた方をもてなす力がありません。それでもよろしければ、この森は誰のものでもありませんから、ご自由に調査なさってください)

「****」(初めまして、わたくしはユウコと申します。私はジュベステル教授の助手をしています。わたくしたちは森に詳しくありません。この辺りの自然の生態について調査したくて参りました。数日間滞在して調査したいと思っております。しかし、わたくしたちだけでは、どこをどう調査して良いか分かりません。どうしてもあなた方のお力をお借りしたいのです。お願いできませんでしょうか?)

老翁からの返事は思いも掛けないものだった。

「*****」(私は、ラジュラク・モンジャルと言います。この村の入り口を守るものです。私たち村の者達は、極端に言えば、ここでただ死を待つだけの日々を過ごしています。もし、まだこの生で、あなたたちのお役に立てることがあるのでしたら、是非、手伝わせてください。勿論何日でも、ご自由に滞在なさってください)

「*****」(ありがとうございます。そのお言葉を窺い、無理をしてここまで来た甲斐がありました。あなたは、この国を変える水先案内人になることでしょう)

老翁は微笑んだ。祐子はどうして、そのようなことを口にしたのか、自分でも理解できなかった。祐子は自分の口にした言葉の内容を噛みしめて、そんなことになるのだろうかと思議に思った。ふたりの会話を聞いていたマリーが言った。

「*****」(私には、よく分かりませんが、とりあえず、今晚はこの付近にテントを貼り、宿泊させてください。ここにはどれくらいの人たちが住んでいるのですか?)

「*****」(15人です。この家を含めて全部で6軒の家があります。外からは分かりにくくなっています。この家の入り口を出て、少し右に行くとそこから家々に通じている藪道があり、その奥にみんなが住んでいます。但し、気を付けて頂かなくてはならないことがあります。この周辺には罾が沢山仕掛けてあります。それは敵から身を守るためと、動物たちに襲われないようにするためです。先ずそれを覚えて頂かなくてはなりません。ピグミー達をお連れのようなので、彼らならどこに罾があるか教えてくれるでしょう。先ほども申し上げたとおり、沢の方から進入して来る敵に対しては致死量の毒を塗った罾を仕掛けてあります。私はあなた方が近付いて来ているのを察していました。あなた方に戦慄を感じませんでしたから、どうか無事に来てほしいと思っていました。ピグミーをお連れになったことは賢明だったと思います。ピグミー達が、罾に気付き、そこを避けてくれたので、私は胸を撫でおろしました。でも、兎に角注意してください。本当は人を殺すようなことはし

たくないのですが、私たちの村にいる人たちは理由もなく、あまりに酷い仕打ちを受けましたから、そうせざるを得ないのです。村の仲間が500人以上も殺されましたから、もう国軍や他国籍軍、解放軍や、愛国軍など全て信じることはできません。信じるどころか、恐怖に怯えて生きています。私たちが生き延びるためにはやむを得ない罠なのです。彼らは正気ではありません。昼間から酒をあおり、金や食料を強奪するためには容赦なく人間を殺します。女性達を見れば必ず強姦しようとします。時には幼い少女まで犯されてしまいます。彼らに抵抗すれば殺されます。強姦する軍人や盗賊の目的には2通りあって、一つは、自分の欲望を満たすため、もう一つは自分達と異なる種族に自分達種族の血を引いた子孫の種を植え付けることです。初めの目的だけで強姦したものは必ずと言って良いほど、相手の女性を殺してしまいます。子供達に対しても無慈悲です。そのむごたらしい行いについては、私は喉が詰まってしまって、声に出してお話することができません。男達に対しては、ほとんどの場合、殺すか、不慮にしてしまいます。そうしておいて、食料と家財道具を全て持ち去ってしまいます。そういう蛮行を行う者達は、まだ若く、肉体が強く、乱暴で人生経験の無い者が大半です。何ヶ月も支払われない給与、その結果の空腹と、渴望が、彼らをそういう人非人になっているのでしょうか、だからと言って我々は彼らを受け入れるわけにはゆきません。さもなければ村全体が根絶やしにされてしまいますから。我々は必死に生き延びてきましたが、たとえ難を逃れ、生き延びることができたとしても、その先、生きる術がありません。ここに住んでいる者達はみな、そういう経験を経て来た者達です。是非後で、村のみんなに会ってください)

「*****」(ジュベステル教授から聞いたかも知れませんが、私たちはピグミー3人に導かれてここまで来たメンバー8人の調査隊です。本当はコンゴ人ふたりに案内してもらったつもりだったのですが、途中で盗賊に襲われ、彼らは自分達の町に戻りました。後ほどメンバー全員を紹介致します。メンバーの内の4人は武装していますが、私たちを守る仲間の兵士達です)

「*****」(私は、武装して銃を持っているか否かということは問題にしません。どういう心を持っているのかだけを見えています。あなたには全てをお話しできそうです)

亜希子は祐子達が藪の中に消えてしまって戻って来ないので、ドキドキして見守っていた。やがてマリーがムグムグ、ベムと一緒に戻って来た。全員がムグムグの後に附いて右端を進み、藪に近付いた。藪の中からメドリスナが現れ、その後でモンジャル老翁と祐子が現れた。モンジャル老翁は全員に一瞥を与えて、軽く頷いた。祐子がモンジャル老翁に向かって一人一人を紹介した。モンジャル老翁は紹介されるたびに「よろしく」と挨拶をしていたが、亜希子が紹介されたとき、ひとこと言った。

「*****」(あなた方は女性の調査隊なのですね。この国ではあり得ません。女性が生きることがとても難しい国なのです。これから、アキさん、あなたにはいろいろお世話になるような気がします。こちらこそよろしくお願ひします)

顔合わせが済むと、モンジャル老翁は祐子に、自分に附いて来るように告げ、家とは思えない草の家の左側の藪に向かって草をかき分けて押し進んで行った。祐子と亜希子、ジミーが老翁の直ぐ後に従った。他の者達はテントを張ることにした。マリーが全員に罾が仕掛けてあることを説明し、細心の注意が必要だと言った。男達は簡易テントを張る準備を始めた。一つのテントに4人ずつ入ることになる。ピグミー達は森の中に入って行き、暫くして芦と木々の枝を手にして戻って来た。兵士達がテントを張り始めると、ピグミー達は草と木の枝でドーム型をした2、3人が身体を屈めてやっと入れるほどの小屋を作り始めた。兵士達が二つのテントを組み立て上げると、ピグミー達の小屋も出来上がった。ソニアが不安げにさっき祐子達の入って行った草むらの方を見詰めている。メドリスナがソニアに言った。

「*****」(ソニア、大丈夫だよ、アキさんには君の大切な人が居るから)

ソニアは恥ずかしそうに下を向いた。夕刻が近付いているのが分かる。マリーに言われてソニアが夕食の支度を始めた。ピグミー達が再び森の

中に入って行った。

祐子はモンジャル老翁に案内されて草を分けて進むと、草で周囲を葺いたドーム型の小屋が建ち並んでいる場所に出た。モンジャル老翁は指をくわえて「ピー、ピー、ピー」と3度呼び子を鳴らした。辺りの小屋小屋から人々が姿を現した。人の出て来ない小屋もある。ジミーは銃を背後に隠し、人々に恐怖心を与えないように配慮した。しかし警戒は怠らなかった。三々五々現れた人々はほとんど服らしい服を身に着けていなく、まるで物乞いのような風体をしている。亜希子も驚いて、一瞬目のやり場に困った。祐子は落ち着いていた。モンジャル老翁が全員に集まるように告げた。集まったのは全部で9人だ。高齢のように見える男性が2人、老女が2人、中年の女性と若い女性、それと子供が3人だった。

「*****」(みんな、良く聞いてくれ。この人達は、数日我々と共に過ごすことになった人たちだ。数少ない、心を許せる人たちだ。ピグミー3人と、調査隊の人たち8人で、このふたりの女性は森の調査をするジュベステル教授という方の助手の方々だ。そして、そこの男性はこの二人の女性を護衛している方たちだ。みんなが疑いの心を持つのもやむを得ないが、私が約束する。この人達は信じて大丈夫だ。みんなもこの女性達に対して危害を与えるようなことをしてはならない。この二人はみんなの所を順番に訪問して、いろいろ話を聞きたいようだ。話せない者もいるだろうが、是非協力してやってほしい)

人々の表情は暗い。虚ろな目をして呆然とモンジャル老翁の話を聞いていた。モンジャル老翁が全員を解散させた。

祐子達はモンジャル老翁に附いて先ず一番端にある1つめの小屋を訪れた。誰も出て来なかった小屋だ。入り口に暖簾のように芦の葉が垂れ下がっている。ジミーを外に残して3人は身体を屈めて芦の暖簾を潜った。部屋の中はじとじととしている。「この小屋は雨が降り続くと部屋の中が水浸しになってしまう」と老翁が言った。小屋の奥に木の枝を継いで作ったベッドが置いてある。その上に芦の葉が敷かれていて、その葉の上にまだ30歳そこそこの女性が横たわっている。目を瞑っていた。

ベッド以外には何も無い。モンジャル老翁が言った。

「****」(私の一人娘プリミテだ。かわいそうに、酷い目に遭った上、死の病を移されてしまった。この娘プリミテには亭主とふたりの息子が居た。街の中でやっと自分の家を建て、それなりの生活を営んでいた。ルワンダのクツ族のジェノサイドを行った残党とこの国の政府軍が戦闘を繰り返していたとき、ある日、夜半に家の扉を叩く者がいた。政府軍の若い5人の男達だった。男達は家の中に入ると、いきなり娘夫婦に銃を突き付けた。プリミテは亭主とふたりの息子達の目前で強姦された。その後で、亭主と息子達がなぶり殺された。プリミテはその時に自分自身を失ってしまった。それからは私がこの娘の面倒を看ている。食事はフフの流動食を口の中に流し込み、垂れ流しの糞尿の世話もしている。身体がだんだん衰弱して、今は元気だった頃の面影も無い。不治の病エイズに冒されているこの身体では、あと1年も持つまい。私は朝夕、神様にプリミテを救ってほしいと祈っているが、一向に意識が正常に戻らない。この娘にとっては意識が正常に戻らない方が幸せかも知れないが・・・)

祐子の眼前に、その時の悲惨な情景がありありと展開された。祐子はプリミテを救ってほしいと神に祈った。亜希子の目は涙で溢れている。祐子はプリミテの側に近付き、まるで枯れ木のように生気を失い、だらしとしていたプリミテの手をそっと取った。祐子の目からひとしずくの涙が流れ落ちた。祐子は瞑目した。プリミテの意識が迷走状態になっているのが分かる。祐子は自分の身体にプラナを充満させた。そして、プリミテの意識の中に入った。祐子はプリミテ自身になった。身体の節々が痛い。手にも足にも力が入らない。祐子は自分の中に充填したエネルギーを身体の全ての細胞に注ぎ込むように意図した。心の中に悲しみと、苦しみと、恐怖と怒りと愛が混沌と渦巻いている。祐子は自分自身の心の整理をした。先ず悲しみを取り除いた。それは天国にいる夫と息子達への愛で置き換えることができた。先ほどから細胞達に注入を続けているエネルギーが活性化してきて、H I Vへの抗体が出来上がってゆくのが分かった。免疫力が強まってきている。それに伴って痛みが薄れ、身

体が軽くなってきたのが分かる。苦しみは自ずと遠のいていった。怒りを取り除くために、祐子は肝臓にエネルギーを注入し、心臓に結婚前の歓喜に満ちた喜びを取り戻して与えた。恐怖に対しては国軍の兵士達の実態をイメージとして何度も繰り返し展開して見せた。その愚鈍で幼稚な姿を何度も見ている間に、男達に対する恐怖は消えた。非常に短い時間で祐子はそれを行なった。身体が正常な状態に復帰し、エネルギーが身体全体に漲ってきたことが分かる、祐子は意識を自分の肉体に戻した。祐子が目を開けると、プリミテが祐子の手を握り返しているのが分かった。プリミテは暫く祐子の顔をじっと見詰めていたが、いきなり大きな声を出して泣き出した。声が詰まって嗚咽となって、咳き込んでしまった。祐子はプリミテを抱き起こし、自分の胸に抱き寄せた。プリミテは祐子の胸の中で暫く泣き続けた。

「プリミテ！」(Primate!)

娘の回復してゆく様子をじっと見詰めていたモンジャル老翁はプリミテの名前を呼んで、近くに駆け寄った。プリミテが老翁の方を振り向いて叫んだ。

「*****(お父さん！わ、わたし・・・わーん、わーん)

祐子の胸から離れ、プリミテはモンジャル老翁と抱き合った。

「*****(おお、愛おしいプリミテ、私の可愛いプリミテ、意識が戻ったんだね。私はなんといった幸せ者なんだ！)

亜希子が椀に入れた野菜スープを持ってきた。プリミテの意識が正常に戻ったとき、小屋を出て、ジミーを伴ってみんなの所に戻り、ソニアに直ぐにスープを作るように頼んだのだった。夕食の準備をしていたソニアはジミーの姿を見ると、急いでスープを用意した。亜希子はそれを持って戻って来たのだった。木の葉の上に蜂蜜も載せてある。亜希子は先ずプリミテに蜂蜜を嘗めさせた。プリミテはほほえみを浮かべてそれをすっかり嘗めてしまった。そして、スープを美味しそうに啜った。細い手足にも心なしか力が戻ってきたように見える。プリミテはスープを飲み終えると、椀を亜希子に返し、両手を前に差し出した。祐子を求めている。祐子はプリミテを抱きしめた。

「あなた、もう大丈夫よ。私が一緒に居てあげるから。もう、病気も消えているわ」

祐子は日本語で言った。プリミテは頷いた。プリミテの目に涙が溢れていた。

モンジャル老翁はプリミテを小屋に一人残して次の家に3人を案内した。部屋を出るときプリミテの方を向いて2度頷いて見せた。

2軒目の家は草葺きの小屋としても比較的出来の良い小屋だった。身体を屈めなくても小屋の中で直立できた。プリミテの部屋と同じように奥に木の枝と草の葉で出来たベッドがある。そのほかにやはり木の枝を組み合わせて作った椅子があった。3本の木を、蔓を使って中間点で結び合わせ、脚を広げて、丈夫に蔓と麻で編み上げた敷物を置き、その上に腰掛けるようになっている。その上に一人の老人が座っていた。床の上には一人の7、8歳ほどの娘が居る。老人は上半身裸で腰に草の前垂れを付けている。娘も上半身裸だが、ぼろぼろの綿の下着を身に着けていた。祐子はポケットの中をあさり、あめ玉をひとつ取り出し、娘に与えた。娘はにっこり笑って、それを口の中に放り込んだ。

「*****」(ボニング、さっき話した調査隊の人たちだ。俺たちがこんな酷い目に遭わされた話を、よく聞いてもらえ。そのことがいつか世界中に知れ渡って、この国をこんな酷い目に遭わせている悪人どもを退治してもらえるかも知れない)

「*****」(ラジュラク、おまえもお人好しだな。俺たちは何度こんな奴らに騙されてきたか知れないじゃないか。初めは善人ぶっていても、そのうち、正体を現すんだ。今に見ている、銃を持っている奴らが俺たちを脅して、奴隷のように使い始める。もう、結果は見えている。おまえも早く目を覚ませ。こんな奴らの言うことを聞いたら、もう俺たちも終わりだ。どこかに売り飛ばされて、豚のように扱われ、使い捨てられるんだ。もっとも、そんなことにならなくても、もうほとんど終わっているがな)

「*****」(ボニング、俺の娘プリミテ、どうなったと思う?)

「*****」(もう、あぶないのか?本当にかわいそうな娘さんだ。

おまえの自慢の一人娘だったのに、運命とは残酷なものだ。俺はプリミテのことを考えると、あまりに哀れで、涙が流れる。俺の息子はウガンダとの戦争で命を落とした。その悲しみと、熱病でこの子を残して妻は死んだ。それを追うように俺の妻も悲しみの中で病に倒れた。それでも、俺はまだまだ。たとえ盗賊に全部持って行かれても、俺にはこの可愛いラミリーが居る。それに比べ、おまえは悲しすぎる。お気の毒にそんなにプリミテは悪いのか？)

「****」(いや、そうじゃないんだ。プリミテは蘇った。元気になったんだ。はっきりは分からないが、エイズの兆候も消えたようだ。何しろ意識が戻ったんだ。みんな、この方のおかげだ)

「****」(それは良かった。おめでとう。だが、それがこの人の力だって証拠はどこにあるんだ。俺はこの目で見ない限り信じない。変な呪いをしたんじゃないのか？プリミテに森の霊が乗り移ったってことはないのか？)

「****」(おまえも疑い深いな。この人、ユウコさんの力が直してくれたことに間違いない。俺の目の前でな)

「****」(俺は信じない。そんなことができるのなら、ひとつ、俺の曲がってしまった指の関節を治して見せてもらいたいものだ。毎日痛くてたまらない。朝は指が思うように動かないし、立ち上がったときに目眩がするほどだ)

ボニング老人は嫌みたっぷりに自分の左手を上に掲げ、掌を広げて見せた。5本の指の関節が膨らみ、指が伸び切らず、ごつごつした形に変形しているようだ。祐子はボニング老人の側に近付き、軽く会釈して老人の左手をそっと取った。祐子は瞑目した。老人の手の指の関節部分を凝視し、関節が真っ直ぐに伸びてゆくところをイメージした。祐子の脳裏にボニング老人の高揚した免疫細胞の攻撃性が次第に弱まって、今まで誤って自分の体の細胞やたんぱく質などに攻撃を加えていた免疫システムが安定状態に移行してゆくのが見えた。関節の自己修復システムが蹶化した指の関節の修復に取り掛かった。蹶が次第に小さくなり、普通の形状に戻ってきた。ボニングの表情が変わってきた。引きつったよう

な感じが無くなり、顔に穏やかさが表れてきた。

「*****」(一体、俺の身体に何が起こったんだ？こんな不思議なことがあるものか。痛みも無くなった・・・俺は間違っていたのか？なあ、ラジュラク)

「*****」(見ての通りだ。俺はこの方に会ったときから、この方の姿に惹かれていた。俺たちとは違う何かを感じるんだ)

ボニングはいつまでも自分の指を不思議そうに眺め、縮めたり、伸ばしたりしていた。亜希子がラミリーの近くに行って、頭を撫でてあげた。ラミリーはうれしそうにあめ玉を口の中でくゆらせた。祐子は賢に物質転送機で少女のスカートとシャツと靴を送ってもらうことにした。ポケットから位置情報端末を取り出し、その情報を読み取ってもらい、少女の丈を伝えた。賢は3時間ほど掛かると応えた。祐子はそれで良いと伝えた。祐子はボニングに自分の立っている場所を示して言った。

「*****」(後で神様にここに「ラミリーの服をください」とお願いしてごらん下さい。神様があなたの願いを叶えてくれるわ。でも、衣類が現れるまでは、決してこの場所には近付かないでね)

その家を出ると、祐子はモンジャル老翁に、3軒目を訪問する前にプリミテの様子を観て来るように言った。モンジャルはプリミテを連れて現れた。プリミテは祐子の姿を見ると、駆け寄ってきて抱きついた。祐子はうれしかった。

「*****」(もう、大丈夫なの？)

「*****」(私、人生をもう一度やり直します。貴女のような人になれるように努力します)

「*****」(元気になって良かったわ。貴女なら、私よりもっと素晴らしい女性になれるわ)

プリミテは弾む足取りで家に戻って行った。家に入るとき家の周りの草の壁面を手で整えていた。

3軒目の家は野戦病院の病室のようだった。モンジャル老翁に連れられて祐子と亜希子が中に入ると、直接土の床の上に芦の葉が敷き詰められていて、その上に身体が触れ合うように5人の男女が横になっていた。

部屋は先ほどのボニグ老人の小屋の1.5倍の広さはある。湿気を帯びたむっとする異臭が感じられた。患者達全員が祐子達に力の無い視線を向けた。それはどんよりとした想念の動きを伴っているようだった。この部屋を入り口から観たときにそれほど大きく感じなかったのは、奥行きが深い為だった。奥に若い26、7歳の女性、その次に40歳前後の女性、更に12、3歳の少女、30歳ほどの男性、50歳前後の男性の5人が横になっていた。この中の若い女性と少女、50歳前後の男性の3人は、先ほどのモンジャル老翁の呼び出しでここから外に出て来た人たちだ。

「****」(ユウコさん、さっきから少し変に感じていたのですが、貴女が部屋に入ると、部屋の中が明るくなったような気がします。気の所為でしょうかね)

「****」(それは気のせいでしょう。モンジャルさん、ここにおられる方々はどのような方々ですか?)

「****」(それは、直接この人達から聞いてください。この人達はいずれも天涯孤独で、しかも不治の病を患っている人達です。この人達の味わった人生の苦痛を、是非聞いてやってください。話したくないところは無理にお聞きにならない方が良いと思いますが・・・)

「****」(勿論、私たちはお話しして下さる方のご意志にお任せ致します)

祐子は先ず入り口に一番近い所に横になっている男性の側に坐った。亜希子も祐子の隣にしゃがみ込んだ。祐子が言った。

「****」(こんにちは。私はユウコ、これはアキです。私たちはルワンダに住んでいます。この森を調べに来ました)

男は身体を起こした。先ほど外に出て来た男性だ。

「****」(本当は、ここに何をしに来たのですか?私はエイズ患者であると1年半の命と医師から宣告を受けています。本当のことを話してください)

見た目には病人のようには見えないが、男性は通常より幾分痩せている。

「****」(笑わないでくださいね。私たちは、本当はあなた方の

国を天国に変えるために来たのです。これは本当です)

「****」(いくら私がもうじき死ぬからと言って、そんな、言葉で癒されるだろうなどと思わないでください。みんなこの国を平和な国にすると言って戦っています。そして、確かにこの国は世界の中でも天国に一番近い国になったかもしれません。せいぜい45年ほど生きれば直ぐに天国に逝けるのですからね。わたしは、もうじき天国ですが、平均より5年も遅れたんで、むしろ神に感謝しているんです)

「****」(いいえ、わたしは本気でこの国を天国にするつもりですよ。この妹のアキと二人で、皆さんと一緒に天国を創るつもりです。だって、この国ほど自然に恵まれ、地球の自然の残っている国は無いのですから。ここはまだ、人間が自分達の住みやすいように手を加えて変えてしまった場所がそれほど多くないでしょう。昔のまま残っている大自然がありますからね。世界中探してもそんな国は滅多にありませんからね。あなたのおっしゃる意味とは少し違いますが、この国が一番天国に近いんじゃないかと思いますよ。但し、ここを天国にするためには、ここに住んでいる人々の心のあり方を、昔のような自然と調和した姿に戻さなくてはなりませんけど)

「****」(あなたは途轍もないことをおっしゃいますが、あのイエス・キリストでさえ、世界を天国に出来なかったでしょう。キリスト教が出来て、その結果沢山の戦いが起きました。こんな言い方をして申し訳ありませんが、あなたはお弱い女性でしょう。一体何ができるのですか？イエスは病人に手も触れずに病を治したと云うでしょう。あなたにそれができますか？最低でもその程度のことはできなくては、誰も附いて来ませんよ)

祐子は軽く頷いて、目を瞑り瞑想状態になり、この男性の体内に蔓延している人免疫不全ウイルス(HIV)の力を押さえ、全て撃退した。男性のエイズは沈静化し免疫力が蘇ってきた。それは祐子にとっては何段階かの処理だったが、男性にとっては、ほんの3、4秒間のことだった。

「****」(あなたのエイズは、もう治りましたよ。HIVは撃退しました。気になるところを確認してご覧なさい)

男性は半信半疑に手足を動かしてみた。ゆっくり立ち上がって首を回し、目をぱちくりさせ、唾を飲み込んでから、腹部を擦ってみた。

「****」(本当に治ったのですか？それはプラス思考とか謂うやつじゃないですか？プラス思考していれば病気も自然に治るとか謂う・・・)

「****」(直ぐには分からないかも知れませんね。でも、もう治っていますよ。天国の話はもう終わりにして、もし差し支えなかったら、あなたの味わった苦しみを教えてくださらないかしら？)

男性は指を曲げたり、腕を伸ばしたりしながら言った。

「****」(分かりました。私は治ったと信じます。その方が自分にとっても幸せな時間が持てますからね。私の生は呪われた生だったのかも知れません。私は結構裕福な家に生まれました。キサングニに住んでいたんです。父はベルギー政府に雇われた役人でした。母もこの国では上流に属する家の出身でした。私は25歳で美しい妻と結婚し、二人の息子と3人の娘を得ました。ご存じのことと思いますが、あのキサングニで起きた大戦争の時、私たち家族はベルギー政府関係者というだけで、当時の政府軍に全財産を没収され、放り出されました。父と母は絶望して、自ら命を絶ちましたが、私と妻はキサングニの郊外の農地を元の地主から購入し、そこで苦勞してキャッサバの栽培で何とか生計を立てるまでになりました。でも、それもつかの間、私が留守の間に銃を持ったごろつきの政府の軍人達に進入され、妻を陵辱されて、子供達を連れ去られてしまいました。それから私と妻は政府にその旨を訴えようと役所に向かったのですが、取り合ってもらえず、笑い飛ばされました。それでも私たちは諦めませんでした。何とか子供達を探し出そうと、日雇い労働の安い賃金で働きながら、生きていましたが、ある日妻がああとき強姦された男の子供を宿していることが分かりました。しかも妻の体調がすぐれず、医者に診てもらって、エイズに感染していることが分かりました。妻は絶望のあまり、気がふれてしまい、いいえ、本当は正気だったのかもしれないかもしれませんが、私の知らないうちに、自ら政府軍の男達の中に自分の身体を差し出しました。そして、男達にもてあそばされる日々

を送り、そのうちの一人から銃を盗り、酔いどれて妻を抱き、そのまま寝入っていた男達を滅多撃ちして殺しました。その場で妻も撃ち殺されてしまいました。その男達が以前妻を手込めにした男達だったのかどうかは今となっては知る術もありません。私は妻の死を知って、自分も死ぬのうと思いました。しかし、この国には私たちよりもっと酷い仕打ちを受けている人たちが沢山居ることを知りました。自分が死んでは、その人達に申し訳ないと思ったのです。いつか、こんな自分でも、誰かの役に立つことがあるだろう、妻や子供達が苦しんだ分、自分も人を助けるために苦しもうと考えたのです。そして、自分自身もエイズに感染していることを知ったときは、この苦しみを背負って妻や子供達を弔いながら生きられる限り生きようと考えました。だから、国軍やクツ人軍の目を避けて、この森の人たちの仲間に加わりました。ここには何も無いから、誰も襲って来たりしませんからね。でも、私は身体を動かすのも苦痛になって、人の役に立つどころか、周りの人たちに助けてもらって、やっと生きているだらしない人間に成り下がってしまいました)

祐子は話を聞いて、涙を拭った。亜希子も目を潤ませている。

「*****」(これから一緒に、この国を本当の天国にするために頑張らしましょう。あのう……)

「*****」(ムバンラクです)

「*****」(ムバンラクさん、共に頑張らしましょう)

ムバンラクはまだ話したいようだったが、隣に横になっている男性の悲しそうな目が気になり、祐子は隣に移動した。亜希子はムバンラクの近くに坐ったまま、祐子の動きを見ていた。祐子は30歳ほどに見える男性の直ぐ側に近付き、しゃがみ込んで男性に語り掛けようとした。男性はいきなり祐子の腕をつかんだ。祐子は慌てなかった。男性は祐子を自分の身体の方に引き寄せようと腕に力を入れた。「ぐきっ」と音がして、指の力が抜けたように男性は祐子の手を放した。

「*****」(ああ、だめだ。俺はもう女も抱けなくなっちゃった。腕にさえ力が入らない。俺はおまえのような美しい女とやりたい。だけど、身体が言うことを訊かない。おまえは綺麗だ。俺の身体が良く

なったら、必ずおまえを抱いてみせる。おまえは綺麗だ)
ムバンラクが言った。

「*****」(ユウコさん、我慢してやってください。ガブラ、こいつの名前なんですがね、ガブラのやつ、あと3ヶ月も持たないって言われているんです。まだ身体は若いんですが、エイズだけじゃなくて、腹の上の方にでっかい固いしこりがあるんです。それが、もうこいつの息の根を止めようとしているようなんです。罰が当たったんでしょうけどね。夜中に這い回って苦しがるんです)

「*****」(うるせえな、爺(じじい)。爺は引っ込んでいろ。俺はもうじきこの世界から消えてしまうんだ。生きている間に楽しまなくちゃつまらないじゃないか。ええ、お姉ちゃん、そう思うだろう?)

「*****」(私はユウコっていうのよ。生きている間に・・・楽しむんじゃなくて、喜びに満ちているって言ってほしいな)

「*****」(おっ、お姉ちゃん、話が分かるじゃないか。あんたとやれたら、どれほど喜びを感じられることか知れないぜ。できることならな・・・)

「*****」(喜びは喜びでも、心の喜びよ。大自然の中で生きる喜び、沢山の人たちと共に生きる喜び、家庭を持ち、家族と団らんの日々を過ごす喜び、そういう喜びよ)

「*****」(それに、やったときの恍惚感の喜び、それも入れといてくれよ)

「*****」(分かったわ。あなた、頭は元気そうだから、私が病気を治してあげるわ)

「*****」(隣のじじいの様子観ると、確かに元気になったみたいだ。ほんとに俺を直せるのか?そしたら、俺はあんたのために何でもしてやるぜ)

「*****」(そう、それじゃ直してあげる)

「*****」(ちょっと待てよ、俺のことを何も知らないでも直してくれるって言うのか?隣の爺も、周りの女どももみんなエイズ患者だぞ。治らない病気だ。俺はその中でも一番酷い。その上、この瘤がだんだん

でかくなってきて夜中に暴れやがる。それはな、俺がいままで、ずっと悪いことをしてきたから、森の精霊が怒って俺を罰しているんだってみんなが言うんだ。確かにその通りだ。俺はみんなとは違う。俺は根っからの悪人なんだ。俺がどんな悪いことをしてきたか聞いたら、あんた逃げ出すぜ。いいか、おれはまだ20歳になる前に、銃を手に入れた。そして、どこの軍だった覚えてないが、兎に角、軍に雇われて、大勢の人たちを殺した。子供も殺した。それはむごたらしい殺し方だった。今、俺はそれを思い出ただけで、身の毛がよだち、身体中の血が引いて行くのが分かる。おれは大勢の女を犯した。亭主の前で奥さんとやったこともある。強盗もした。生活の苦しい家族に押し入って、銃を突き付けて、家財道具を全部かつさらった。そうしておいて、家中を銃で撃ちまくった。こんな男なんだ。「おまえのような奴は殺してやりたい。生きている価値なんか無い」とみんな言う。だけど、そこに立っているモンジャル爺さんだけが違った。俺を助けた。銃で撃たれて、死にそうになっていたとき、助けてくれた。何でこんな俺を助けたのか、何度聞いても教えてくれない)

モンジャル老翁は僅かに微笑んでいるように見える。祐子が横になっているガブラに身を寄せて、添い寝しながら言った。

「****」(私を抱きしめなさい。頑張って力を振り絞って、そう、両手で私の肩を抱き締めなさい。思い切り抱き締めるのよ。私とやっていると想像しなさい。良いわね。一番気持ちの良い、喜びの中に浸っているのよ。ずっとずっと)

ガブラは良く動かない両手を必死に動かして祐子を抱き締めた。首を動かすこともできない。祐子はガブラに口づけした。亜希子は顔色が変わった。相手は重度のH I V感染者なのだ。祐子にエイズが移ると思った。祐子は瞑想状態になった。男の身体はいたところがH I Vウイルスの攻撃を受けている。祐子は自分にプラナを注入し、それを檀中からガブラの檀中を通して身体全体に注入した。大波が引く勢いでH I Vウイルスが消えていった。祐子はプラナの注入を続けた。喜びの意識がガブラの身体全体に漲ってきた。祐子はガブラの腹部を透視した。肝臓の半分

以上が癌細胞で硬化していた。癌は肝臓だけではなく。肺にも、膵臓にも転移していた。祐子は細胞達に語りかけた。「あなた方はこの男を元に戻すために努めなくてはいけない。この男には、今世でやり遂げなければならないことがある。あなた方と共に生き抜かなくてはならない。直ぐに元の状態に戻りなさい。自らが誤った形態に変化してしまったことを自覚したら、自己消滅アポトーシスのプロセスに入りなさい。あなた方の意識は正常な形に戻って受け継がれます」祐子は強く意識した。自分の背中に回しているガブラの手に力が入ってきたのが分かった。ガブラは祐子を力強く抱きしめた。ガブラは自分の手が思い通りに動くことに気付くと、いきなり、祐子の背中から手を外し、祐子の胸のボタンを外した。祐子の乳房が露わになった。祐子は黙っていた。ガブラはボタンを2つ外し、祐子の胸の中に手を差し込もうとして止めた。ガブラの目に涙がこぼれ落ちた。ガブラは祐子の肩に両手を当て、祐子の身体を自分から離れた。

「*****」(あなたは、どなたですか?)

「*****」(わたしはあなたよ。もう大丈夫よ。全部良くなったわ)

「*****」(これから、俺はどうしたら良いのか教えてください)

「*****」(あなたは、ただ精一杯生きれば良いのよ。この美しい世界の中でね)

ガブラは起き上がり、床に座り、頭を床にすりつけた。祐子は軽く頷いた。亜希子の目に涙が流れた。モンジャル老翁の瞳も潤んでいた。

祐子は次の患者、少女の側に寄った。

「*****」(あなた、ひとりぼっちなのね。今一番したいことは何?)
娘は俯いたまま暫く黙っていたが、祐子が娘の手をそっと取って、掌でゆっくり手の甲をさすってあげると、娘の唇が動いた。

「.....*****」(おかあさん)

ムバンラクが言った。

「*****」(ミンミ、話せるじゃないか。ミンミが話したぞ)
祐子はミンミの肩を優しく抱き寄せて言った。

「*****」(お母さんに会いたいの?)

ミンミは黙って頷いた。目に一杯涙を溜めている。祐子は亜希子の方を流し観た。亜希子は頷いた。亜希子はミンミの近くに来ると、ミンミの頭の側に落ちている髪の毛を一本拾い、瞑想状態に入った。意識を髪の毛の細胞を通り抜けて幽界におもむかせた。ミンミの母親は既に亡くなっていて、娘のミンミから意識を逸らすことができず、幽界の中を彷徨っていた。その念の強さは現世のミンミの意識に作用して、彼女の心を母への思いに縛り付けているのだった。亜希子は母親に対して、いつものように日本語で話しかけた。

「あなたはもう、亡くなっているんですよ。亡くなった人は、霊界に戻らなくてははいけないですよ」

「・・・あなたは誰？なぜ、私のことを知っているの？」

「私は今、あなたが生きていたコンゴの森の中に居るのよ。そこに、病気のミンミ — そうあなたの可愛い娘さんが居るのよ。あなたのことを思って、言葉も話すことができないみたいなのよ」

「あの娘は私の宝物なの。ああ、私の大好きなミンミ、どこに行ってしまったの？」

「ミンミは森で生きているのよ。あなたの愛情は素晴らしいわ。でも、ミンミを縛り付けてしまっっては、ミンミが子供らしく、喜びに満ちて生きてゆけないのよ。ミンミの為を思うのなら、ミンミの幸せを神様にお祈りして、自分が亡くなってしまったことを受け入れるのよ」

「ミンミに会いたい！ミンミに一目でも会えたら、私はもう消えてしまっても良いわ。私は亭主を軍人に殺され、生きるために身体を売って、ミンミを育ててきたのよ。お客さんには避妊具を使ってもらおうようにしていたのに、乱暴な商人に、付けないでされて、エイズに感染してしまったの。そんなこととも知らずに、私はあの娘をかわいがったのよ。いつもキスしてあげていたの。だから、あの娘にもエイズが移ってしまったのよ。かわいそうなミンミ」

「ミンミは直ぐに治るわ。いまミンミに会わせてあげます。でも、約束してくださいね。ミンミに会ったら、もう彼女を縛り付けなくていい」

「分かったわ。でも本当に治るの？うれしい！もう心配ないのね」

亜希子は一旦自分の身体に意識を戻した。祐子がミンミの手の甲をさすっている。

「お姉様、ミンミに、目を瞑ってお母さんのことを思い出しながら呼ぶように言ってください」

祐子は頷いた。

「*****」(ミンミ、お母さんに会いましょう。さあ、目を瞑ってね。そして、お母さんのことを思い出して、呼んでご覧なさい)

ミンミは目を瞑り、暫くして、大きな声で叫んだ。

「*****」(おかあさん)

亜希子は直ぐに幽界に戻った。母親は亜希子を待っていた。

「さあ、今、ミンミがあなたを呼んでいるわよ。ミンミの姿を思い浮かべてごらんなさい」

幽界の中にミンミの姿が現れた。母親はミンミに駆け寄ると、思い切り抱きしめた。亜希子は一瞬そこが幽界であることを忘れた。ふたりの姿はあまりにもリアルだった。しっかりと抱き合っている手が相手の身体を突き抜けることもない。暫くしてふたりは話し始めた。

「ミンミ、ひとりぼっちにしてごめんね。お母さんは死んでしまったのよ。でもね、いつもあなたの側に居るから、安心してね」

「おかあさん、本当にずっと側にいてくれるのね。私、お母さんのことが世界中で一番好きなんだから、私を守っていてくれなくちゃいやよ」ふたりは暫くの間抱擁し合っていたが、やがて亜希子に導かれて、ミンミの意識が自分の身体に戻った。母親の近くにカラフルな衣装を身に付けた黒人の女性が現れ、母親を霊界に連れ去った。亜希子が自分の身体に意識を戻すと、祐子がミンミのエイズの治療をしていた。治療が終わると、亜希子がミンミに向かって言った。

「*****」(お母さんは今、天国に行ったわ。あなたも祐子お姉様に病気を治して頂いて、元気に生きるのよ)

「*****」(はい、お姉様、ユウコママ)

いつの間にか、ミンミは祐子を母に重ねていた。祐子はミンミを自分の胸に抱き締めた。